人間の〈こころ〉と〈ことば〉の真実。

コトタマ学入門

島田　正路　著

はじめに

私たち日本人の心の故郷であり、また日本語が作られる語源ともなった日本民族伝統の言霊学（コトタマのマナビ）紹介の書を世に贈ります。この日本最古の学問は今から千二百年余以前に編纂された『古事記』・『日本書紀』の神話の黙示（謎）を解くことによって復活したものであります。伝統の言霊学復興の作業は明治より今日まで約百年の歳月と先輩諸氏の熱意と努力によって、ここにようやく実を結ぶことができました。日本の皆さまにこの太古の学問を現代の言葉でお伝えできることを誠に光栄と思っております。

コトタマとは大昔からある言葉で、日本の国のことを「言霊の幸倍う国」と呼び、古い歌集である『万葉集』に「言霊の……」で始まる歌（万葉集下巻二五〇六）が載っています。

言霊の八十の衢に夕占問う占正に告る妹はあひ寄らむ

日本が第二次世界大戦による大打撃からようやく経済的に立ち直ってきた昭和六十年頃から、日本の吉き時代への懐古の風潮に乗って、言霊という言葉を色々な知識人の方々が口にするようになりました。本屋さんの店頭には十種類以上の言霊の本が並んでいます。それらを拝

見しますと、それぞれ論点は違っていましても言霊とは「日本語の中に込められている魂」という点では一致しています。

この書で紹介させていただく「言霊」は右の言葉の魂という意味を含みながら、さらに深く広い意味を持っています。お読みくだされば直ぐにご理解いただけることですが、言霊学とは日本の古代では極めて常識であった壮大で緻密な体系を持つ人間の心と言葉の法則に関する日本伝統の学問であります。

私たちが日頃使っている日本語の大部分はこの言霊学の法則によって作られました。春に先駆けて咲く梅の花を何故「うめ」と呼ぶのでしょうか。文章を書く筆を「ふで」と名付けたのは何故でしょうか。言霊学はこれらの物と事の命名についての疑問を解決してくれます。言霊学は古代より現代に至る歴史のバックボーンであると同時に、今日の日本語の中に脈々と息づいている人間の心の原理でもあります。

本書は言霊学紹介の入門書でありますので、『古事記』・『日本書紀』の神話から言霊学への道筋の解明などの話は言霊学本論の書に譲り、日本人が日頃興味を持たれる事柄から言霊の解説をさせていただくこととしました。この書をお読みくださり、日本語に秘められた心と言葉の法則に興味を持たれた方は、さらに言霊学の深奥にお進みください。現代という時代を迎えた日本と世界の真実の姿を見つめ、次の時代へ進む見通しを手にするこの上ないよすがとな

ることでしょう。その上で混迷する世界情勢に対処する日本人としての使命にもお気付きくださることともなりましょう。

平成十二年二月

著者識す

（この書は先に出版された『コトタマの話』の大改訂版です。）

目次

はじめに……3

第一章　日本語について……13

日本語の起源……14
日本的なもの……17
コトタマとは……21
文明のはじまり……29
霊の本（日の本）……35

第二章　コトタマの原理……39

コトタマの原理……40
五十音とその区分……43

心の構造……46
心の先天構造……57
思考のはじまり……60
梅の花……63
松風……65
経験知と実践智……67
生命意志……69
五種類の五十音図……76
第三章　天地の初発の時……81
天地の初発の時……82
古事記……87
易経……97
第四章　言霊学の歴史……101

言霊学の歴史　その一……102
言霊学の歴史　その二……106
言霊学の歴史　その三……113

第五章　日本神道について……117
神様に対する態度……118
鈴……122
二拍手……125
鏡餅……130
春の七草……135

第六章　皇室と言霊……137
三種の神器……138
菊の御紋章……149

第七章　伊勢神宮と言霊　153
伊勢神宮　154
唯一神明造り　155
心の御柱　156
心の御柱と御神体　165
内宮と外宮　166
床板　168
木階　170
千木　173
鰹木　175
第八章　昔からの謎々　179
日本のおとぎ話（桃太郎）　180
カゴメ、カゴメ　185
前方後円墳　191

第九章　事や物に名前を付けること　201
机、筆　202
事や物に名前を付けること　207
和ということ　211
第十章　現代と言霊学　217
大脳生理学と言霊　218
教育と言霊　230
コンピューターと言霊　238
日本・東洋・西洋　242
おわりに　253

第一章　日本語について

日本語は不思議な言語です。長い長い間、この日本列島に住んでいる日本人によって使われている言語なのに、それがどのように作られてきたかが、全く分かっていません。また、日本語は世界中のどの言語ともかけ離れた構造を持った言語です。

その日本語のルーツに光明が差し始めました。長い間、日本人の意識の底に眠っていたコトタマの原理が目を覚まし、世の中に復活してきました。日本語とは極めて厳密な霊妙な法則の下に作られた珠玉のような言語だということが分かってきたのです。日本語は私たちの大先祖が遺してくれた偉大な遺産であり、秘宝であります。

日本語の起源

今から十数年前、東京で「日本語の起源」に関する研究討論会が開催されました。日本はもとより東洋、中近東、西洋から大勢の研究者が集まり、十日間にわたる熱心な討論が行われました。言語学・比較言語学・文化類型学・歴史学その他色々な分科会に別れた討論、全体総会など、大掛りな研究会でした。

しかしながら、研究会が終わり、新聞紙上に発表された討論の結論は「不明」ということでした。日本語の起源は現在の学問の研究の範囲では分からないのだ、というのが結論だったのです。世界の英知を集めた研究会にもかかわらず日本語の起源は何故分からないのでしょうか。

通常、一つの民族の言葉の起源を研究する場合、大きく別けて二つの方法が考えられます。

その一つは同一民族の言葉の中から同じ単音が使われている言葉、例えば田（た）、滝（たき）、狸（たぬき）、竹（たけ）、……等「た」の音の入っている言葉を集め、その中の「た」の音の共通の意味を探し出していく方法です。この方法で五十音の一つ一つがどういう場合に使われるかによって、その民族の言葉が作られてきた法則を見付けることが出来るという考え方です。

もう一つの方法は、比較言語学と呼ばれる方法です。歴史的に関係が深いと思われる国々の言葉の中から発音が同一か、または非常に似通った発音の言葉を見付け出し、その意味内容の比較によって民族の言葉の起源を探る方法です。

世界中から学問の専門家が集まり、十日間の研究討論の結果、日本語の起源は分からないとの見解がなされたということから、以上の言語を研究する二つの方法によっては、日本語の起源を解明できないことがはっきりと示されました。

そうです。現代の言語学が用いている方法——多くの共通点を持つ言葉を集め、その比較検討から言葉の起源を探し出す、いわゆる帰納法的な方法によっては、日本の言葉は決してその起源を探すことは出来ないでしょう。しかし、現代の言語学的方法では日本語がどうして作られたかが求められないからといって、日本語に法則がない、というのではありません。それどころか、日本語ほど厳密な法則によって作られている言語は世界中にない、といっても過言ではないほど、日本語には厳密な法則があるのです。ただ現代の言語学や心理学等々では決して到達することが出来ない人間の心の深部の真相・法則に従って作られているのです。

そしてその心の深いところにある法則、それが私がこれからお話をしようとしている「コトタマ」のことです。私たちが日常何気なくしゃべっている私たちの日本語は、この「コトタマ」の法則で出来上っています。

この「コトタマ」の法則は極めて厳密なもので、決して誇張ではなく現代隆盛を極めている物質科学の諸法則と全く同様と言い切ってもよいほど厳密・詳細なもの、ということが出来ます。

日本語が初めにどのようにして作られたかを語る場合、「コトタマ」を離れてはお話することは不可能なのです。「コトタマ」こそ日本語の起源なのです。

日本的なもの

ここ十年ないし二十年間の日本経済の躍進には、目覚ましいものがあります。当の日本人でさえ驚くほど、日本の企業は大きくなりました。日本経済を抜きにして世界の経済は考えられません。日本企業の国際化は、さらに進むことでしょう。

日本人が世界各地に進出していくと同時に、世界中の文化や産物が日本に入ってきました。日本に、特に首都である東京にいて世界中の食物を味わい、世界各地の人に会い、世界中の服装を見ることが当たり前のようになりました。

日本の中の国際化が進んでいます。街を歩いていて外国語の氾濫には全く驚かされます。そして、日本文化の国際化の波はますます大きくなることでしょう。と同時に純粋に日本的なものを求める風潮も起こっています。例えば、茶道・華道から能・歌舞伎などが盛んです。和服を着る人も一時よりは減ったようですが、結婚式でお婿さんの羽織・袴、お嫁さんの島田髪に振り袖や打ち掛けの姿をよく見かけます。その他、和食や国技の相撲など、日本的な文化も決して衰えてはいません。

以上、日本的なものを数々挙げてみました。しかし考えてみますと、これらの日本的と思われるものも、そう遠い昔から日本にあったものではないようです。その起源は古いものでたかだか千年くらい、その他茶道などせいぜい四百年くらいしか経っていないのです。千年、二千年以上も前から日本人はこの国土に住んでいたのですから、日本人固有のもっと日本的なものがあるはずではないでしょうか。

そうです。あるのです。それは私たちが日常何気なく使っている日本語です。日本語ほど日本的なものはありません。「なあんだ、そんなことか」とあまり気に留めない人もいらっしゃるかも知れません。だとしたら、その人は言葉の人間生活全般に対して持つ重要性をご存じない人です。

人間はある考え、ある出来事を他人に伝える時に言葉を使います。言葉は確かに心の伝達手段です。その出来事や考えなどが珍しかったり、世の中に重大な関係があることだったりすると、人から人へ、また人へと伝達されて社会全体に広がります。いわゆる口コミです。この人から人への伝達手段としての言葉があまりにも目立つ存在でありますので、人々は言葉の持つその他の意義をややもすると忘れがちです。

人はしゃべっている時、言葉を使います。それだけではありません。まだ言葉にならず、頭の中で考えている時も言葉で考えています。頭の中を無言の言葉が駆け廻っているのです。ま

た考えがまとまり、何か行動を起こした時も、言葉として口に出していない時も、手や足や体は頭の中の無言の言葉に従って動いています。考えている時も、しゃべっている時も、しゃべらずに体を動かし行動している時も、人間はすべて言葉によっています。としたら言葉とは人間の生活のすべてなのだ、ということが出来るのではないでしょうか。

日本人は生まれた時から日本語で育ちます。アメリカ人はアメリカン・イングリッシュで、ドイツ人はドイツ語で話し、育ちます。そして各国の言葉は、それぞれ特有の発音や法則、その他言葉全体の起源や構造を持っています。人々が言葉によって育ち、言葉によって生活しているというのならば、日本人の生活、心の持ち方、日本人の特徴など、そのすべては日本語によって定まってくる、ということがいえます。

右に述べたように考えますと、最も日本的なものは何か、それは日本語である、ということが出来ます。日本語ほど日本的なものはありません。

日本人の遠い祖先が、この日本列島で文化を持ち始めたのはいつ頃であったか、歴史学的にも、考古学的にも未だはっきりと確かめられてはいません。言葉はその民族の文化の重要な要素ですから、日本人が文化を持ち始めた時から日本語は作られていったはずです。日本人がどのくらい昔にこの日本で文化生活を始めたにせよ、日本人と日本語は同じ年月をこの列島で共存してきたことは間違いないのです。日本語こそ最も日本的なものである、という理由はここ

にあります。

さてその日本語はどのようにして作られたのでしょうか。何によって作られたのでしょうか。そこに「コトタマ」が登場します。日本語は「コトタマ」によって作られました。そして日本人は「コトタマ」によって生きているのです。いや、広い意味では世界の人々全部が「コトタマ」で生きているということが出来ます。

さて遠巻きの説明はこれぐらいにして、日本語を作っている「コトタマ」とは何か、の直接のお話に入ることにしましょう。

「コトタマ」とは

目を開いて眼前のものを見ましょう。紙があり、鉛筆が見えます。本があります。それらを乗せている机があります。それからそれへと視線を移しますと、壁・窓・カーテン・サッシュが目につきます。窓を開けると、木の緑が眼に飛び込んできます。街灯が立っていて電線があり、隣の家が見えます。その上に青い空が広がっています。夜ともなれば月が出て、星が瞬いているのが見えることでしょう。星の向こうにまた星があり、そのまた向こうは……果てしない宇宙が広がっています。

このように目に見える宇宙は、それを見ている自分の外にある物質的な宇宙です。この宇宙の中には多種多様、実に様々な物体が存在しています。ミクロのものからマクロのものへ、原子、分子、細胞、細菌から地球、星、太陽、銀河系宇宙へ、まさに無数のものが、また無数の出来事（現象）が存在しています。

さてここで、窓を閉じ、自分の椅子に座って静かに眼を閉じてみましょう。何も見えなくなると、まず今まで見ていた外界のものが思い出されてくるでしょう。「外は良い天気で太陽の

光がまぶしかった。木々の緑はもう春を告げていたな」等々。これは記憶という心の出来事です。その自分の外に見たものの記憶以外のこと、「ああ、少々腹が減ってきたな。もうお昼だろう」「昼食は何が出るかな」……から「野球の結果はどうかな」「選挙では誰が勝つのか」等々、思いは思わぬ方向に発展して際限なく広がります。

このように心の中の出来事・現象が起こる場所、それはまた思い付きや想像によってどこまでも広がります。思いがどこまでも広がる世界、これは物質宇宙に対して心の宇宙ということが出来ます。そして人間の肉体は物質宇宙の中に動いています。人間の心は心の宇宙の中に生きている、ということが出来るでしょう。

人類が外の世界の「物」というものに目を向け、「物とは何だ」という疑問に答えを出そうと研究を始めてから何千年が経ったことでしょうか。今から三千年以上昔、東洋の古代科学である錬丹還金術や本草学・東洋医学などが発見されていたことが記録に載っています。また戦争の武器にしても、石器より銅の剣が、銅より鉄の剣が有利です。この理由からも古代科学の研究が進んできたことでしょう。

近代になって物質科学の発達には目覚ましいものがあります。物質をもうこれ以上分割出来ないところまで分析して、物質の元素や分子を発見しました。二十世紀に入って興った原子物理学は、原子の核の内部に研究のメスを入れ、物質の究極の構造を明らかにしようとしていま

す。原子核内のエネルギーの開放に成功し、原子爆弾が日本の広島・長崎に落されて第二次世界大戦は終わりました。今や世界の各地で何百という数の原子力発電所が稼動しています。近代科学はこの原子力エネルギーの他に、バイオテクノロジーとか、超伝導とか、情報分野などに、昔から思えば夢のような成果を挙げ、世の中は便利すぎるほど便利になりました。

人類は数千年以前からの「物とは何であるか」の疑問に、一応の答えを出せるまで科学を進歩させたのでした。自然の環境の下で存在する物質元素九十数種、人工的に作り出した環境の下で発見される元素を加えると、百数十種の元素が確認されています。

それだけではありません。科学はこの宇宙の中に存在している種々雑多の物質を構成している究極の要素である元素をすべて明らかにしたばかりでなく、その元素の壁を打ち破って「物」そのものを形づくっている、目に見えない部分、物質の先験的な構造である電子から陽子・中性子等々の原子核内構造まで解明したのです。科学が物質の先天と後天の全内容をすべて明らかにする日も間近いことでしょう。

以上、見る人の側からは、外の世界である「物質とは何か」を研究した人類の科学の歴史を振り返ってみました。さて、それなら見る側である人の心とは何なのでしょうか。このことを振り返ってみましょう。

人類が「物とは……」の問を発してよりさらにずっと昔、「人間には心がある。心とは何な

のだろうか」と考え始めた人がありました。そう考える人が一人、二人と数を増していきました。そして、いつしかそれらの人々は中東アジアか南アジア地方、多分現在のイラン、アフガニスタンかチベットの高原地帯と思われるところに集まってきました。そして「人間の心とは何か」の問への完全な答えを出すことに全力を傾けて、力を合せて取り組んだのでした。

心の研究の中で、彼らが最も関心を置いたのは、心と言葉との関係でありました。どのくらい長い年月が経ったことでしょうか。多分、人類が「物とは何か」の結論を出すことが出来るまでと同様に、長い年月を必要としたことでしょう。その人たちは自分の心の中に深く深く分け入り、その体験を持ち合ってお互いに議論したことでしょう。そして長い間の試行錯誤の末に、遂に「人間の心とは何か」の問に、明快な答えを出すことに成功したのです。人間の心はどのようなものから成り立ち、どんな構造をしており、それがどんな動き方をして、どのような現象が現れるのかを、ことごとく解明したのです。現代の科学が物質とはどのように成り立ち、どんな構造を持ち、どんなメカニズムでどのような反応現象を生ずるのかを解明するのとちょうど同じように。

さて、その解明された心の原理についてお話しましょう。

人間の心はきっちり五十個の要素から成り立っています。その一つ一つの要素は、もうそれ以上分けることが出来ない、分解出来ない究極の要素です。その要素のそれぞれ一つ一つに、

現在日本人が使っているアイウエオ五十音の一音一音を当て、組み合わせて「コトタマ」と呼びました。漢字を当てると「言霊（ことたま）」となります。そうです。人間の心は全部で五十個のコトタマから成り立っているのです。人間の生きた心、言い換えますと人間の精神生命は五十個のコトタマから出来ており、ちょうど五十個で、一個でも多くも少なくもありません。

こうお話しますと、読者は「近頃よく耳にするコトタマと、この本で読むコトタマとは言葉は同じでも内容は違うようだな」とお気付きになることでしょう。この本の「はじめに」にも書きましたように、最近、特に「コトタマ」が静かなブームになっています。それらコトタマの内容や説明はまちまちですが、そのコトタマの意味が言葉にこもっている「魂」という点においては共通しています。

朝、目を覚ましたら「私は幸せだ、幸せだ」と口に出していうことを奨める宗教があります。すると自然と幸せな境遇に変わっていくといいます。また人に知られぬように、夜中、神社の森の木に相手の名前を書いた紙を中に入れた藁人形を五寸釘で打ちつけ、毎晩その釘を金槌で打ちこんで「死ね、死ね」と口に出して呪い殺そうとするドラマの場面を見たことがあります。どれも言葉の中に込められている心霊的エネルギーが言葉の内容を成就させる力がある、すなわち言葉に魂がこもっているという意味でのコトタマです。

本書の中でお伝えしようとする「コトタマ」は、それとは全く違うものです。この本でいう

「コトタマ」は、心の五十個の要素と結び付いたアイウエオ五十音の中のそれぞれ一音です。日本の言葉を形づくっている単位の一音一音です。

ただ一音「い」と言ったら、皆さんは何を連想するでしょうか。井、五、居、衣、医、胃、意などでしょうか。「あ」と言ったらどうでしょうか。短い驚きの声か、英語のA（一つの意）でしょうか。また昔の一人称「我（あ）」のことでしょうか。それでは一音「さ」と言ったら何でしょう。よく考えてみないと「さ」一音では具体的なものを思い出せないでしょう。強いて言えば「左」ぐらいでしょうか。右のように一音だけで具体的な物を指す名前もありますが、音によっては一音では意味を成さないものも多いのです。日本語の多くは二音以上が組み合わされて事物の名前となります。やま（山）、かわ（川）、ふくろ（袋）……等々です。

この一音一音ではあまり具体的な物や事の名前にならない、無意味と思われるアイウエオ五十音の一音一音が、実は日本語においては極めてはっきりとした意味内容を持った音なのです。しかも、そのどれを取っても決して重複した意味内容のものは存在しません。またその一音一音が、それ以上には決して分析することが出来ない究極の心の要素なのです。この言葉の要素である五十音の一音一音が、人間の心を形づくっている究極の要素の一つ一つと結び付いたもの、これが「コトタマ」です。日本語本来のコトタマとは、こういうもののことをいうのです。

コトタマとは言（こと）の霊（たま）のことではありません。言（ことば）の単位であると同時に霊（たま、

こころ）の単位でもあるもの、言であると同時に霊であり、霊であると同時に言でもあるもの、これがコトタマです。

この項の初めに人間の外界と内界を分けて考えてきました。外の物質界と内の精神界です。物質的宇宙を分析して最後に発見されるのが物質の元素・分子・原子・電子・原子核の内部の陽子とか中性子とかの要素です。それと反対方向に心の宇宙を分析して最後に存在するもの、これが「コトタマ」ということになります。

そして、以上の物質的外界宇宙と精神的内界宇宙とは、よくよく考えてみますと、ただ一つの宇宙を外側に向かって研究するのと、内側から見るのとの違いであって、いわば一つの宇宙を裏と表とから見たことになります。手を掌（てのひら）と手の甲の方の二方面から見たことになります。表から宇宙を見た現代科学と、裏から見たコトタマの原理を比較対照して見るとどんなことになるか、また五十音のコトタマというからには、五十音の一音一音がそれぞれ心の内容のどれと結び付いているのか、などの話は誠に興味津々といったところなのですが、ただここでは「コトタマ」とは何か、についての結論だけを挙げるに留めます。

人間の心の宇宙が全部で五十個のコトタマで構成されていることが分かりました。人間は生まれながらにして五十個のコトタマで構成された心を授かっている、ということになります。人間はその心で考えたり、しゃべったり、仕事をしたりしています。ということは、人間は五

十個のコトタマを動かし、運用・活用して生活しているということです。生活の習慣で無意識に体を動かしていると思われる動作でも、人の心の宇宙の中のコトタマは大変めまぐるしく動き、働いています。朝起きて顔を洗うにしても、毎日のことでほとんど神経を使わずに行う動作も、心の要素であるコトタマの綿密な動きに頼って行われています。

心の動かし方、それはコトタマの動かし方ということが出来ます。そのコトタマの動かし方にどんなやり方があるのか。コトタマの発見に成功した人たちは、次にこの問題に取り組みました。そして五十個のコトタマの動かし方、運用法もまたきっちり五十あることを発見したのでした。人間の心の現れ方（現象）は多種多様で、心の動き方も無数でありますが、心の奥の奥の要素であるコトタマからみますと、五十個のコトタマが五十通りに動くことしかないのです。それによって千差万別の色々な現象が発生してきます。この五十個の要素と五十個の動き、合わせて百個の原理がコトタマの学問の基礎となっています。個々のことについては次ページ以降で述べていきます。

文明のはじまり

コトタマのことを単に一音で霊と呼ぶこともあります。現在でも神社で御神体を納める容器を樋代または「みひしろ」といいます。樋代の「樋」は霊の字がいつの時代か変化したものです。コトタマを自分の心に自覚した人を、霊を知る人の意味で「霊知り（聖）」と呼びます。言葉の原理を知っている人という意味です。漢字でも聖の字は、耳と口の王様と書いてあるでしょう。

アジアの高原地帯で悠久の年月をかけた研究の末に、人間の心とはいかなるものかの全部を解明した霊知り（聖）の集団は、ある時がきて研究の計画をさらに一歩進めることにしました。それは、発見した心と言葉の原理に則って、その原理がそのまま生かされる人間の社会を建設しよう、という計画です。仲間の中から選ばれた霊知りの集団が、社会を作るのにふさわしい気候の温和なところを求めて高原地帯から下って行ったのです。

霊知りの集団は、多分今のシルクロードを通り、中国から朝鮮半島に歩を進めました。その経路ははっきりしませんが、最終的に「ここ」と定住を決定したところは明らかです。そこは、

私たちの住む日本列島でありました。この霊知りの集団こそ私たち日本人の祖先であります。日本の昔の本である『古事記』や『日本書紀』の中の神話では、この集団の日本列島への渡来を「天孫降臨」と呼んでいます。

こんな文章を読んだ読者は、多分筆者が何の根拠もない空想か、絵空言を楽しんでいるのだろうと思われることでしょう。しかし決してそうではないのです。そうお話する確かな証拠がこの本一冊ではとても書き切れないほど揃っています。コトタマとは何かを知って、現代の言語学や、比較言語学では決して解明出来ない日本語の本質を明らかにする方法をつかんでみますと、この本に書かれた趣旨の大筋が、極めて身近なこととして頷いていただけることと思っています。

霊知りの集団がこの日本列島で活動を開始したのはいつ頃のことだったでしょうか。正確に断定することは出来ません。ただ、現代の歴史学や考古学が考えるよりさらにずっと遠い昔、今より八千年くらい前の時代であったことは間違いないようです。「八千年も前なんて全く無茶な言い方だ。日本の歴史はたかだか二千年前が明らかではないのに」と、いわゆる有識者はお笑いになるかもしれません。けれどこれにも確たる証拠があるのです。後の項でまことに興味ある証明物語をお話したいと思います。

私たち日本人の祖先の集団が、この国土に来てまず最初に手を付けた仕事は何だったのでし

ようか。それはコトタマの原理に則って、物や事柄に名前を付けることでした。心の方面から見た宇宙の要素の内容と音が結び付いた言霊（ことたま）のことを知った人々が、物事の姿や成り立ち、受ける感じなどを吟味して名前を付けたのですから、その名前はその物や事柄の真実の姿をぴったりと表現しています。名前を聞けばその物の真実の姿（実相）は明らかに分かります。古代日本語はそのような言葉として作られていったのです。

次にコトタマの原理に則って文字が作られました。現在、神代文字といわれる文字であります。昔の言葉で「ヒレ」といいます。漢字を当てはめますと「霊顕（ひれ）」ということになりましょうか。文字とは言葉が目に見えるように表現されたものです。神代文字である「ヒレ」はコトタマの一つ一つの内容が図形として理解されるよう作られていました。

この神代文字についても、一般には後世の偽作だという研究者が多いようです。けれど、コトタマの原理を知った上で神代文字を見ると、極めて原理に忠実な表現として文字が作られているのが分かります。神代文字の存在は、はっきりしています。日本でも古い神社の一つである奈良県天理市にある石上神宮（いそのかみ）に伝わる十種（とくさ）の神宝（かむたから）の中の「蜂の比礼（ひれ）」・「百足（むかで）の比礼」・「種々物（くさぐさもの）の比礼」といわれるのは神代文字のことであります。

また、文字と並んで数という考えが普及していきました。数とは物事が変化していく時に出来る考え方です。一つの状態から違った状態に変化が起こった時、一から二への変化という数

の考えが生まれます。変化が全くない状態のところには、数という考えは起こりません。昔の日本人の祖先は、一個のコトタマから別のコトタマへの移り変りの実相の変化を数で表して数霊と呼びました。

現代科学の最先端の技術であるコンピューターは、一般に世の中で使われている十進法の数計算を二進法に変えたことから始まったといわれます。このことは「数」という考え方が初めて考えられた数霊の時代に帰った、ということが出来ます。コトタマとカズタマとコンピューター、最も古いものと最も新しい技術との関係という興味ある問題が考えられます。最後の「現代と言霊学」の章でお話したいと思います。

コトタマの原理から物事の名前が決定され、そのものずばりの名前が出来ました。また数の考え方も定まりました。次の目標は、これらコトタマとカズタマと物事の名前がそのまま応用されて歪むことのない社会制度の確立です。社会制度を作ることです。

このようにして、今から少なくとも八千年以上昔、この日本列島の上で言葉と数と社会制度がコトタマの原理を基礎として創造されました。これが人類の文明の始まりということが出来ましょう。その文明の始まりはコトタマの原理によっているのです。私たち日本人が日常使っている日本語の起源とは、このことを抜きにしては考えることが出来ません。

コトタマこそ人類の文明の始めであり、その原理そのままに作られたのが日本語なのです。

言葉は文明の母、数は文明の父といわれます。昔の言葉を聞いたことのある第二次世界大戦以前に詳しい年代の人はご存じでしょうが、昔の言葉では母親のことを「いろは（妣）」、父親のことを「かぞ（数）」と呼びました。人間の心の構造に則ったコトタマの原理から命名された古代の日本語の一つ一つであります。

霊の本（日の本）

ここでコトタマに因んだ話を一つ挿入しましょう。以前、総理大臣をしていたK代議士が、文部大臣をしていた時の話です。ある日、代議士の秘書官の一人と称する方から電話がかかってきました。「今度、大臣が会議出席のため訪米することになったのだが、会議の席などで我が国の国名日本を『にっぽん』と発音するのが正しいか、それとも『にほん』というべきか。コトタマの学問の立場からの意見を聞かせてほしい」というのです。

そこで私は次のように答えました。

「現在の日本の国名は日本（にっぽん・にほん）と漢字で書きます。この呼び方は歴史の上では比較的新しい呼び方です。その前は日の本（ひもと）といいました。西太平洋地域の最も東に位している国ですから、国と国との付き合いがアジアだけに限られていた時代には確かに、太陽が一番早く出る国だとして日の本という国の名も頷けます。現に聖徳太子が中国の隋の国王に送った手紙の文章に『日出ずる国の天子、書を日没する国の天子にいたす……』とあります。

しかしこの『日の本』の国の名も比較的新しいということが出来るのです。近世以後、日本

は朝鮮・中国ばかりでなく、遠く西欧の国々との外交が開けてきて『日の本』の本来の意義を失いました。地球は球形なのですから日の出が早い、遅いは相対的なものであることが分かったからです。それだけでなく、人類の古代においても日本は世界中の国々と交渉があった形跡があるのです。ですから『日の本』はふさわしくありません。

日本民族の起源や日本国家の建国の目的という立場から考えるならば、日本本来の国名は『霊の本』です。奇妙に聞えるかも知れませんが、これが本当です。日本人の遠い祖先は人間の心とは何かの問題に取り組み、長い年月の研究の末に、人間の精神構造を解明して、その要素のそれぞれとアイウエオ五十音の単音を結び付けて、その一つ一つを『コトタマ』と名付けました。またコトタマ（言霊）のことを単に霊とも呼びました。

人間の心は五十個のコトタマ、すなわち霊で構成されています。人とは「霊が留まる」の意味です。日本人の祖先はこの五十個のコトタマを結ぶことによって、物事の名を付けていきました。心の究極の要素を結合して作られた名前ですから、その名前は物事の真実の姿をそのまま表した名前です。コトタマが分かっていれば物事の名前そのものを他の考え（概念）で説明する必要のない言葉です。これが私たち日本人の言葉、日本語であります。

人間の心が五十個のコトタマで構成されているといいましても、それは日本人だけのことではありません。世界中の国々の人たちの心は、皆同様です。国家の区別も人種の区別もありま

せん。ただし、人間の心の要素であるコトタマをそのまま組み合わせ、コトタマの原理・法則に従って作られた言葉は、世界中で私たち日本人の言葉の基礎となっている古代日本語ただ一つしかないのです。ですから日本の国は『コトタマの幸はう国』と呼ばれたのです。他の国の言葉には、コトタマの原理を全部生かしたものはないのです。

日本語の中にコトタマ霊の原理はすべて秘められています。精神文明の中心的役割は、古代日本語が担っていました。そのために日本語を日常に使っている国、日本を『霊の本』と呼んだのであります。日本語の中には、心と言葉の基本原理がすべてたたき込められているのです。

以上、日本の国の名の起源についてお話したのですが、この霊の原理を知らないと、日本を『にっぽん』と読むのか、『にほん』と読むのか、についても正否の判断が出来難いといえます。日本語の基本はアイウエオ五十音です。その中でカサタハの四行に点々がついて濁音となります。またハ行のハヒフヘホに丸がついて、パピプペポの半濁音となります。

極めて大ざっぱにいうと、コトタマの原理からは、現れ出る現象そのものを清音で示し、現れ出てきてしまったもの（完了形）を濁音で示します。また昔、言葉のことを単に『ハ』といいました。言葉として表される瞬間を示す音としてパピプペポが使われたのです。電燈はパッと灯り、ピアノはポンと鳴ります。

ですから日本の国名は、日本の国が現在あるものとして語られる時は『にほん』が正しいで

しょう。または日本はこれから発展して新しい国として建設されようとしている、という気持でなら『にっぽん』と呼んで然るべきでしょう」

質問に対する私の答えは以上のようなものでした。私の説明がK代議士にどう伝えられたか、また大臣がアメリカで国名を「にっぽん」と言ったか「にほん」と言ったかは、私に何の報告もありませんでしたが。

第二章　コトタマの原理

日本人の先祖は遠い昔、人間の心と言葉の関係に注目して、その極めて合理的で精密な法則を発見し、布斗麻邇（ふとまに）と呼びました。コトタマの原理のことです。この原理・法則は人間の心を解明し、説明することが出来る心のすべてです。

「人間の心とは何ぞや」の問いに対する完璧な解答であります。

コトタマの原理

人間の心が五十個のコトタマによって構成されていると前に書きました。それなら心はその五十個のコトタマによって、どのように構成されているのでしょうか。心の中に五十個のコトタマが、ただバラバラに散らばっているわけではありません。心を構成している五十個のコトタマは、しっかりした構造を持ち、その構造のそれぞれ一定した動き方によって色々な心の現象を生んでいきます。

まず物質の構造について考えてみましょう。物には形があります。色や堅さ、固体・液体・気体の区別があります。それら種々雑多のものを一つ一つ分析していき、物の本質とは何かを考えていくと物質の分子にまで到達します。その物（例えば石、水、木など）を構成している最終的な単位です。それ以上分析すれば、そのものでなくなってしまうものです。

物そのものでなくなってしまうことにかまわず、さらに分析していくとしましょう。するとその物の分子を構成している元素の原子が現れます。水の一分子は水素原子二個と酸素原子一個の結合で出来ています。現在、自然の状態で宇宙に存在する元素は九十数種、人為的に特殊

な装置の下で発見された元素を加えると百数十種の元素があるということです。元素は物質の最終単位ということが出来ましょう。

科学はその元素の原子の内部にさらに研究のメスを進めました。そして物質というものを構成している先験的な内容――電子・原子核・陽子・中性子・その他種々の核子等を発見していったのです。これらは、物質的な現象を生ずる以前の先験的構造というものです。先験的な要素は、人間の感覚で直接に捉えることの出来ないものです。ただそれによって何か現象が起こされた時、初めてその存在が確かめられます。それに対して物質の元素の原子によって構成されたこの世に存在する種々の物は、後天的な存在ということが出来ます。五官感覚によって捉えられる存在です。

物質を構成している要素に先天と後天があるように、人間の心の要素にも先天と後天があります。頭の中で何か考えているけれど、それがまだ定まった形や内容となってこない間、これが先験的な部分です。古代の日本人の祖先は苦心の結果、この心の先験の構造を明らかにしました。それによると心の先天の部分は十七個のコトタマで構成されています。そして心の後天要素――何らかの心の現象として現れたものの要素としてのコトタマは三十三個であります。先天十七、後天三十三、合計五十個のコトタマが心のすべての要素です。

さて先天の要素である十七個のコトタマは、先天の内部でどのように活動するのでしょうか。

またどのような動きをすれば、どのような後天の要素となって現象が生まれるのでしょうか。そのことについても日本人の祖先は、明らかな答えを出しているのです。それはまことに厳密な法則によって動き、この世の中に見るような様々な精神現象を現出しています。厳密な法則の下に活動しますので、ただ単にコトタマといわず、「コトタマの原理」ということもあるわけです。その法則の厳密さは、原子物理学が原子核や電子の内容や要素をすべて解明しつくした時、その物質の先験的内容の法則とちょうど表裏として匹敵するような厳密さであるということが出来ます。その心の先天の内容や原理について、この後追々とお話をしていくことにしましょう。

五十音図とその区分

人間の心が五十個のコトタマから成り立っていることを発見した日本人の祖先は、その五十個のコトタマを合理的に並べて人間の心を表そうと工夫しました。そして平面的な五十音図を作ったのです。現在、私たちが小学校で教えられるアイウエオ五十音図もその一つであります。実はこのアイウエオ五十音図の他に、四通りの五十音図が考案されました。そのそれぞれは、人が持つ心の持ち方によって並べ方が違うものでした。それらがどう違うのかは、後ほど詳しく説明することにします。

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ									ウ
ヱ									エ
ヲ									オ

五十音図を見てください。それは五十個の音をただ漫然と並べたのではなく、きっちりとした規則があります。まず音図に向かって右の行は上からアイウエオと母音が五個並びます。向って左の行にワヰウヱヲと半母音が五個並びます。そして母音と半母音の行の間に、一番上のアの段でいうと右から左にカサタナハマヤラと八個の音が横に並んでいます。

WA	RA	YA	MA	HA	NA	TA	SA	KA	A
WI	RI	YI	MI	HI	NI	TI	SI	KI	I
U									U
WE									E
WO									O

今、説明しやすくするために、この八音をローマ字で書いてみましょう。KA SA TA NA HA MA YA RA となります。するとこの八音のどの音にもAが付いていることが分かります。二段目のイ段はKI SI TI NI HI MI YI RIで八音全部にIが付いているのが分かります。そうしますと母音の先にKSTNHMYRがそれぞれ付いて、母音と半母音以外の四十音を作っていることになります。この母音の先に付いて母音・半母音以外の音を作るKSTNHMYRの八個を八つの父韻と呼びます。

ローマ字を使ったのは説明しやすくするためであり、実際は日本人の祖先が父韻と呼んだのはKSTNHMYRではなく、キシチニヒミイリのイ段の八音でありました。キにアが付いてカとなり、シにエがついてセとなる……、と考えたのです。キシチニヒミイリの八音を父韻と呼びますと、五十音の中から母音五個・半母音五個、さらに父韻八個を除きますと三十二個の音が残ります。この三十二個の音を子音と呼びます。

つまり五十音図は、五個の母音、五個の半母音、八個の父韻、三十二個の子音から構成されていることになります。

さて以上で五十音図の区分は終わりました。そしてこの五十音はただの五十音ではなく、五

十個のコトタマであります。人間の心はこの五十個のコトタマで出来ているのですから、私たちの祖先が五十音図を母音・半母音・父韻・子音と区分を定めたのは、人間の心が同様に区分されたコトタマによって構成されているということになります。そうです。人間の心はそれぞれ全く性質、内容の異なった五母音・五半母音・八父韻・三十二子音によって構成されているのです。

それなら母音・半母音・父韻・子音とはそれぞれ人間の心のどの部分に当たり、どんな内容を持ち、どんな働きをしているのでしょうか。五十音の区分は人間の心の区分でもあります。そのそれぞれの区分を明らかにすることでコトタマの正体を説明していくことにしましょう。

［注］母音のウと半母音のウは同じです。五十音図の場合、母音・半母音のウは重複し、半母音のウがンに転化して神代文字となったもので、全部で五十音となります。

心の構造

人間の心が五つの母音・五つの半母音・八個の父韻・三十二個の子音から構成されているということが分かりました。それなら母音や半母音・父韻・子音などは、それぞれどんな性質や内容・働きを持っているものなのでしょうか。これから一つ一つ考えていくことにしましょう。それによって人間の心がどんな仕組みで出来ていて、またどんな活動をしているかが分かってきます。大方の人があまりやったことのない、心の中の探検を始めることにしましょう。

母　音

まず母音から始めることにします。

秋か冬のよく晴れた日、ビルの屋上に上って仰向けになって空を見上げた経験をお持ちでしょうか。お持ちでない方は想像してみてください。仰ぎ見た空は一点の雲もないので、眼に入るのはただ一面の澄んだ青い空だけです。じっと見つめていると、その澄んだ底知れぬ広さと大きさに畏怖の念を覚えます。それでもひるまないでじっと見つめていると、すーっと自我の

意識が消えてしまう時があります。

人は自分以外のものを見たり感じたりすることによって、それを見ている自分の存在を意識するものです。澄んだ青一色の空を見つめて他を感じる何物もない時、自我の意識は次第に消えていきます。ただ自我意識が消えるだけでなく、その内に自分がだんだん大空の方に持ち上げられ、吸い込まれていく感じになります。まるで宇宙と同化して一体となってしまうような感じです。

この感じは、一見、極めて特殊な場合の体験のように思えますが、考えてみると決してそうではないことに気付くのです。人間は母親の腹から生まれてきます。それは同時に、この宇宙から宇宙の中へ姿を現したことでもあるのです。人間の肉体という現象は、宇宙の中から生まれ出た宇宙の現象でもあります。自我意識の強い現代人は、特に宇宙を自我の外にのみ考えて、自分自身が宇宙そのものの現象であることを忘れがちです。自分に起こる出来事は自分の事件であると同時に、それは宇宙の出来事でもあるわけです。

以上のことを心に留めておいて、今度は眼を閉じてみます。一色の青い空も何も見えません。思いを内に向けると、心の中に様々な記憶、空想、感情が現れては消えていきます。それは際限がありません。もし今、それらの思いや感情を一時ストップして起こらなくしたとすると、どうなるでしょう。空を見上げていた時と同じように、自我は自分の存在を確かめるよすがを

失って、自我意識は消えていくでしょう。消えると同時に、広い広い心の宇宙と一体となることを体験出来るはずです。

眠っていたり、または何かに驚いたり感動したりした時以外、意識がしっかり覚めている時には自我がなくなることは滅多にありません。現実にそれを体験しようとするなら、宗教の修行によるより他の方法はないかも知れません。現に仏教の禅宗の坊さんは、その心の宇宙――これを空（くう）といいます――を求めて一生坐禅に励んでいます。心の中が空っぽになると何が分かることになるでしょうか。今まで自我だとか頭脳組織だとか思っていた自分の心の本体は、実は宇宙そのものだ、ということが分かってきます。自分が考えていること、今まで自分が考えていたこと、すべてが実は心の宇宙が考えていたのだ、ということが分かるのです。自分の心の出来事が同時に心の宇宙そのものの現象でもあることです。心の出来事が宇宙から現れてくることが分かります。

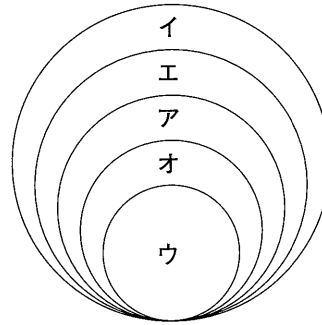
もちろん私たちは、いつも心の宇宙などというものを心に留めているわけではありません。心の現象は暑い、寒い、こうしたい、ああしたい、あいつは何故あんなことを俺に言ったんだろう、さあこれから先どうしたらよいか……などと、心の中にはとりとめもなく次から次へと思いや考えが現れては消えていきます。それはまるで自分の意志で制御出来ないほどです。このように次々に心の中に現れてくる出来事を追いかけていては、心がどんな構造になっている

か考えようがありません。現象と現象を結びつけて考えて、それらの現象の同一点や相違する点を比較しながら心の意識や潜在意識の法則を探ろうとする心理学や深層心理学が、未だ心の構造を完全には決定出来ずにいることも無理からぬことです。

日本人の遠い祖先は、この問題について大昔にすでに完全な答えを出してしまっています。それは現れ出てきた心理現象を追いかけることを止めて、心の出来事（どんな些細な出来事も）が起こる前に帰ることから始めることでした。つまり、心の宇宙に帰ることです。こんがらがった物事を理解するには初めの零（ぜろ）に帰らなければならない道理です。この項の初めに私が心の宇宙のことを持ち出したのも、この理由のためでした。

さて話をもう一度外に見える物質宇宙のことに戻しましょう。科学者によると、この地球をロケットに乗って離れ、高度が数十キロに達すると、その宇宙空間にはもう空気も水蒸気なども、ほとんどないのだそうです。けれど何もないのではなく、目に見えない（現象を起こしていない）種々のエネルギーが充満しているといいます。翻って、見ている方の側の心の宇宙はどうでしょうか。やはり同様にそこにも感知することの出来ない心のエネルギーがいっぱい詰まっており、そこに何かのキッカケがあれば、言い換えると何かの刺激が加えられると、待ってましたとばかりに現象を生み出すことになります。それが心の宇宙の実体なのです。

この果てしなく広い、エネルギーが充満し、しかも現象としてはそれ自身を現さない心の宇



宙に名を付けるのに、日本人の祖先は五十音の中の母音を当てたのでした。母音はアイウエオと五個あるのに心の宇宙は一つである。この関係はどうなるのか、とお思いでしょう。当然の疑問です。

そこで心の宇宙のことをさらに考えてみましょう。この宇宙から起こってくる自分の精神現象をよく見つめていきますと、精神宇宙というのは単純なただ一つの広がりなのではなく、五つの別個の広がりの積み重なったものであることが分かってきます。しかもその重なり方が単に五段階が重なっているというのではなく、一つの段階が終わった時、その点を土台として次の段階が始まる、またその段階が完結した点で次の段階が……というように、哲学でいう五つの次元界層の重なりという構造を持っていることが分かってきます。この五段界層の宇宙の広がりに、それぞれ母音アイウエオの名を付けたのでした（図参照）。

大きく息を吸い込んで五つの母音を実際に発音してみてください。母音のどの音も息の続く限り同じ音が続き、変化がありません。それは、この心の五つの宇宙が――そこからそれぞれの空間特有の精神現象が現れてくるのですが――その宇宙自体は決して現象として現れることはない先天的な永劫不変の実体であることを示しているのです。

心の宇宙は分かるが、それが五つの次元から成っているということは耳慣れないと思われるかも知れません。そこでその一つ一つを説明していきましょう。

●ウの宇宙（言霊ウ）

赤ちゃんは母親の胎内から生まれ出て、何も教えられないのにお乳を飲みます。乳房を吸います。これは生来人間に備わった欲望本能の現れです。この欲望の出てくる根元の宇宙に、母音のウと名付けたのです。このウと名付けられた欲望の現れ出てくる元の宇宙、これをコトタマのウと呼びます。字を分かりやすくするために今からコトタマを言霊と書くことにします。言（こと・言葉）はウです。霊（たま・内容）は欲望が出て来る元の宇宙のことです。これを一緒にして言霊ウと呼びます。

仏教で眼耳鼻舌身と呼ぶ五官感覚による認識の能力も、この宇宙から現れてきます。赤ちゃんが次第に成長して大きくなり、美味しいものが食べたい、美しい服が着たい……から、金持になりたい、良い人と結婚したい、大臣になりたいなどの欲望もこの言霊ウの次元の現象です。この欲望の次元の現象は、人間の精神の最も幼稚な性能であると同時に、生きていくために最も基本的な本能だということが出来ましょう。この人間の性能が社会的になったものが、各種の産業活動であります。

●オの宇宙（言霊オ）

人は生まれて次第に成長し、物心がついてきますと、自分の見たこと、聞いたことを振り返って考えて、その経験したことをどんな順序で繰り返せば、いつも同じ結果を手にすることが出来るかを思考するようになります。この記憶とその整理の働きが出てくる元の宇宙を、母音オの宇宙（言霊オ）と名付けました。この働きが高度になったものが学問であり、科学と呼ばれるものです。

経験事項の抽象的概念による把握表現の世界、といえば学問的な表現となります。それは経験知の世界です。

「余韻が尾を引く」「生命の玉の緒」の尾や緒は、この宇宙の意味をよく示した言葉であります。

●アの宇宙（言霊ア）

この宇宙から発現してくるのは、人間の喜怒哀楽の感情です。純粋な愛の世界でもあります。この感情が出てくる元の宇宙を言霊アといいます。この世界は、言霊ウの欲望とも言霊オの経験知とも趣を全く異にした世界です。

「ああ」は感嘆する言葉ですし、阿弥陀・アーメン・アラーなどのアは世界的に共通した感

情の世界を表す音ということが出来ます。この宇宙から宗教や芸術の活動が出てくるということが出来るでしょう。

●エの宇宙（言霊エ）

今までに挙げました言霊ウ・オ・アのそれぞれの宇宙から現れてくる欲望、記憶、感情は、人の心の中で時には相争い、また時には協調したりします。これら三つの性能は、常に勝手に自己主張して心に葛藤が起こります。この時、人は今どのような生き方をすればよいかの選択を迫られます。感情のおもむくままに進むか、過去の経験を生かすか、それとも欲望を先にするか。さあ、どうしょう。それらをどんな按配で選択したら良いかという知恵である実践智が出てくる元の宇宙、これをエの宇宙、言霊エと呼びます。

人が「えらぶ」（選）働きが出て来る元の宇宙であります。この言霊エからの働きが社会的なものとなったのが、道徳と政治活動ということが出来ます。

現代人は、この今、ここでどうしたらよいかの実践智と、先に挙げた過去の記憶を整理する経験知とを混同して取り扱いがちです。けれど経験知と実践智は全く異なった人間の性能であり、両者が相異ったものであるということを知っているだけでも、生きていく上で相当な得をすることになりましょう。何故なら、人が迷うということは、その人の持つ経験知の中から、

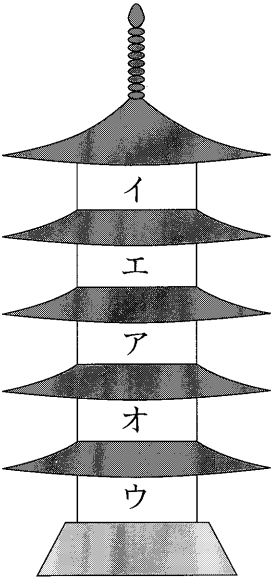
今、どれを採用すれば良いかで迷うからです。その時、経験知と実践智とは全く違うものだ、と知っていれば「下手な考え休むに似たり」と迷うことを止め、白紙に返すことが出来ます。白紙に、すなわち出発点に帰れば、必ず人間の実践智が働き出し、進路は整然と決定されるでしょう。

●イの宇宙（言霊イ）

この宇宙は今まで説明してきたウオアエの四つの次元と違い、説明し難い宇宙なのです。それをあえて説明すると次のようになります。

言霊ウ・オ・ア・エの四つの次元の宇宙を縁の下の力持ちとなって支え、動かし、さらにそれぞれの現象を言葉として表現するところの、人間の創り出す意志の働きが出てくる元の宇宙、とでも言ったら良いでしょうか。人間はこの生きる意志があって初めて、他の欲望も経験知も感情も実践智も働くことが出来るということです。「人間が生きる」、「居る」とはそういうことなのです。人が生きるための最高位の性能です。

以上で一口に心の宇宙と呼ぶものが、実は五つの母音が当てはめられる五次元の宇宙から出来ていること、その五次元について低次元から高次元へとその内容を説明してきました。五つ



の次元の宇宙はそれぞれ特有の無音のエネルギーが充満していて、しかもそれ自体は決して現象として姿を現すことのない実在なのです。

人間の精神の働きは、この五つの次元の宇宙の中で行われ、この五次元以外の宇宙は存在しません。人の心はこのウオアエイの五次元の宇宙の重畳（たたなわり）を住み家とします。それが語源となって、人の住むところを日本語で五重（いへ）、すなわち家、というわけです。

この宇宙のウオアエイの五つの次元構造を、東洋哲学では概念化して、木火土金水の五行（中国）とか地水風火空の五大（インド）などと表現しています。仏教のお寺にある五重塔も人間精神の五次元層を暗示した建造物であります（図参照）。

半母音

以上で母音についての説明を一応終えることにして、次に半母音の言霊の内容を簡単に説明しておきましょう。

母音のアイウエオの言霊が、見る方の主体の五つの次元の宇宙とすると、半母音ワヲウヱヰは見られる方の側の客体の五次元の宇宙ということになります。母音と半母音とは、自と他、主体と客体、出発点と終着点、吾と汝といった関係です（古代大和言葉では吾をア、汝をワと呼びました）。母音の言霊も半母音の言霊も精神の先天的なものですから、そこから現象を生み出しはしますが、それ自体は決して現象として現れることはありません。

半母音の説明は、今のところこのくらいにしておきます。後ほどまた触れることにします。

心の先天構造

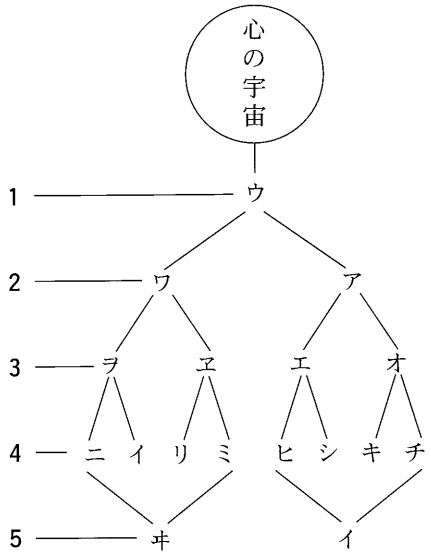
人間の心は十七個の言霊の先天部分と三十三個の言霊の後天部分、計五十個の言霊で構成されていると先にお話しました。その十七個の言霊で出来ている先天部分は、どんな構造をしているかをお話しましょう。

先天部分ということは、もちろん現象としてはそれ自体は現れない部分のことですから、その中に意識を入り込ませて研究するわけにはいきません。現象となる前の世界を、現象となって現れてきた意識の眼で見ることは不可能です。それなら我々の祖先はどんな方法で研究したのでしょうか。

まだ現象として現れない先天の構造を明らかにする方法は、ただ一つしかありません。それは現在の原子物理学が行っているように、大きな加速装置を使って原子核内の要素（と思われるもの）を高速で動かし、それを特殊な感光装置に衝突させ、そこで観察される種々雑多な現象の中から推理することによって、先天の構造を次第に組み立てていくことです。その推理と感光装置の中で起こる種々の現象との間に一つの矛盾もなければ、その推理は正当なものとな

ります。

数千年の昔、心の構造を明らかにした私たちの祖先も、同様の方法を自分の心に適用したに違いありません。研究者自身の心の中に起こる色々な出来事、感情・経験を持ち寄って、その無数の現象を生む元の世界の構造を探っていったのです。心の動きは機械装置によって加速することは出来ません。その代りに、古代の人々は心を空（カラ）にすることを覚えたことでしょう。現象を生んでいく元の心の宇宙を純粋に見ることによって、先入観のない観察の方法を獲得したことでしょう。現代人が「明るい心」「素直な心」と呼んでいるところの心の持ち方です。万葉集に載せられている数々の歌の中に、この「明るい心」を汲み取ることが出来ます。



さて人間の心の奥の奥の構造などという、難しく、あまり耳慣れない内容を長々と続けていては、話が退屈になりがちです。細目は追々進めることとして、人間が具体的に物を

考える以前、頭の中で精神的には何がどのように起こり動いているのか、心の先天的な構造を、まず結論から書くことにしましょう。

私たち日本人の祖先が長い年月の試行錯誤の研究の末に、遂に明らかにすることの出来た心の先天部分の要素と構造は、次のように言霊によって示されます（図参照）。

それを構成する言霊の数は十七個、五段階の構造を持っています。この先天の構造を太古、私たちの祖先は天津磐境（あまついはさか）と名付けました。天津とは現象界に現れない先天性の意であり、磐境（いはさか）とは五つの（い）言葉（は）の段階（さか）ということであります。この五段階・十七個の言霊が活動することによって、無数の色々な心の現象が生み出されていくのです。

思考のはじまり

人が何か思い考えようとする時、頭脳内でまず何が起こるのかを言霊で示したのが前項の天津磐境の構造です。しかし、ただ結論としての構造の図を見ただけでは、何のことだかお分かりいただけないかも知れません。そこで説明が必要なのですが、もともと先天といわれて、人間の意識では直接に捉えることが出来ない部分に関係することですので、説明はともすると難解な用語を使いがちになります。今はそうなることを避けるために、一つの例を挙げて説明することにします。

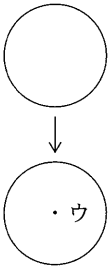
思考が未だ何も始まらない時、それは空々漠々たる心の宇宙が広がっているばかりです。それはちょうど夢も見ずに眠っている時に似ています。空漠たる宇宙に思考が始まります。それは眠りから目が覚めようとする時に似ているということが出来ましょう。そこで人が眠りから目を覚ます状態を例にして、思考の始まる時の先天構造の働きを説明しましょう。前項の言霊で示した先天構造の図を見ながらお読みいただきますと、理解しやすいと思います。

朝、深い眠りから目が覚めます。まだ意識が完全には覚めないでモーローとしています。何

もかもはっきりとはせず、それでも何かがあるような、あり始めるような感じの時、両手を伸ばしてノビをします。思わず自然に口に出る音声は「ウー」です。意識が覚める初めに何が起こるのか。頭脳の心の先天部分の言霊ウの宇宙に何か刺激が加えられつつあることを示しています。この時の音声は誰でも「ウー」であって、他の四つの母音オアエイでは決してありません。

意識の内部は大部分がボーッとしているのですが、何かが目覚め出した状態、それは広い心の宇宙の中に初めてうごき（動）、うまれ（生）、うごめく（蠢）ものです。それはまだ現象としては現れてはいないけれど、心の宇宙の中に何かが動き始める予感のようなもの、ともいうことが出来ましょう。その初めて動き出そうとする宇宙、これは言霊ウの世界なのです。この世界から五官感覚が現れてくる元の宇宙です。

現象には決して現れることのない先天の世界の出来事をお話していますので、どのように形容しても理解は難しいかも知れません。そこで簡単な図で示してみましょう。

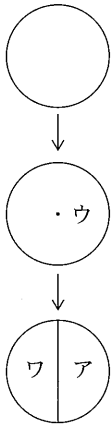


心の動きが未だ何も起こらない宇宙を○で表現するとしましょう。エネルギーは充満しているが、そこに何の動きも起こっていない状態です。禅宗の坊さんが空（くう）と呼んでいる心の内で捉えた宇宙のことです。この宇宙の中の一点で何かが動き始めようとします。心で直接感じるわけではないのですが

（心でしっかり感じてしまえば、それは現象の出来事です）、動く気配とでもいえる心の奥の動きです。それは○の中に一点ウが入ったことで示されます。

「ウー」と声を出して伸びをして、モーローとしていた意識が次第にはっきりしてきました。次に何が起こるでしょうか。目の前の明るさが感じられてきます。「もう朝かな」とおぼろげな疑問を感じます。前にもちょっと触れたことですが、人は何かの疑問を感じると同時に見る方の立場と見られる方の側、主体と客体とに分かれます。この主体と客体の世界に言霊で「ア」と「ワ」と名付けました。昔、実際に私のことを吾（あれ）、あなたのことを我（われ）と呼んだ時代がありました。今でもあなたとかお前とか呼ぶのに「われ」を使う地方があるようです。早速図で示してみましょう。

何もない宇宙に何かが始まったことを○→⊙（ウ）と図にしました。その何かに対して「何？」という思考が起こると、一つの宇宙が瞬間的に見るものと見られるもの、考える側と考えの対象となる側の世界に分かれます。主と客とに分かれるということから、精神と物質という区別も付くことになります。初め、宇宙は精神でも物質でもありません。宇宙というただ一つのものです。それが一度人間の思考が加わると同時に、全く対称的な二つのもの（アとワ）に分かれることになります。



梅の花

もう十年以上も前のことです。関西旅行をした時、京都駅前から「わびコース」という観光バスに乗ったことがありました。京都の有名なお寺の庭園と茶室を見せてくれるコースだと聞きました。

最初に一名竹寺と呼ばれる光悦寺の庭園を見学し、次に大徳寺に行きました。すぐに見学できるのかと思いきや、乗客全員、庭園に面した広い廊下に座らされて、若いお坊さんが説法を始めたのには驚きました。話はなかなか終わりません。退屈極った筆者は席をそっと抜け出しました。人気のない広い長い廊下を歩きながら、優雅な大徳寺の部屋部屋をのぞいて廻ったのでした。

ある部屋の前に来た時、襖が開けたままになっていて、部屋の床の間に掛軸がかかっています。五字の詩（仏教で偈（げ）といいます）が一行、幼稚とも思える素朴な筆で、しかも達筆に、

「梅花破雪香」　（梅花雪を破って香し）

と書かれています。「長い冬の白一色の雪の景色を突き破るように、春の初めの息吹の梅の花

が咲いて香りを放っている」という意味の詩です。上手な詩です。さらに驚いたことには、それが禅宗のお坊さんの作だと思われるからでした。仏教の偈というのは、お坊さんが修行の途上で悟ることの出来た心の仕組みを自然の風物に託して表現した詩であるからです。

一面の雪は、現象としては何も起こっていない心の宇宙、お坊さんのいう「空」をたとえています。その心の宇宙から意識の息吹・萌芽が生まれ出てきます。梅の花は万物がまだ冬の眠りにある間に、いち早く春を告げて独り咲き出します。心の宇宙の中に初めて生まれる兆しに日本人の祖先はウの一音を当てました。梅の花は正しく「ウの芽（め）」に当たります。日本語の梅の語源なのです。

昔、大徳寺にえらいお坊さんがいて、修行の末に空を悟り、その空々漠々たる心の宇宙から意識の芽が生まれ出てくる瞬間の消息を心の内に観じて偈に表現したのでしょう。この偈の掛軸を前にして、日本語の梅の語源が、心の先天構造の天津磐境の最初の原理である言霊ウの「芽」であることを今さらのように驚きをもって心に留めたのでした。

松風

梅の偈の掛軸のある部屋の隣の部屋の前に来ました。やはり襖が開けてあります。見ると同じような床の間に、同じような表装の掛軸が掛っています。

「余坐聴松風」　（余坐に松風を聴く）

と同じ筆で書かれています。ますます驚きました。心の先天構造の第二則が見事に詩として表現されているのです。

余坐とは次の座ということです。何の次の座なのかというと、心の宇宙の中に何かが生まれ出てきたと感じる兆し（言霊ウ）の次の座のはずです。それは「何かな」という疑問が起こると同時に、⊙ウ→㊥と図示したように一つの宇宙が主体と客体、アとワに分かれます。松の葉は生え際から二本に分かれています。⅄の形です。この主と客の二つに分かれることを「松風を聴く」と大層風流に詩的に表現したのです。

二つの詩を続けて書いてみましょう。

梅花雪を破って香し　余坐に松風を聴く

○→⊙(ウ)→㊥の心の構造を見事に表現した偈ではありませんか。心楽しくなった私は、手帳に二つの偈を書き取ってからもと来た廊下を引き返しました。観光客相手の若いお坊さんの説法は、ちょうど終わろうとしているところでした。

経験知と実践智

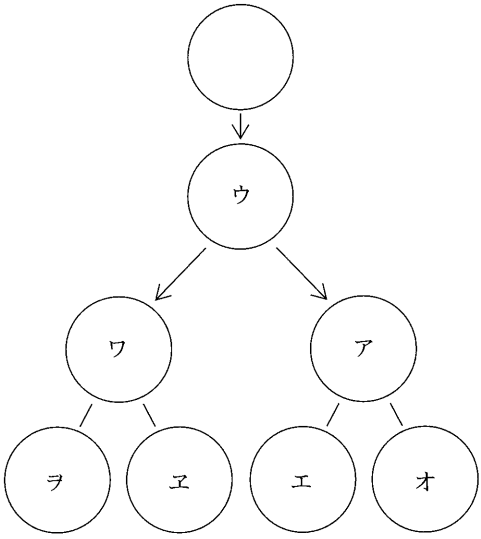
人が朝目覚める時を例に挙げて、心の先天の構造を説明してきました。何もない宇宙の中に言霊ウの意識が動き出し、次に「何かな」の疑問が始まると同時にアとワ、吾と汝の主と客に分かれました。意識の目覚がさらに進んだらどうなるでしょうか。

主体と客体に分かれますと、次は目の前にあるもの（客体）は果たして何なのだろうか、と考えます。この時記憶が呼び覚まされます。色々な過去の経験の記憶が蘇り、目の前のものは何だと決まります。この記憶を呼ぶ主体が母音である言霊オであります。その結果「ああ、あれであったのか」と心の中から呼び覚まされてきた対象の客体世界が、半母音言霊ヲということです。

言霊オとヲは過去の経験の記憶が出てくる宇宙です。この記憶と記憶の関連性を調べることから学問・科学が成立してきます。経験知の世界です。記憶の関連性を喪失してしまうことをボケといいます。記憶の関連性のことを昔の人は生命の玉の緒といいました。

さらに目覚めが進みますと、「さて今日起きて何をするかな」と考えます。色々なことが考

えられます。その中から「よし、今日はこれをしよう」と選択的決定をします。この実践智の出てくる主体の宇宙を言霊エといいます。選択された客体の宇宙を言霊ヱというのです。それは選ぶ知恵の世界のことです。今までに出てきた言霊で先天構造を図に示すと次のようになります。



生命意志

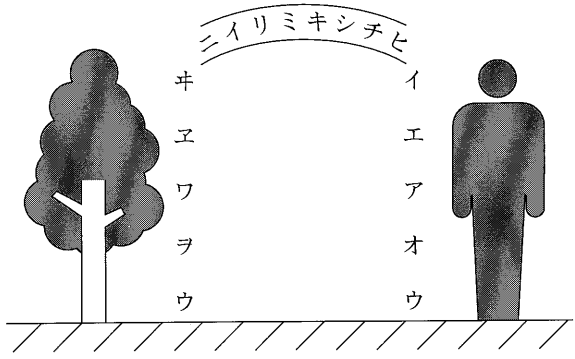
現象が起ころうとして実際にはまだ起こっていない時、言い換えると心の先天部分はどんな構造になっているかの説明も、母音・半母音のウ・アワ・オエヲヱが終わり、イとヰだけが残りました。それに先天は十七音で出来ていますから、母音・半母音の他に父韻という八音が加わります。ヒチシキミリイニの八音です。

前にもこの言霊イとヰ、父韻の八音の言霊の説明は難しいといいました。何故なら「物事の現象は何故起こるのか、現象が起こったと、どうして人間は認識することが出来るのか」という哲学者や宗教学者がここ三千年間、求め続けている精神の根本問題であり、未だよく分かっていないことだからです。言霊のイとヰ、それに八つの父韻の説明が難しいといいますのは、その完全には分かっていない宗教や哲学の用語では、その根本問題を説明するには不十分だからです。そこで難しい用語を使わず、いとも簡単な例を挙げて説明を進めてみることにしましょう。これはまた言霊の学問の根本問題でもあるのです。

ここに一本の木が立っています（次ページ図参照）。この単純な事柄と思えることについて

考えてみましょう。木が立っているなと見る人がいなければ、この事実は成立しません。またその木が物として存在しなければ見ることが出来ず、やはり事実とはなり得ません。このように現象があるということは、見る方の主体と見られる方の客体の双方に関係しています。

見る主体（人）と見られる客体（木）との関係は、単に木があるなと感じる五官感覚（言霊ウ）だけではありません。この木は何の木だったか、植物図鑑では何の種類に属しているか、という学問の世界（言霊オ）の関係もあります。その他、この木は絵に描くとすると何号のカンバスが最も映えるかな、という芸術的関係（言霊ア）や、この木を切り倒して道路を作った方が良いか、それとも保存して環境保護を優先すべきか、といった政治道徳的関係（言霊エ）も成立します。



ここで図をご覧ください。見ている人だけで、木がないとしたら現象は起こりません。ですから、人は現象にならない純粋の主体です。母音ウオアエイです。逆に木が立っているが、見る人がいないとしたら、木は現象にならない純粋の客体で、半母音ウヲワヱキで表されます。

この主体のウオアエイと客体のウヲワヱヰがどんな交渉で現象となるのでしょうか。

緑の葉を付けた茶色の幹と枝の木が立っていて、人間の眼がそれをそのまま見るだけだと思われる方が多いことでしょう。確かにその通りかも知れないのですが、そう簡単なわけにもいかないのです。別の例を考えてみましょう。

鐘があります。棒で突いてみます。鐘が振動して空気を震わせ、空気中に波動が伝わっていきます。けれどこの波動自体がゴーンという音を立てているわけではありません。この波動が人間の耳に入った時、初めてゴーンという音に聞えるのです。突かれた鐘は、無音の波動を出しているだけなのです。客体である鐘の出す波動と、主体である人間の認識知性の波動、またはリズムといったものがぶつかって、双方の波動の波長がある調和を得た時、すなわち感応同交（シンクロナイズ）した時、初めて人間は鐘がゴーンと鳴ったなと認識することになります。

もう一つ例を挙げましょう。雨の後に大空に虹がかかる時があります。この虹はそれ自体が七種の色を発しているわけではありません。七種の光の波動を出しているだけです。その波動が人間の認識の主体波動と感応同交する時、初めて七つの色の虹として主体の側において認識されることになります。

再び前の図に戻りましょう。主体と客体が、正確にいいますと、主体と客体の五つの次元のそれぞれであるウとウ、オとヲ、アとワ、エとヱ、それにイとヰがシンクロナイズしてそれぞ

八つの父韻

主体母音	イ	エ	ア	オ	ウ				
	キ	シ	チ	ヒ	ミ	リ	イ	ニ	ヰ
客体半母音								ヱ	ヲ
								ワ	ヲ
								ヲ	ウ

32の現象子音

れの現象を生むのですが、母音も半母音もそれだけでは結び付く働きを起こすことのない存在です。それぞれを結びつける能動的な架け橋となるものが必要です。この役目をするのが最後に母音・半母音として残った人間の創造意志（言霊イ・ヰ）の実際の働きであるキシチヒミリイニの八つの父韻なのです。純主体と純客体とを結びつけて現象を生む人間の創造知性とでもいうもの、その韻律が八つの父韻で表されます。主体と客体とを結びつけるバイブレーションは、この八種しかありません。

するとこの八つの父韻が四次元の結び付きを生むのですから——8×4＝32で合計三十二個の子音を生むことになります。この三十二個の子音がこの世の中すべての現象の最小の単位ということになります。

人間の創造意志である言霊イとヰについて、もう少し詳しく説明しましょう。先に五母音の説明のところで、この言霊イの宇宙は他の四つの母音宇宙を根底から支え、統合している宇宙であるとお話しました。根底で統合するといっても、内容がはっきりしないかも知れません。もっと平たくいいますと、この言霊イという創造意志は、他の四母音の世界の現象を生む原動

力だということです。五官感覚による欲望の宇宙である言霊ウも、経験知の宇宙の言霊オも、感情の宇宙の言霊アも、実践智の宇宙の言霊エも、生命の創造意志である言霊イが働かない限り、何の現象も生まれないということです。

欲望が起こるのも生きる意志があってです。経験を積む好奇心も、嬉しい悲しいの感情も、今・ここでいかなる道を選ぶかで悩むのも、すべて生きようとする意志が縁の下の力持ちとなって働くからであります。

そして、その縁の下の力持ちとなって働く力、それが言霊イの実際の働きであるキシチヒミリイニの八つの父韻です。それは主体が客体と結び付くために働く力動のバイブレーションです。これによって主体と客体がシンクロナイズして、現象である全部で三十二の子音を生むことになります。

言霊イには以上の他にもう一つ重要な働きがあります。それについては誰も想像もしないことなのですが、人間が生きるということにとって重要なことなのです。

主体と客体が結ばれて現象を生むとは、どういうことなのでしょうか。「赤い花が咲いた」というのは一つの現象です。この時、その事実を認識する人間がいなかったら、それが現象として起こったかどうか分かりません。さらにそれを見る人間がいたとしても、その事実に対して「赤い」「花」「咲いた」という事や物にそれぞれ名が付けられないならば、ただ「アーアー」

というばかりで現象にはならないでしょう。主体的に現象を生むということは、名を付けることでもあります。現象を生み、それに名を付けること、それが生命の創造意志である言霊イの働きです。

人間の創造意志である言霊イについて以上のことを総合しますと、言霊イは――

一、母音として他の四つの母音ウオアエの宇宙を統一して支え、

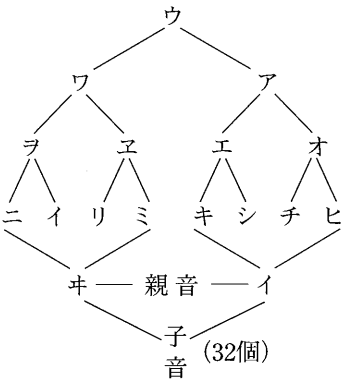
二、その実際の働きである八つの父韻ヒチシキミリイニとなって、母音、半母音に働きかけて現象を生み、

三、生まれ出た現象に名を付ける役目を果たす。

という、宇宙の根本活動をすべて一手にやっている存在ということが出来ます。そこで母音イと半母音ヰとを他の母音・半母音から区別して親音と呼んでいます。この言霊イとヰの存在と働きに対して、宗教の教義では「創造主」と呼んで崇めています。

先に、人が朝目を覚まして、意識が段々はっきりしていく時のことを例にとって心の先天の構造を説明してきましたが、言霊イとヰが出揃ったところで、先天の十七音言霊の構造は完結したことになります。この十七音言霊が活動して、現象である子音を生んでいくこととなるのですが、先天構造の言霊による図をまとめますと、次ページの図のようになります。

人が眠りから目覚め、まだ完全に意識が働かないが、何かが動き出す気配が漠然としてきて、



頭の中で形にはならない先天の宇宙が次第に活動し、それに人間知性のバイブレーションである八つの父韻が働きかけて刺激し、最後に生命の創造意志が最も奥の部分で発動すると、遂に心の現象が起こって子音が生まれてくるという、心の先天構造の経過は以上の図によって示されました。

人間はこの十七個の言霊によって構成されている頭脳の活動によって物を思い、考え、行動し、文化を創造していきます。それは国家・人種の区別なく人類すべてが皆同様です。また人類がホモ・サピエンスとしての種を保つ限り、この頭脳構造は永久に変わることなく続くことでしょう。

地球上には幾多の国家、人種があります。その言葉も多種多様です。けれど人間である限り、その頭脳は右の十七音の言霊で構成されています。そしてその頭脳の構造をこれ以上に正確に解明するものは、他にあり得ないことでしょう。人間の頭脳の精神的構造は、人類の歴史の上で、すでに数千年の昔に明らかにされているのです。

古代人が野蛮だったなどとは、間違っても言えるものではありません。

五種類の五十音図

五十音図といいますと、私たちは小学生の時から教えられたアイウエオ五十音図がただ一つあるだけと思ってきました。その上、五十音図が何故縦にアイウエオと並び、横にアカサタナハマヤラワと並ぶのかなどということは、全く考えたこともなかったというのが実情でしょう。そもそも音図とは何なのでしょうか。

今までにお話してきたように、人間の心は全部で五十個の最小単位の要素である言霊から成立しています。その内訳は五つの母音、四つの半母音、八つの父韻、それに三十二の子音であります。人間の心はこれで全部ですし（言霊ンを加えて）、これ以上でもこれ以下でもありません。

遠い昔、日本人の祖先は、心は五十の言霊から成立しているということを解明し、それと同時に、その五十音の言霊をどのように並べたら人間のその時その時の心の一番理想的な持ち方を表すことが出来るかを明らかにしました。それが五十音図なのです。

この五十音を配列する場合、自分自身である私の心の宇宙（心の五重（いへ））である母音を右側に

言霊ウ（天津金木（アマツカナギ））

ワ	ヰ	ウ	ヱ	ヲ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
マ	ミ	ム	メ	モ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
タ	チ	ツ	テ	ト
サ	シ	ス	セ	ソ
カ	キ	ク	ケ	コ
ア	イ	ウ	エ	オ

並べます。そして行動の相手であるあなたの心の宇宙（半母音）を左側に並べます。その上で私とあなた、母音と半母音を結ぶ架け橋となる意志の運び方である八つの父韻を右から左へ横に並べます。

さて、縦の母音（半母音）の並び方の順はどのように定めるのでしょうか。横の八つの父韻の順はどうなのでしょうか。それが問題です。

先ず母音の順序です。この場合、人間のその時の最も行動の主眼となる心の次元を五母音の中心に置くことになります。図を参照してください。

例えば、商売をする人の心の場合です。その心の主眼となるのは欲望です。言霊ウです。ですからウを五母音の中心に置きます。商売の心の世界が欲望（ウ）だからといって、商人の心の中に他の四つの次元、経験知（オ）・感情（ア）・実践智（エ・道徳心）それに意志（イ）がないわけではありません。ただ商人は商売をする時、ウ言霊である欲望性能以外の次元はウ次元の目的を達成するための手段（道具）に使うこととなります。長年の経験（オ）も、明るい人柄（ア）も、そして嘘をつかない正直さ（エ）も意志の強さ（イ）も、すべて商売を成立させる手段となります。

その手段であり道具となる他の四つの次元の中で、目的達成に有効なものほど中心のウに近

く配列していきます。そうしますとウ言霊を心の中心にして行動する人の心の母音は、上からアイウエオと並ぶことになります。

以上で縦の母音の並び方の法則は分かりました。次に私とあなた、母音と半母音を結ぶ八つの父韻の並べ方についてです。

八つの父韻といいますのは、私とあなたとを結んで私自身の行為の目的を達成させるための意志の運び方です。この意志の発動の仕方に八種類があり、それぞれ特有の動きがあります。また、八種類で動きのすべてです。他にはありません。ただ残念なことには、意志の動きというものは心の奥の奥のものですから、言葉で簡単に、そして分かりやすく表現することは困難です。これは言霊学の最も難解な箇所なのです。ですから、本書では八つの父韻の並べ方が、心の次元によって全く違ってくるということを申し上げておきます。一つ一つの父韻の動きに関しては、既刊『古事記と言霊』をご参照ください。

そして音図の向って右の母音の私から意志が発動され、半母音のあなたと結び付いて行為が完結します。意志の動きは、右から左に向って流れることになります。そのようにして商売をする人の意志の順序は、意志を表す言霊イの段階のキシチニヒミイリと決められました。

そうしますと、縦に母音がアイウエオと並び、横に父韻がキシチニヒミイリとなって、五十音図は前ページに挙げたような、私たちが日頃使っているアイウエオ五十音図が完成されます。

言霊オ（赤珠（アカタマ））

ワ	ラ	ヤ	ナ	サ	ハ	マ	タ	カ	ア
ヰ									イ
ヲ	ロ	ヨ	ノ	ソ	ホ	モ	ト	コ	オ
ヱ									エ
ウ									ウ

言霊ア（宝（タカラ））

ヰ	ミ	イ	ニ	シ	ヒ	リ	キ	チ	イ
ヱ									エ
ワ	マ	ヤ	ナ	サ	ハ	ラ	カ	タ	ア
ヲ									オ
ウ									ウ

言霊エ（天津太祝詞（アマツフトノリト））

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ									イ
ヱ	セ	エ	ネ	レ	ヘ	メ	ケ	テ	エ
ヲ									オ
ウ									ウ

言霊イ（天津菅麻（アマツスガソ））

ワ		ア
ヲ		オ
ウ		ウ
ヱ		エ
ヰ	八父韻	イ

この音図のことを昔、古神道では天津金木（音図）と呼びました。

私たちが日頃これだけしかないと思っていたアイウエオ五十音図は、実は人間の性能の一つである欲望（言霊ウ）の目的を達成するのに最も適した心の持ち方を示す音図（天津金木）だったのです。物質文明を中心としたここ二千年の人類の歴史の中では、この音図で示された心の構造が最も頼りになるという事実から考えますと、当然のことと頷かれます。

現在、私たちはアイウエオの五十音図しか使ってないとはいいましても、今お話しました五

十音図を作る法則を考えますと、このアイウエオの音図の他にさらに四つの音図がなければならない勘定になります。言霊オ（経験知・学問）、ア（芸術・宗教）、エ（実践智・道徳）、イ（創造意志）をそれぞれ中心とする音図です。現在は全く見慣れないのですが、大昔にすでに確定していた音図なのです。前ページに四つの音図をまとめて掲げます。人間の持つ心の性能をよくよく観察して見届けますと、それを五十音図としてまとめて表すことの出来た私たち祖先の、精神の緻密さに驚嘆するばかりです。

しかし、四つの五十音図のうち、言霊イの天津菅麻（音図）だけは、母音と父韻とも、先にお話しました配列の法則と趣を異にします。何故なら人間の創造意志は他の四つの性能に働きかけて現象を起こさせる原動力でありますが、意志それ自体は直接に現象として現れることがないからです。従って八つの父韻の定まった順もありません。

［注］アイウエオ五十音図の起源はたかだか数百年以前だ、というのが現在学界の通説です。その理由は、それ以前には五十音表の書かれた文書が史実の上で見当たらないためです。けれど私たちの祖先が使っていた日本語が、先にお話しました先天構造の原理と五十音図の原理から作られたという事実が理解されますと、五十音図が作られたのは大昔であることが了解されるでしょう。

第三章　天地の初発（はじめ）の時

偉大な宗教書や民族の神話は「天地のはじめ」を説いています。

日本人も世界の人々も随分長い間、この「天地のはじめ」ということについて、途方もない間違った解釈をしていました。その誤解から世界の歴史は紛争の歴史となり、人々の心がどんなに歪められてきたことでしょうか。

今こそ、その誤解を改める時です。きっと、人々の心は暗雲が去ったあとの晴天白日のような晴れやかさを取り戻すことでしょう。

天地の初発の時

日本の古典である『古事記』をお読みになったことのある方は多いことと思います。その『古事記』の神代の巻の最初の文章には、

「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は……」とあります。

またキリスト教の旧約聖書の創世記第一章の最初に「元始に神天地を創造たまへり……」と書かれています。

『古事記』で「天地の初発の時」といい、旧約聖書に「元始に」と書かれている「はじめ」とは、何のことを指しているのでしょうか。大方の人は私たちが生きているこの大きな宇宙が形成される初めの時、と考えることでしょう。現在ばかりでなく昔の人も、宗教学者でさえそのように考え疑うことさえしなかったようです。幾十億年、いや幾百億年、幾千億年か昔、宇宙が混沌として何もはっきりした形をしていなかった時、人の知恵では計ることの出来ない偉大な、眼には見えない力を持った神が、銀河系を、星雲を、太陽を、地球を創造していったと解釈してきたようです。

「その神の愛子であるイエス・キリストのお生まれになった我らの地球が宇宙の中心であり、従ってその地球の周りを太陽が動いているのであって、地球が太陽の周りを動いているなどと主張する地動説は神への冒涜である」といって天文学者ガリレオ・ガリレイはローマ教会によって宗教裁判にかけられました。これも「元始に神天地を創造たまへり」を教会自体が「この宇宙や地球は、神様がまるで私たちが手工芸で何かを作るようにお作りになった」と解釈していたためでしょう。

宗教界の主張に反して、近代の科学は太陽の周りを地球が動くという地動説を完全に証明してしまいました。宗教の私たち人類の生活に及ぼす影響力は、日々年々低下していくのが実情のようです。

このような論争や混乱は、すべて「天地の初発」とか「元始」のとんでもない間違った解釈からきているのです。私たち人類は、いつ頃からこの「初発」について見当違いをしはじめたのでしょうか。多分この二千年間、次第に進歩してきた物質科学の影響のためでしょう。

『古事記』の「天地の初発の時」も聖書の「元始に」も、それを聞くと私たち現代人はすぐに、幾百億年も昔のことを思い浮べるかも知れません。しかし、それは天文学的や地球物理学的な宇宙――太陽や地球など――が形成された初めの時のことではありません。神話や宗教書のいう「天地」とか宇宙というのは、今まで説明してきましたように、心の宇宙のことを指し

ていっているのです。

人が何も思ったり、考えたりしないでいる時、心は宇宙そのものです。エネルギーが満ち満ちていて、しかも何もない広い宇宙です。その宇宙に何かが起ころうとする瞬間、それが「天地の初発の時」であり、「元始に」の時なのであります。ですから、その「初発」というのは幾百億年も昔のことではなくて、常に「今」のことをいっていることになります。何かが心に起ころうとする瞬間が、人間にとって「今」なのであり「ここ」でなければならないでしょう。

神話や宗教書の「元始に」とは必ずその「今・ここ」の心が現象を起こそうとする初めのことをいっています。

人の心は、実はいつもこの「今・ここ」に生きています。ただ私たちは過ぎ去った出来事にわだかまりを持ったり、これから先のことに不安を抱いたりして、「今・ここ」をともすると見失いがちになっています。それらのことに心を煩わされず、広い宇宙のような心持ちでいられたら、どんなにか楽しい人生を送ることが出来るでしょう。

古代の日本人は、この「今・ここ」に生きる術を心得ていたようです。昔の人は「今・ここ」を中今（続日本紀）と呼んでいました。その宇宙そのもののような広い心こそ、愛と芸術が尽きることなく流れ出てくる心なのです。万葉集の中に見られる素直で心情溢れる歌も、昔の日本人の明るい心から生まれ出たものでありましょう。

以上のように世界中の神話や宗教書がいう「天地の初発」とか「元始に」ということが、常に「今・ここ」で心の宇宙から何かが生まれようとしている時と解釈しますと、もう決して物質科学の研究と宗教・神話は葛藤を起こすことはありません。科学は精神科学を含めて研究の対象を、自己本体の外側に客観として見る研究学問です。それに引きかえ、宗教や神話は自己の内面を主観として省みる学問研究である、という区別がはっきりつくからです。

科学との葛藤がなくなるばかりでなく、人間の心を純粋に主観として見て心の構造を明らかにした言霊の学問では、人間が科学を研究するその心、科学する心の構造まではっきりと解明し尽くすことが出来たのでした。

次の項から話を本筋に戻して、先天構造の説明を先に進めることにしましょう。

枕言葉――辞書には「主として古来の歌文に見える、わが国固有の特殊な修辞用の語句」と説明されています。その「わが国固有の……」といわれる理由は、日本語の起源である「言霊」から始まっているからです。現在、国文学で「語義不詳」という枕言葉の意味も、言霊の原則からみると極めて明瞭に理解出来ます。空白の多いページを利用して説明をいたします。

『古事記』

先に「天地の初発（はじめ）の時」の意味の取り方についてお話した項で、『古事記』の名を出しました。ここでは『古事記』の神代の巻の内容とその解釈について、現代人にとって全く耳新しいことをお話することにします。

『古事記』という書物は、七一二年（和銅五年）太安萬侶（おおのやすまろ）によって選上されました。ご承知のことと思いますが、全部漢字で書かれています。と言っても漢文ではありません。日本の言葉一語一語に、同音または同意の漢字を当てはめて文章としたのです。私たちは難しい漢字や外国語に振り仮名をします。それと同様に『古事記』は日本語に振り漢字をしたようなものです。例えば「そらみつ　大和の国は」の言葉を「虚見津　山跡乃国者」と文章にしている、といった具合です。そして一七九八年、本居宣長によって『古事記伝』として正式の日本文に翻訳されたのでした。

『古事記』には上中下の三巻があります。ここで取り上げようとするのは、上巻の「神代の巻」です。さてこの『古事記』の神代の巻が、古代の日本人が考えた単なる神話や文学作品な

のではなく、神話の形式を借りた言霊の学問の手引書、教科書であるといったら、読者はどう思われるでしょうか。多分「まさか」の言葉が返ってくるのではないでしょうか。でもそれは紛れもない事実なのです。説明を進めていくことにしましょう。

神代の巻は、その最初の文章が先にお話しましたように「天地の初発の時……」と始まります。この「天地の初発」は、今までの世の中の人が考えていたような、天体物理学や天文学で取り扱う物質宇宙の初めのことではなく、精神宇宙に関することを書いている、というお話でした。何百億年も昔の宇宙や銀河系や太陽系が形成された時のことではなく、心の宇宙から人間の思いが始まろうとしている瞬間のことをいっているのです。実際に生きている人間の思いや考えが始まろうとする瞬間とは、常に「今・ここ」でなければならないでしょう。

神代の巻には「天地の初発の時」に続く文章で色々な神様の名前が次から次と出てきます。「天地の初発の時」が物質の天や地の形成された時ではなく、心の宇宙に人間の思いが始まろうとする時ということになりますと、その次に出てくる色々な神様の名前も天や地や太陽や月、木や風、川や海などの自然を神格化した神様なのではなく、「今・ここ」で人間の思いが始まろうとしている心の宇宙の内容についての何かを表現しているのだ、ということになります。

この本の「コトタマとは」の項で、私たち日本人の祖先は、人間の心を形成している言霊の数は先天十七個、後天三十三個、合計五十個であり、その五十個の言霊を操作する運用法も五

十あるとお話しました。総合計百個の原理ということになります。

このことを頭に入れておいて、『古事記』の最初に出てくる神様の天の御中主の神から天照大神・月読命・須佐男命の三神まで数えてみますと、驚くことにちょうど百個の神名が登場してくるのです。最後の須佐男命が生まれた後で、「吾は子を生み生みて、生みの終に、三柱の貴子を得たり」と言って伊耶那岐の命が大層喜ばれたと『古事記』にありますから、最初の天の御中主の神から須佐男命までを数えたわけです。ちょうど百個の神名、それは言霊の百個の原理と数が一致するではありませんか。

それだけではありません。神代の巻の最初の章「天地のはじめ」の中に出てくる神様の名前が全部で十七、これは人間の頭脳の先天構造の言霊の数十七とも一致するのです。「天地のはじめ」とは、精神的にいえば先天のことということが出来るでしょう。少々長くなりますが、『古事記』の「天地のはじめ」の章を書いてみましょう。

天地の初発の時、高天の原に成りませる神の名は、天の御中主の神。次に高御産巣日の神。次に神産巣日の神。この三柱の神は、みな独神に成りまして、身を隠したまひき。

次に国稚く、浮かべる脂の如くして水母なす漂へる時に、葦牙のごと萌えあがる物

に因りて成りませる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲の神。次に天の常立の神。この二柱の神もみな独神に成りまして、身を隠したまひき。

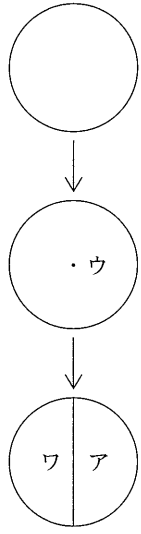
次に成りませる神の名は、国の常立の神。次に豊雲野の神。この二柱の神も、独神に成りまして、身を隠したまひき。

次に成りませる神の名は宇比地邇の神。次に妹須比智邇の神。次に角杙の神。次に妹活杙の神。次に意富斗能地の神。次に妹大斗乃弁の神。次に於母陀琉の神。次に妹阿夜訶志古泥の神。

次に伊耶那岐の神。次に妹伊耶那美の神。

以上が『古事記』神代の巻の第一章「天地のはじめ」の全文章です（角川文庫、『古事記』、武田祐吉訳注）。確かに神様の名前が十七出てきます。日本の古代の大和言葉に同音または同意の漢字を当てた文章ですから、それぞれの神様の名前がどんな意味を持っているのか想像もつかないでしょう。けれど「天地のはじめ」が「何物もない心の宇宙から人間の思いが現れようとしている時」のことをいっているのだ、ということを心に留めておいて、この本の「思考のはじまり」の項でお話しました人間の目覚めの時の意識の動きの構造を考え合わせてみますと、『古事記』の神名と言霊との関係が次第に鮮明に理解されてくるのです。

心の宇宙の中に何かの思いが起ころうとして、まだ実際には現れてこないうち、言い換えますと心の先天構造の内容を言霊で示した図を再び取り上げます（図参照）。

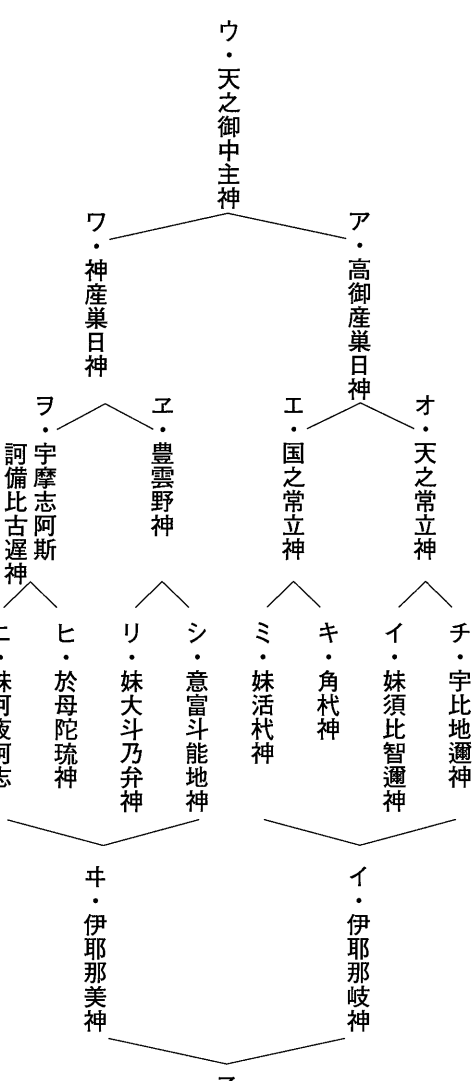


この図を心に留めておいて『古事記』の最初に出てくる神名、天の御中主の神を考えてみます。心の先天の中に「今・ここ」で何かが起ころうとする瞬間、その動き、うごめき、生まれようとする気配の宇宙に言霊ウと名付けたことは以前にお話しました。さて天の御中主の神の天は心の先天部分を示しているということが出来ましょう。その先天の中に何かの意識が起ころうとしています。実際に起ころうとする意識は「今・ここ」以外にはありません。そしてその意識がいかに小さいものであっても、宇宙は無限に広いものですから、一点をどこにとっても、それは宇宙の中心に位置しています。しかもその中心の自覚者（主）です。そうしますと『古事記』が「天地のはじめ」の章で示した天の御中主の神という神名は正しく言霊ウの宇宙をそのまま指し示しているではありませんか。

心の先天の二段目に入りましょう。何かは分からないが、心の中に生まれようとする気配の宇宙である言霊ウは、次の瞬間、これは何だろうという意識が起こると同時にあなたと私、客

体と主体に分かれる、すなち言霊ワとアに分かれるということでした。

『古事記』ではどうでしょうか。高御産巣日神と神産巣日神の二神です。この神の名前は当て漢字のためにちょっと気付かないのですが、読み方だけを取ってみますと「タカミムスビノカミ」と「カミムスビノカミ」となります。片方に「タ」の一字が有るか無いかの違いだけな



のです。「タ」の音は言霊の学では純主体性を表す音です。「カミムスビ」とは噛み合わさって結ぶという意味です。主体と客体が噛み合わさる、言い換えると主体と客体が感応同交して現象を生むために結ばれる宇宙という意味となります。これも正しく主体である言霊アと客体であるワを指し示している神名ということが出来ます。

このように言霊というものの内容を『古事記』の神様の名前が、一つ一つ神話の中の謎々の形で指し示していることが理解されてきます。筆者が『古事記』神代の巻は言霊の学問の手引書、教科書だという理由はここにあります。本書は『古事記』の講義書ではありませんから、言霊と神名を一つ一つ検討していくことはあまりに長くなりますので省略することにして、人間の心の先天構造を表す言霊と『古事記』の神名の関係を右に図で示すに留めましょう。

以上の説明でも、現代の大方の人々はあまりに唐突な主張だとお思いになることでしょう。そこで右の図にある神名のうち、さらに二つばかりを取り上げて説明しておきましょう。

◆言霊オ・天の常立の神

従来の『古事記』の註釈書では、「天の常立の神」を「天の確立を意味する神名」と解釈しています。言霊学でみるとどうでしょうか。言霊オとは過去の現象を思い出して、その現象同志の因果関係を調べる、いわゆる経験知の出てくる元の宇宙ということでした。天の常立の神

という名前は、この経験知をよく表しているではありませんか。宇宙大自然（天）を恒常に（常）成立させる（立）実体（神）であると『古事記』は説明しているのです。それは学問・科学そのもののことであります。

◆言霊エ・国の常立の神

言霊エの宇宙とは言霊ウ（欲望）・オ（経験知）・ア（感情）という人間性能のうち、今はどの性能で事に対処したらよいかの選択知、実践智が出てくる宇宙の次元です。この働きが社会的になったのが道徳であり、政治というものです。この働きを指示する『古事記』の神名は国の常立の神です。国家（国）が恒常に（常）成立する（立）実在（神）という意味であり、言霊エの宇宙の内容そのものではありませんか。『古事記』の神名が言霊を指示していることを証明するよい例でありましょう。

さらに『古事記』の言霊の内容を説明する巧妙な表現を一、二付け加えることにします。

「天地のはじめ」の章の中で、天の御中主の神（言霊ウ）、高御産巣日の神（言霊ア）、神産巣日の神（言霊ワ）の三柱の神、並びに宇摩志阿斯訶備比古遅の神（ヲ）、天の常立の神（オ）の二神、さらに国の常立の神（エ）、豊雲野の神（ヱ）の二神、計七神について「独り神に成

りまして、身を隠したまひき」と述べられています。

以上の七神に指示される言霊は、皆、母音か半母音です。母音・半母音の言霊は、それ自体が一つの宇宙そのままの実在であって、独立した宇宙です。その内容を『古事記』は「独り神」と形容しています。またそれらの宇宙は人間の精神の先天であり、色々な現象がそこから生まれてくるのですが、それ自体は決して現象となって現れることはありません。「身を隠したまひき」とは誠に適切な表現でありましょう。

『古事記』神代の巻の最初の「天地のはじめ」の章に出て来る十七の神様の名前が、人間の頭脳の先天構造を形成している母音、半母音、父韻、親音の十七の言霊のことを指し示していることを説明してきました。さらにこの十七神に続いて『古事記』の神様の名を順に調べていきますと、「神々の生成」の章に沢山の神々が出てきます。大事忍男の神（言霊タを示します）から始まって三十三番目の火の迦具土の神（言霊ン）までが、心の後天のすなわち現実に現れた現象の要素の三十三個の子音の言霊のことです（言霊ンは、言霊ウから転じた神代文字のことです）。

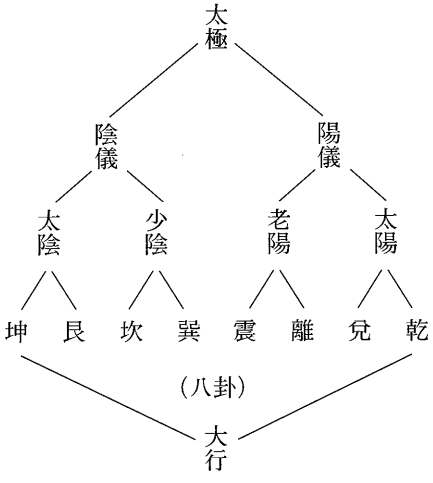
『古事記』の神様の名前はさらに続きます。火の迦具土の神の次の金山毘古の神から百番目の須佐男の命までの五十神は、先天十七、後天三十三、計五十の言霊を操作運用する五十の方

法を表しています。その五十の神の一つ一つについて説明していくことはあまりに煩雑になりますので、ここでは省略することにいたしますが、もし興味をお持ちの方は筆者の既著『古事記と言霊』をお読みいただきたいと思います。その神様の名前の指し示すことに従って実際に自分の心のなかの動きと照らし合わせていきますと、『古事記』の神名がいかに微に入り細にわたって正確に人間の心の構造を表現しているかを、はっきりと汲み取ることが出来ましょう。

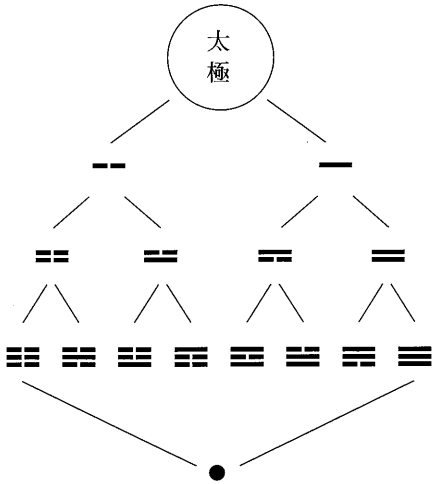
以上、長々と『古事記』の神代の巻に出てくる神様の名前についてお話を進めてきました。『古事記』の神話が単なる日本古代の神様の物語なのではなく、言霊の原理の手引書として、教科書として編纂されたものであることをご理解いただけたでありましょうか。そしてこんな謎なぞのような神話を編纂した太安萬侶という人の意図は何だったのでしょうか。まことに興味津々たるものがあるではありませんか。

易経

人間の精神の先天構造を前章のように図で表しますと、中国から始まったといわれる易(えき)をご存じの方はすぐにお気付きになることでしょう。「易の太極図と全く同じだな」と。そうです、同じです。ただ違うことは、言霊図が物事の最小単位の実体である言霊で構成されているのに対し、太極図は太極・陽儀・陰儀……という概念用語と━とか╍という数理をもって示されていることです。まず易の太極図を二種類挙げることにします（図参照）。



易というと現代人はよく大道で見られるように、筮竹の数をかぞえて人の吉凶禍福を占うものと考えるでしょう。けれど、この易の教えが今から数千年以前、中国の伏羲(ふぎ)という聖王が始めた東洋哲



学の奥義であり、有名な孔子が十翼といわれる十篇の注釈書を書いたことを知る人は少ないようです。

上に示しました太極図について注釈書には「この故に易に太極あり。是、両儀を生ず。両儀、四象を生じ、四象は八卦を生ず。八卦は吉凶を定め、吉凶は大業を生ず」と説明しています。注釈に使われている言葉自体が東洋哲学の難しい概念ですから、意味が分かりにくいのですが、易経をよく読んでみると、この太極図が前の章で示した言霊十七個による心の先天の構造図と全く同じように、何もない宇宙から現象が現れてくる過程を説明しているのだ、ということが理解されます。

それなら、心の先天の構造を表した易の太極図と現在行われている筮竹の占いとは、どんな関係なのかを考えてみましょう。

中国の古代の『左伝』という書物に「聖人は卜筮を煩はさず」とあります。また『荀子』という書物の大略篇には「善く易を為むる者は占はず」と書いてあります。聖人とは、人生の道理について深く悟った人ということでしょう。聖人の聖という字は耳と口の王様と書きます。

耳と口といえば言葉だとすぐ分かります。他人の言葉を耳で聞いて、その意味を正確に判断し、その答えを道理に叶って出す人、ということです。となると、先にお話しました心の先天構造をよく分かっている人と同じ意味になりましょう。

つまり「人の心がよく分かった人は筮竹で占うことはしない」ということです。

「善く易を為むる者は占はず」も同様の意味の言葉です。易の太極図を心でよく悟った人は、筮竹を使わないというのです。

聖人は筮竹の占いをしませんでした。聖人の考えることは易の太極図の道理そのものだった、ということが出来ます。中国に孔子・孟子以後、聖人がいなくなりました。そこで、将来の不安から逃れるために筮竹の法が流行し出したのです。

さて、日本で天津磐境（あまついはさか）と呼ばれる心の先天構造図と中国の易の太極図とは、原理の上で、また歴史的にどんな関係にあったのでしょうか。どちらが古くて、どちらが歴史的に新しいのでしょうか。世の大方の人々はもちろん「中国五千年の歴史」といわれ、日本の歴史はたかだか二千年だから、中国の太極図の方が古いに決まっていると思われることでしょう。果たしてそうなのでしょうか。何千年の昔のことを明らかにする問題でもあるのですが、その話は後に譲ることにします。ここでは天津磐境と太極図が表現は違っても内容は同じものなのだ、ということだけに留めておきます。

第四章　言霊学の歴史

私たち日本人の先祖が言霊の原理を発見してから、数千年の年月が経ちます。その間、言霊の学問は、幾多の変遷を重ねてきました。そしてその変遷の都度、世の中に大きな影響を与えてきました。言霊学の変遷は、社会相を根底から揺り動かすこととなります。その歴史についてお話しましょう。

言霊学の歴史　その一

言霊について今まで色々とお話をしてきました。言霊の学問は世界の屋根といわれる高原地帯が発祥の地だとか、聖（霊知り）の集団が推定八千年前頃この日本に渡って来て、その原理に基づいて日本語を作ったとか……現代人があまり耳にしていないようなお話でした。これまでお読みくださった読者は、一様に不審に思われるのではないでしょうか。それは「それほど確信をもって著者が言霊の存在と意義を主張するにしては、日本の社会にあまり知れ渡っていないのはどうした訳なのか？」の疑問でありましょう。

それは当然の疑問です。筆者も三十年ほど前、初めて言霊の学問に出会った時、日本語の起源である言霊の学問の奥深さと合理的なことに驚くと同時に、その疑問を感じたものでした。

ある時代に盛んであったものが、時の経過とともに人々から忘れ去られていくということはもちろん珍しいことではありません。一世を風靡した習俗や習慣も、時代とともに消えてなくなっていくことはざらにあります。けれど私たち日本人が数千年の間日常使っている自分達の言葉の起源となる法則が、ただ「コトタマ」という言葉だけを残して世の中から埋れてしまう

ことなんてあるのだろうか。それとも国家民族にとって一番大切なもの――その民族の言葉の起源法則――が人々の関心を失ってしまうには、何か事情があるのだろうか。筆者はその当時、そう考えたこともありました。

そんな疑問が、筆者の言霊学の師であった小笠原孝次氏という方から日本の古典である『古事記』『日本書紀』の講義を聞いて即座に吹き飛んでしまったのでした（氏は昭和五十七年十一月二十九日東京都渋谷区幡ケ谷で七十九年の一生を終えられました。生涯を言霊学の研究に捧げられた方です）。

師の『古事記』『日本書紀』の講義は、歴史学・東洋哲学・西洋哲学・宗教学・心理学・言語学・文学等々にわたる、広い知識に裏付けられた厳格であるとともに明快なものでありました。

師の遺著『古事記解義、言霊百神』の一番初めの章を数行ご紹介します。

天地のはじめの時

天地は今・此処で絶えず開闢（かいびゃく）しつつある。『古事記』が説く「天地のはじめ」とは天文学や生物学や歴史の上の観念で取り扱うところの事物の初めを言っているのではない。『古事記』神代巻は必ずしも過ぎ去った大昔の事を取り扱っているわけではない。今が、そして此処が、

すなわち now-here が恒常に天地の初めの時であり場所である。すなわち天地は実際に今、此処で絶えず剖判し開闢しつつある。その今を永遠の今と言う。この事を禅では「一念普観無量劫、無量劫事即如今」（無門関）などと言う。「永劫の相」（スピノザ）とも言う。そしてその場所が常に宇宙の中心である。この今、此処を「中今」（続日本紀）と言う。

明治生れの師の文章は、時に現代人にとって難解なところがありましたが、『古事記』の神代の巻の最初の文章である「天地の初発の時」を、計り知れないほど大昔の宇宙の始まりのことではなく、心の宇宙の内部に人間の思考が始まろうとする一瞬の時、すなわち、「今」なのであることを発見したことは、従来の『古事記』の解釈に百八十度の転換をもたらすこととなりました。

そこで当然、『古事記』の神代の巻の文章は、大昔宇宙や太陽や地球が始まったことをいっているのではなく、心の宇宙の内部に人間の思いや考えが始まり、次第に頭の中で練られ、一つのまとまった言葉として現れてくる、人間の心の構造を示している、ということになります。しかもその事情を神話の形式で書き表しているのです。何故そんな廻りくどい神話形式をとって、心の構造を直接ズバリそのまま書かなかったのでしょうか。そんなことをする必要が何故あったのでしょうか。

「そんな、こんな」を頭に入れながら『古事記』を読んでいきますと、日本の古代の歴史の経緯（いきさつ）や言霊の歴史、それに古代の私たち日本人が到達していた心の知識の奥深さ等々がはっきりと窺（うかが）い知ることが出来ます。

『古事記』や『日本書紀』は単なる古典文学というだけではなく、日本語の起源である言霊の学問の伝言書でもあることです。またそれによって言霊の学問の消長の歴史も明瞭に知ることが出来るのです。

言霊学の歴史　その二

日本の古典である『古事記』や『日本書紀』の神代の巻は、単なる神話ではなく、神話の形式を借りた言霊原理の手引書であり、教科書なのだということを前項、前々項でお話をしてきました。『古事記』は七一二年太安萬侶により、また『日本書紀』は七二〇年舎人親王（とねりしんのう）らにより撰上されたものです。

「もしそうなら、太安萬侶や舎人親王たちは何故に言霊の原理をそのものズバリと書かず、神話の形式をとったり、煩雑な神様の名前などを使ったりして、全く廻りくどい方法を用いたりしたのか？」という疑問が当然起こってきます。

それが民間の一個人の書いた小説や民話のようなものならともかく、『古事記』や『日本書紀』は、その当時の行政府の事業として計画され、完成されたものであることが記されています。とするなら、その記述が言霊の原理そのものを明らさまに書くことなく、神話の形式をとって、一見謎々のような文章にあえてしなければならない確乎とした理由があったに違いないのです。しかも、暗示している対象の言霊の原理は、人間の精神の究極最高の真理であり日本

語の原典なのです。

この事情を歴史学的に明らかに説明しようとしますと、少なくともこの本一冊分くらいの紙数を必要となりますから、ここでは結論を手短にお話するに留めることにしましょう。箇条書きにすると、次のようにいうことが出来ます。

一、大昔、日本人の祖先の長年の研究の末に人間の心の構造が解明され、アイウエオ五十音言霊の原理として完成されました。

二、その原理を保持した聖の集団が地球の高原地帯からこの日本列島に渡って来ました。そして、まず原理に基づいて日本語を作ったのです。また、その日本語が表現する実相そのままの社会・国家体制を築き理想の精神文明を創造しました。

三、精神文明の成果は世界中に伝播し、地球上には数千年にわたって精神文明繁栄の時代が続いたのです。世界の各民族に今なお現存する神話は例外なく「大昔、精神的に豊かな平和な理想時代が存在した」ことを伝えています。これらは事

実存在した精神の時代を、神代という表現で後世に伝えたものなのです。

四、歴史のある時点に、その時までの精神文明に次いで物質文明の創造が急務であることを感じた聖の集団は、精神文明の基礎である言霊の原理を一定の期間、方便として世界の人々の意識から隠してしまう方策を決定したのでした。なぜなら物質文明は生存競争の場においてのみ、その創造は促進されるからです。物質科学研究は弱肉強食の競争社会において、最も急速な進歩を遂げることは現代人がよく認識するところでしょう。平和・互譲の精神時代は方便として終焉を告げることとなりました。三千年程前、日本からの精神文明の輸出は停止され、二千年前、日本においても言霊原理の社会への運用は完全に停止されてしまいました。

五、この文明創造の方針の大変革に当たって、日本の政府では種々の準備に万全を期しました。そのいくつかの例を次に列挙することにしましょう。

A、言霊の原理の自覚を表す三種の神器（鏡・曲玉・剣）は、代々天皇の御座所近

くにおかれていました。二千年前、崇神天皇の御代、三種の神器を伊勢五十鈴の宮に天照大神という神様としてお祭りして、天皇から切り離してしまいました。この事実は『日本書紀』崇神天皇の章に詳しく載っています。天皇が実践智の鏡である言霊の原理の自覚を失ってしまったことを意味します。この歴史的事実を「天皇と神器との同床共殿制度の廃止」と呼んでいます。

B、言霊の原理はただ世の中から忘却されたのではなく、物質文明促進のため、一定期間、方便のため世の表面から隠されたものです。だから物質文明が進歩し、完成に近づいた時には、再び日本人の脳裏に蘇ってこなければなりません。そのための施策が色々講ぜられたのです。

C、三種の神器のうち、特に八咫鏡を天照大神としてお祭りした伊勢の神宮の本殿の構造を現在まで「唯一神明造り」と呼んでいます。その建築構造は、時がきて言霊の原理からみると、アイウエオ五十音図にそっくりそのまま写しかえることが出来るように造られています。五十音の言霊を並べて人間の精神の理想構造を表したものを器物として形どったのが八咫鏡なのです。唯一神明造りと

はただ一つの神の内容が明らかとなるよう造られたもの、という意味です。例えば神宮の最高の秘儀として尊ばれる本殿下の「心の御柱」を初めとして本殿の構造、千木、鰹木に至るまで、言霊の原理に則って形づくられています。

D、宮中の重要な儀式の形式の中に言霊の原理は巧妙に取り入れられました。例えば先に行われた天皇一代に一度の大嘗祭や、天皇の子が皇太子として立つ儀式の一つである壷切りの儀など、今では宮内庁の人々でもその意義が分からなくなってしまっていますが、言霊の原理からみると、どうしてその様な形式で行うのかが一目瞭然となります。日本人の宝である原理を儀式の形で後世に伝えようとしたわけであります。

E、そしてこの章の主題である『古事記』・『日本書紀』の神代の巻の神話も、以上お話してきました趣旨に基づいて編纂されたものです。崇神天皇が言霊の原理を信仰の対象として神様に祭ってしまって七百年、言霊の原理は名実ともに日本人の意識から完全に忘れられようとしている頃、方策の最後の手段として計画され編纂されたのが『古事記』・『日本書紀』だったというわけです。

言霊の原理は、将来の日本人の意識に蘇える時に備えて確かに後世に伝えねばならず、そうはいっても当面の方針に従って明らさまに書くわけにいかず、当時の聖達はさぞ苦心したことでしょう。その結果、神話という形で言霊の原理の詳細を遺すこととしたのです。その苦心は見事に『古事記』・『日本書紀』の神代の巻の神話としてまとめられました。今、言霊の原理がはっきりと解明され、理解された眼で記・紀の両書を読みますと、一字一字、一行一行驚くべき新鮮さで心の中に神話の物語が元の言霊の原理となって蘇ってきます。最初の「天の御中主の神」から五十番目の「火の迦具土の神」までが、それぞれ言霊の五十音を表徴した神名であり、五十一番目の金山毘古神から百番目の須佐男命までが、言霊の五十の運用法なのであることが明らかに理解されてくるのです。

しかも最初の五十の神々が五十音のどれを表すかの要点は、宮中の賢所に二千年間保存されてあったと聞きます。賢所とは文字通り世界中で最も賢い所である、ということがいえましょう。

なのだという筆者の主張に対して、当然起こって来る疑問に対する解答をお話してきました。

これをお読みになった読者の中には「そんな話は日本のどんな歴史書にも載っていない」と眉に唾される方が多いことでしょう。ただ話を聞いただけではそう思われるのも当然のことです。しかし、もし読者が『古事記』の示す天の御中主の神言霊ウ……と、先に心の先天構造の項でお話したことを読者ご自身の心の中に分け入って確かめられるならば、そして言霊の原理が確かに生きている人間の心の構造を明らかにしている事実に気付かれるならば、この本に書かれたことが真実かも知れない、と思われるに違いありません。それらの証明は、この章の次からお話いたします事柄の数々によって、確かめていただきたいと思います。

さて、今まで言霊の原理が世の中の表面から隠されてしまったことについてお話をしてきたのですが、それなら、隠されたものがどんな経緯で今お話しているような言霊の学問として蘇ってきたのか、ということになります。隠されたものが、真に二千年の長い間隠されていたのですが、それが現れる歴史については次項「言霊学の歴史　その三」としてお話することにします。

言霊学の歴史　その三

筆者が事細かく言霊のお話をしますと、読者の中には、二千年も前に世の中から隠されてしまった言霊の原理というものが、どうして再びこの世の中に復活してくることが出来たのだろう、と疑問を持たれる方もいらっしゃることと思います。そこで近代の言霊の原理についての歴史をお話することにしましょう。

物は焼けてしまえば跡形もなくなります。けれどもその物を作ったり見たりした人の記憶は長い間残ります。一度人の心の記憶に印画されたものは、その人一代はもちろん、子々孫々の心の中に受け継がれ、消え去ることはありません。そして必要があれば、その責任を負う人の頭脳を通じて記憶として蘇るものなのです。ましてそれが民族の言語を生んだ原理ともなれば、その言語がその民族によって語られ、それによって民族の歴史が創られている限り、言霊の原理が時到らば再び復活することは当然ということが出来ましょう。

第十代崇神天皇により言霊の原理の政治への適用が廃止され、世の人々から言霊の原理の存在は次第に忘れ去られていったのですが、その後の歴史の中で、その行跡や遺された文章など

によって言霊の原理を明らかに、またはある程度知っていたと思われる人々の名前を挙げることが出来ます。『古事記』を選上した太安萬侶、『日本書紀』撰上の舎人親王、その他役小角（えんのおづぬ）、柿本人麻呂、菅原道真、空海、日蓮等々です。

これらの人たちが遺された行跡や文章から、言霊のことをどのように表現していたかを考察するのは興味溢れる問題ではありますが、紙数の関係上、今回は省略することに致します。

近代になって初めて言霊の原理の存在を知り、言霊研究の先鞭をつけられたのは明治天皇であります。天皇のお歌の中には「敷島の道」とか「言の葉の誠の道」という言葉が数多く見られますが、これらの言葉は、現在世の中でいわれているような単なる三十一（みそひともじ）文字の和歌の道のことではなく、言霊の原理を指したものなのです。

明治天皇の御製に次のような歌があります。

聞き知るはいつの世ならむ敷島の大和言葉の高き調べを
しるべする人をうれしく見出てけり我が言の葉の道の行手に
天地を動かすはかり言の葉の誠の道をきはめてしかな

古代においては三十一文字の和歌は、ただ単に事物や感情を歌うだけでなく、その中に言霊

の原理を巧みに折り込むことによって言霊の原理（布斗麻邇）の修行を積む方法であったのです。万葉集から古今集までの和歌にはそのような歌が幾多発見されます。

明治天皇の皇后となられた昭憲皇太后が一条家よりお輿入れの折、そのお道具の中に言の葉の誠の道に関する書物が入っていて、天皇は皇后とともに言霊の原理の存在に気付かれた、と伝えられています。明治天皇が日本民族の伝統である言の葉の誠の道（言霊布斗麻邇）の真理に精通しようといかに希望されていらっしゃったか、前記のお歌がよくそれを物語っているように思われます。

明治天皇・皇后お二方の『古事記』上つ巻に基づく言霊学研究のお相手を務めたのが、山腰弘道氏（旧尾張藩士、皇后付きの書道家）でありました。氏は筆者に言霊学を教えてくれました小笠原孝次氏の、そのまた先生であった山腰明将氏の父親であります。

太平洋戦争後に亡くなられた山腰明将氏の遺された文章の中に、『古事記』の神代の巻に出てくる神様の名前がそれぞれアイウエオ五十音の一つ一つと結び合わされていました。前に説明したことですが、『古事記』の神様の名前と五十音の一つ一つを結び付ける作業は一人や二人の人の研究だけでは到底出来ない言霊学の奥義でありますので、この奥義は、多分長い間宮中に秘蔵されていたものであろうことが推測されます。

山腰氏の学問を受け継いだ小笠原孝次氏の生涯をかけた研究によって、その時までは全く信

仰的・哲学的でありました言霊の学問が、現在に生きている人間の心の学問として、考える人間の心の構造を明らかにした精神の科学として体系的にまとめ上げられたのでした。

日本語を話す人ならば誰しも、自分の心を反省してその心の仕組みを考えていけば、必ず到達することが出来る精密な学問体系として完成されたのでした。

希望する人ならば誰でも、古代の日本人の祖先がそうであったそのままの姿で、人類の第一の文明の真髄であった精神の原理をマスターすることが出来るようになりました。アイウエオ五十音言霊の原理は、二千年の暗黒の歴史の中から不死鳥のように蘇った、ということが出来るでありましょう。

第五章　日本神道について

現在の日本の神道は、「神社神道」と呼ばれています。神社神道が興る以前、その原型がありました。それが言霊布斗麻邇の学問であり、神社神道と比べて「古神道」といわれています。

古神道から神社神道へ、内容はどう変わったのかをお話することにしましょう。

神様に対する態度

現代人が神様（仏様）に対する態度は、どのようなものでしょうか。

まずは神を信じること、次には神を信じないことの二種類が考えられます。その他に、「人間は誠心誠意励んでいれば、拝まなくても神は守ってくれるはずだ」という人がいます。この人も神の存在を心の底では信じているのでしょう。

古代の日本人の神様に対する態度は、大変はっきりしていました。その態度は二種類あり、言葉の上で明快に区別されていました。一つは「斎（いつ）く」であり、もう一つは「拝（おろが）む」ことです。

斎くを説明しましょう。斎くの語源は「五作（いつく）る」です。五を作るとはどういうことなのでしょうか。そこに言霊が登場です。人間の心は五つの母音の重畳で出来ています。心の先天構造の項でお話しましたが、五官感覚による欲望の宇宙（言霊ウ）、経験知の宇宙（言霊オ）、感情が出てくる元の宇宙（言霊ア）、実践智道徳の宇宙（言霊エ）、それに創造意志の宇宙（言霊イ）の五段階の宇宙です。

「五作る」の作るとは、よく理解して使い分けるという意味です。人は物事を考える場合、

ともすると眼前の事態を欲望の問題として対処するべきか（言霊ウ）、過去の経験知に全面的に頼るのがよいか（言霊オ）、それとも感情の赴くままに解決すればよいか（言霊ア）……等々、問題の捉え方に迷って考えあぐむことがよくあるものです。この場合、人がもしそれぞれの異なる心の宇宙や次元を自分の心中にはっきりと区別し、認識して、それぞれの次元の心がどう動くかのメカニズムの相違を熟知しているとしたら、その人はどんな問題にも気持ちよく対処していくことが出来るはずです。迷うことはありません。

そういう人間になろうとすれば、どうしても自分の心の中で、ウオアエイの五つの母音宇宙をしっかりと把握しなければなりません。この五つの母音宇宙を把握し、自覚することを「斎く」（五を作る）と名付けたのでした。この五つの母音宇宙を把握している人を、霊を知る人の意味で聖（ひじり）と昔の人は呼んだのです。斎くとは神に対する最高の態度であると同時に、神そのものの態度である、ということが出来ましょう。

「拝む」に移りましょう。拝むとは神様の前で頭を下げて、誓いをしたり、ご利益を願ったりする態度です。今より二千年前、崇神天皇という天皇は、その時まで人間精神の構造を表し、日本の言葉の原典であり政治の鏡でもあった言霊の原理を、天照大神という名の神様として伊勢の神宮に祭ってしまいました。それ以来、生きた聖がこの世に次第にいなくなっていったのです。人間の心の住み家である五つの母音宇宙（家・五重）のうち、人々は最高段階にある生

命の創造意志（言霊イ）と、その意志の法則である言霊の原理に則って行う実践智（言霊エ）である英知の自覚を失ってしまいました。

人々は生命を支配する法則と、その運用法である実践智の自覚を失った結果、その大きなものを神と見立てた神社の前で頭を下げ、身の安全と幸福を願い求めるより他に方法がなくなったのです。これが拝む態度です。

古代には、現在社会が持っているような物質科学や機械文明はありませんでした。だからといって、大昔の人が野蛮人であったのではありません。現代人が想像も出来ないような精神文明が花開いていたのです。その時代の人間の精神程度からすれば、現代人はやっとティーンエイジに届くか届かないかの「青二才」なのかも知れません。

「拝(おろが)む」と「愚か」とは語源を同じくしています。拝むということは神に対して愚か者のとる態度ということが出来るのです。

現代の科学は、まことに素晴らしい成果を人類にもたらしました。物質文明は、その頂点を極めようとする勢いです。と同時に、その半面、人類社会に大きな危険というお土産も持ってきました。原爆戦争・地球的規模の公害、その他種々のハイテクによる底知れない生命の不安等々、昔では考えられなかった問題が山積しています。譬えて言えば、人類を全滅させることの出来る殺人道具を運転管理しているのは、やっと年十才に達した鼻たれ小僧というわけです。

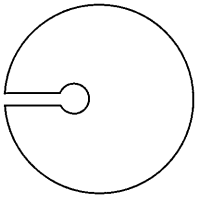
生命の法則である神を拝むのではなく、その法則を自己の心の中に自覚・実現する「斎く」人の世の中に早くなることを、世界の人々に大声で叫びたいと思うのです。

鈴

神社には拝殿の軒から綱を垂れ大きな鈴が付けてあります。参拝者はまず綱を振って鈴を鳴らし、それからお詣りします。何故鈴を鳴らすのか、ご存じでしょうか。

それは神様にお詣りする前に気持を引き締めるためでもなく、または心を込めてお詣りしますから神様どうか私の願事をよく聞いてください、と神様の注意をこちらに向けようとして鳴らすわけでもありません。鈴を鳴らす理由は言霊に関係しているのです。

古代の日本人は、神様といえば何であるかを知っていました。それが分からなくなったのは二、三千年前からのことです。人間がそれによってこの世に生を受け、それによって生活し、人間がどう行動すれば結果はどうなるかをすべて知っている大いなるもの、それを人間は神と呼びます。とするなら、その神とは言霊に他ならないことをお気付きになるでしょう。人間の心は言霊によって構成され、人は言霊の法則通りに生活し、その法則の枠から出ることが出来ません。人間の生命すべては言霊なのです。言霊こそ神なのです。



鈴

神社参拝の折に人々が鈴を振って鳴らす鈴はその古代の名残なのです。鈴の形をよくご覧ください（図参照）。鈴の形は何かに似ていませんか。そうです。人間が口を開けたところの形を表徴しているのです。口を開けば言葉が出ます。その言葉を構成している一音一音の単位が言霊です。一音一音は単に音だけのものではありません。音と同時に、例えば「タ」といえば広い宇宙の中の「タ」と名付くべきすべての内容を含んでいます。「タ」という言霊です。

参拝者にとって正面の本殿の奥にいます神様とは、実はあなたが今手で鈴を振って鳴らしている鈴の音、それに表徴されている言霊なのだよ、ということを教えてくれているのです。

三重県に伊勢神宮があります。御祭神は、内宮が天照大神、外宮は豊受姫大神です。このお宮は昔、拆釧五十鈴宮（さくくしろいすずのみや）と呼ばれました。釧（くしろ）とは古代の腕に巻く飾りのことです。その周りに小さい数個の鈴がついているものがあるので五十鈴（いすず）にかかる枕言葉となったと辞書にあります。先に書きましたように、五十鈴すなわち五十個の鈴とはアイウエオ五十音の言霊のことです。伊勢神宮の御祭神天照大神とは、実は五十音の言霊を以て表した人間の行動の鏡となる精神の構造に与えられた神名のことなのです。

神社の拝殿前の鈴と言霊との関係をご理解いただけたことと思います。神社で行う色々な儀式習慣には、多くの現代人には想像も出来ない特別な風習が沢山あります。先年行われた天皇即位の大嘗祭の儀式の様式についても、その様式の理由や起源について「分からなくなった」

という記録が、すでに室町時代の宮中祭官の記録に残っているほどです。けれどそれらの神道の儀式の様式や風習の起源とその理由について、言霊の原理はすべて明白に解明してくれます。

二　拍　手

昔、崇神天皇の時、言霊の原理は人々の意識から消えていくような仕組がとられた、と先項で書きました。そして将来、時が来れば再び人々の意識に蘇えるよう色々な施策が行われたこともお話しました。これからお話することも、世の中の色々なところで言霊の原理の表徴として遺されたものです。「あれっ、そうなの！」というようなものがありますから、期待してお読みください。

先に、神社の拝殿の前で鳴らす鈴の意味についてお話しました。鈴の形は人間が言葉を発している口を形どったもので、その音は口より出る言葉の言葉である言霊なのであり、それが拝む対象の神様の実体なんだよ、と暗示したものでした。それなら御神前で打つ二拍手は何のためか、それをお話しましょう。

拝殿前の鈴と同様、拍手も「これからお詣りしますから、神様どうかよろしく」と神様の眼を自分の方に向けようとするためのものではありません。言霊のことを表徴した動作なのです。言霊の原理のことを昔は「フトマニ」と呼びました。漢字を当てますと「太占」または「布

斗麻邇」となります。フトマニのフトとは二十の意味であり、マニは言霊のことです。全部で二十の言霊ということになります。二十個の言霊が何故言霊全体の原理という意味になるのでしょうか。

五十音図をご覧ください。横の十行のうち濁点が付けられるのはカサタハの四行です。他の行には濁点は付けることが出来ません。濁点を付けられるカサタハの四行の音は全部で二十あります。この二十個の音が言霊五十音全体を代表する音とみなして、二十個の言霊（マニ）で言霊全体の原理・法則の意味に使っているのです。何故カサタハの四行が言霊全体を代表することになるのでしょうか。

再び五十音図をご覧ください。音図に向って一番右の行は母音で示した「私」の内容です。反対の一番左の行は半母音で示される「あなた」の内容です。この「私」と「あなた」の間に八つの父韻という眼に見えぬ火花が飛び交うと現象が起こることは、今までにお話してきました。この八つの父韻は実は陰陽、夫婦、作用・反作用の関係にある二つ四組の父韻なのです。チイ、キミ、シリ、ヒニの四組です。四組のどれも、濁点が付くものと付かないものの組み合わせになっています。その各々が陰陽、作用と反作用の関係にあるわけです。

五十音図

				○		○	○	○	
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ				ヒ		チ	シ	キ	イ
ウ				フ		ツ	ス	ク	ウ
ヱ				ヘ		テ	セ	ケ	エ
ヲ				ホ		ト	ソ	コ	オ

言霊を勉強する立場からみますと、以上の濁点が付けられる四行、二十音の言霊が理解出来ますと、言霊に関する全部の法則を理解することが出来たことになります。このカサタハの二十音が言霊五十音の全体を代表する音だと昔の人が考えた理由がここにあります。

さて以上のようにお話しますと、もう二拍手の意味はお分かりのことと思います。片手で五本の指、両手で十本、それが二拍手で二十本。この拍手でフトマニの二十を表徴していることになります。二拍手とは言霊の原理全体を表す動作なのです。

古代の日本には言霊の原理はありましたが、哲学用語はありませんでした。言霊を知るということは物事の真実の姿そのものを知ることになりますので、その他の物事の概念的説明の必要がなかったためでしょう。ですから言霊の原理が隠されてしまった時代、その原理を暗示するためには、自然現象や人間の動作などの形として示す方法がとられたものでありましょう。神前の二拍手もその一つなのです。

神社の御神前で二拍手をするということは、祈願する礼拝の対象である神様とは、実は人間の精神の究極の構造である言霊布斗麻邇なのだよ、ということを示そうとして昔の人が後世に遺したメッセージなのであります。また同時にその二拍手とは、神様の実際の姿である五十音言霊の原理と祈願する人の心とのリズムが合致して、願い事が成就するようにとの祈りの方法ともなるのです。

以上、御神前での二拍手の意味をお分かりいただけたでありましょうか。ちなみに、フトマニのマニは日本語であると同時に世界語でもあることをお話しましょう。日本神道で麻邇といいます。仏教では摩尼と呼びます。観世音菩薩が手に持つ円満玲瓏な摩尼宝珠とは言霊のことを表徴したものです。キリスト教旧約聖書にはマナ manna とあります。「マナは神の口より出ずる言葉なり」と記されています。ヒンズーでは「マヌ」と呼ばれます。ヒンズー教の最高法典をマヌの法典といいます。

二拍手の意味の説明について、もう一つ付け加えておきたいことがあります。八つの父韻である意志のバイブレーションが陰陽二つ一組で、全部で四組（チイ、キミ、シリ、ヒニ）であると申しました。この八父韻について『古事記』では最初の章「天地のはじめ」に出てきます。その神様の名前を見ますと、一組が陰陽、作用・反作用の働きであることが明示されているのに気付きます。ご参考のためにお話しておきます。

……次に成りませる神の名は、宇比地邇（うひぢに）の神（言霊チ）、次に妹須比智邇（いもすひぢに）の神（言霊イ）、次に角杙（つのぐひ）の神（キ）、次に妹活杙（いもいくぐひ）の神（ミ）、次に意富斗能地（おおとのぢ）の神（シ）、次に妹大斗乃弁（いもおおとのべ）の神（リ）、次に於母陀琉（おもだる）の神（ヒ）、次に妹阿夜訶志古泥（いもあやかしこね）の神（ニ）。

以上が言霊の創造意志である八つの父韻にあたる『古事記』の神名です。作用・反作用の反作用に当たる四つの神名に皆「妹（いも）」の字が頭に付いているのがお分かりだと思います。二つ一

組は陰陽、夫婦の関係にあることをはっきりと示しているのです。それぞれの神名がどうして八つの父韻を指し示していることになるのかは、人間の心の中の動きを説明しなければなりません。煩雑になるのを省くためにも。今は触れないこととといたします。

鏡餅

日本には、正月に床の間に上下二段のお供え餅を飾ってお祝いする風習があります。これを鏡餅と呼んでいます。神社では正月に限らず御神前に鏡餅をお供えしてあるところもあるようです。神社では鏡餅の他に酒・米・塩・魚・菜っ葉……等々を御神前にお供えします。鏡餅をはじめ、これらのお供えものをするのは何のためなのでしょうか。

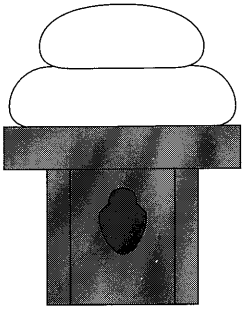
まず常識で考えますと、人間の日々の労働の結果授かった日常の糧を神様に捧げて、生きることの喜びに対する感謝の意を表すのだということになりましょう。「神様はお供え物をいつ、どうやって食べるの」と子供が母親に尋ねます。母親の答えは「神様は人の真心と食物の香りを召し上がるんだよ」でした。昔の話ですが、この答えを聞いて「うまいことをいうものだ」と感心したことを覚えています。

この常識的な考えはまことにもっともなことですが、ただそればかりでは理解することが出来ない点もあります。人は餅を食べます。その感謝としてお餅を神様に供えることは理解できますが、丸い形の二段の鏡餅としてお供えするのは何故なのか、と疑問を持つことも出来るわ

けです。本章の冒頭でお話しましたように、人が神様に対する態度には「斎(いつ)く」と「拝(おろが)む」の二種類があります。感謝の心を込めて色々な食物を神様にお供えするという考えは、「拝む」人間の態度から出た答えであることは確かです。神様を拝み、そのご利益に対する感謝のお供え物というわけです。

しかしそれだけでは説明のつかないものについては、人間の真の本質は神であるという「斎く」立場から、言い換えますと、言霊の立場から解釈しなければならなくなります。「斎く」ことが常識であった太古の時代が、後世に遺した教訓と伝統が役に立ちます。

鏡餅は上下二段に丸い餅が重ねられています。上の段は、人間の心を構成している五十個の言霊を表しています。そして下の段は、その五十個の言霊を操作運用する五十の方法を示しているのです。五十個の言霊を順序正しく五十の操作をしますと、その結果として人間の社会的行為の基準となる三つの精神構造が出来上ります。『古事記』はこれら三つの構造を「三貴子(みはしらのうずみこ)」と呼んでいます。神様の名前でいいますと天照大神、月読命、須佐男命です。それぞれ政治・道徳、宗教・芸術、科学・産業という三つの活動の行動の基準となる精神構造を表しています。


鏡餅

基準となる構造を鏡と呼びます。餅は「百道(もち)」の意味を示しま

す。言霊の数五十個、その運用法五十。計百の原理、道です。百の原理で作られた鏡の意味で鏡餅を御神前に飾ります。社殿の奥にいる神様とは、実はこの鏡餅で示される百の道なんだよ、と参拝者に教えているというわけです。

鏡餅の言霊の学問上の意味についてお話したついでに、御神前にお供えする品物についてその言霊学上の意味を取り上げておきましょう。お供物の主なものとしては、酒・米・魚・菜・塩等があります。順に説明しましょう。

酒は「さか」で性質を意味します。物事のすべての性質は、言霊の段階で捉える時、初めて真の姿が現れるぞ、という教えです。米は「いね」で「い」とは五つの母音のうち創造意志を表す母音です。その意志の音といえば言霊のこととなります。魚は昔「ナ」と呼ばれました。今でも岩魚（いわな）と呼ばれる魚があります。言霊によって作られた物の名、それは物事の真実の姿です。それはまた神様そのものでもありましょう。菜も同様「名」の表示です。では、塩は何の意味を表しているのでしょうか。

塩は食物に味を付ける最も一般的な調味料です。塩気のない料理は考えられません。と同時に人生に味付けをするもの、それは生命意志の法則である八つの父韻です。八父韻が四つの母音宇宙に働きかけて初めて現象を生み出します。父韻の働きかけを「潮時」として母音から現象が生まれます。八つの父韻は陰陽二つが組となった四組のバイブレーションであることを先

にお話しました。また海の潮が干満のあることから、潮をもって八父韻を表すことがあります。「潮の八百路」とか「潮の八百会」の言葉が大祓祝詞にみえますし、仏教の法華経では八父韻を表徴して「海潮音」と呼びます。

以上のことから御神前に供える塩は八つの父韻言霊を呪示したものなのです。聖書の「汝は地の塩なり」とは有名な言葉です。人は社会の中にあって、その社会の発展と調和に役立つことがこの世に生まれてきた使命なのだ、と教えているのです。

以上、簡単に日本神道で御神前にお供えするいくつかの物の言霊学上の意味についてお話いたしました。現代人と太古の人との心の相違についてご参考になれば幸いです。さらに鏡餅に添える品物（橙（だいだい）・海老・裏白）についても説明を加えると、次のようになります。

橙は世々代々の意で問題はありません。海老は慧（え）の霊（ひ）の意味です。慧とは仏教で般若と呼ぶもので実践智（言霊エ）を表します。鏡餅の下に敷く裏白には面白い意味が秘められています。白は昔「申す」と読み、言葉のことを指しています。それはまた言葉の法則である言霊の原理に通じます。鏡餅の下に裏白を敷いて、この二千年間は鏡餅の実の姿である言霊の原理は世の中の「裏」に隠れてしまっているのだよ、と教えているのです。含蓄のある比喩ではありませんか。

さらについでに申し上げますと、日本の言霊の原理が仏教や儒教にも影響して、言霊の学問

を知らないとなかなか解釈し難い言葉を遺しています。仏教で「言辞の相」という言葉があり、儒教に「白法」という文字を見ることが出来ます。皆、日本の言霊の原理を指した言葉であります。

春の七草

せり・なづな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろといえば、春の七草です。昔、その年の邪気を払い万病を除くとして、一月七日に吸い物として、後には粥の中に入れて食べる習慣がありました。実はこの行事も、今より二千年前、故あって世の人の意識の底に隠されてしまった言霊の原理を後世に黙示として伝えるために広められた習慣なのです。

すずな（蕪の古名）は、鈴の形に似る人間の口から発音される言葉の名である言霊を指します。すずしろ（大根の古名）は、言葉が耕される代（畑）の意味で五十音言霊図のことです。なづな（ペンペン草）は名の綱で、五十音図は名（言霊）が綱のごとく縦横に連なっていることを教えています。ごぎょう（よもぎ）は、五行で中国の儒教の木火土金水、言霊学のアイウエオ五母音のことで、人間の精神宇宙の五つの次元・界層を表す言葉です。せり（芹）は、選るを示し、人間の選択・実践の英知の働きを示しています。はこべら（はこべ）は、運ぶ、運用・活用の意を表します。言霊五十音の精神要素を選り、運用していった結果、最後にほとけのざ（かすみぐさ）である人間精神の最高道徳の鏡（八咫鏡）の実態である五十音図（天津

太祝詞音図（ふとのりと）が完成します。春の七草の行事は、この言霊学の霊妙な働きを謎の形で後世に伝えようとしています。

七草粥で新しい年を祝い、精神の七草である言霊学の原理でもって世界三千年の邪気を祓って「梅で開いて松でおさめる」（大本教お筆先）新しい人類の世紀を創造することが、日本語で生きる日本人の使命ということが出来ましょう。

ちはやふる――枕言葉、千早振る。辞書に「いちはやぶる、の意で勢いの鋭いの意とある。神にかかる。続柄まだ不明」とあります。言霊の学では、道が早く振るの意。「道」とは道理または言霊のこと。「振る」は活用すること。言霊の原理の早い活用が可能であったの意で、神代といわれる時代は言霊の原理が生きていたので、千早振るは神または神代にかかる枕言葉となりました。

第六章　皇室と言霊

日本の皇室には、昔から色々な伝統の行事やその行事に使われる器物などが伝承されています。しかし、国民にはそれらの内容や意義はほとんど知らされてはいません。実はそれらの行事を司る宮内庁の祭官の方々も、その意義を知らないことが多いのだそうです。天皇即位の式典である大嘗祭につきましても「その祭典の形式の意義が全く分からなくなってしまった」と室町時代のある公卿の日記に書かれていると聞きました。

言霊学の理解が進みますと、それらの皇室の行事や器物の内容と意義が手に取るように分かってきます。今回はその中から周知の二点についてお話します。

三種の神器

昭和から平成に変わり、日本の皇室は以前よりは国民に近い存在と感じられるようになりました。それでも天皇の即位式とか大嘗祭、皇太子の立太子式などの皇室の儀式をテレビで見ますと、国民生活の中では見慣れない形式や道具類が多いようです。これらの儀式が遠い昔からの皇室の伝統に従って行われていることはお分かりのことでしょうが、その一つ一つの意味内容については、一般の国民はもちろん、その筋の専門家や国学者の方々にも理解されていない点が多いように見受けられます。

前にもお話しましたように、今から二千年ほど前、道徳と政治（実践智）の法則である言霊の原理を世の中の表面から隠してしまった時、その原理が永久に忘れられてしまうことを心配して、色々な建造物や宮中の儀式の形式に表徴として遺す政策がとられたのでした。天皇の即位式、大嘗祭、立太子式などの形式もその方針によって作られたものであります。

ですから、二千年前と同じ姿で、今、完全に復活した言霊の原理の立場から、これら宮中の伝統儀式を見ますと、その形式が意味する内容は手に取るように明らかに理解することが出来

るのです。今から、比較的説明の簡単なものを取り上げてみましょう。

先年平成天皇の即位式が行われました時、三種の神器という言葉をテレビで耳にました。実は、三種の神器とは、先の第二次世界大戦時までは天皇のいらっしゃる所には必ずお側に置かれることに定められた、天皇の位の証の宝物でありました。その三つとは剣・曲玉・鏡であります。

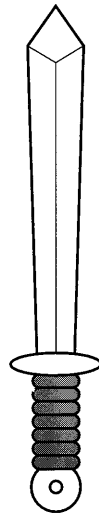
三つの宝物を固有名詞で呼びますと、「草薙剣（くさなぎのつるぎ）」「八坂曲玉（やさかのまがたま）」「八咫鏡（やたのかがみ）」です。それぞれの固有の名の由来については今は省略しまして、何故天皇の位を示すものとして三種の神器があるのかに的を絞ってお話しましょう。

中国の古書に「形而上を道といい、形而下を器という」という文章があります。「精神的な法則を道と呼び、それを表徴して作られた物体を器というのだ」という意味です。その意味で、三種の神器という器物は人間の精神的な原理・法則を表したものということが出来ます。まず剣から始めることにしましょう。

剣（つるぎ）

古代の日本の刀は両刃でした（次ページ図参照）。それを太刀（たち）または剣といいます。剣は精神の何を表しているのでしょうか。

剣



剣によって表されるのは、人間が生まれた時から授かっている判断力のことなのです。物事を理解しようとする場合、言い換えますと物事を分かろうとする場合、そのものを分析すなわち分けなければなりません。分析すなわち分けなければ永久に分かりません。分けるから分かるのです。日本語はよく出来ているではありませんか。この分析する・分ける働きを表徴する器物を太刀と呼びます。太刀は「断ち」に通じます。

物事を分析すると、そのものの細部については、はっきりしてきます。例えば映画について考えてみましょう。まずその映画の物語の筋はうまく出来ていたか。役者の演技は上手だったか。色彩は良かったか。音響効果はどうか等々が分析されます。しかしそれだけで映画を理解したことにはなりません。細部の部分部分が理解されたならば、今度は再び部分部分を総合して元の姿に返して初めて全体としてそのものが理解されたことになります。この映画は全体として良い作品か、否かの判断が出来ます。この総合する働きを「剣（つるぎ・連気）」と呼ぶわけです。現在でも一緒に何かすることを「つるむ」といいます。

右に説明したように、分析（太刀）と総合（剣）の両方の働きを表して古代の剣は図で見るように両刃でありました。これに対して物事を断ち切るだけの働きの剣は刀（片名）と呼ばれました。

剣でもって人間の天与の判断力を表現したのは日本ばかりではありません。世界の宗教書には多くみることが出来ます。新約聖書の中に「われ地に平和を投ぜんために来れり」というイエス・キリストの言葉があります。平和にあらず、反って剣を投ぜんために来れり」「私はただ世の中を平和にするために来たのではない。人々に正しい判断力とは何かを知ってもらうために来たのです」という意味であります。

仏教の禅宗には「両頭を截断すれば、一剣天に倚って寒し」などという格好のいい言葉があります。「あれか、これか、ああしたらよいか、こうしたらよいか、という経験知の迷いをすっぱりと捨て切ってしまうと、物事の正邪善悪を即座に決定することが出来る人間天与の判断力が精神宇宙を貫いて立っているのを自ら感じることが出来るのだ」という意味でありましょう。

このように、剣とは人間の判断力のことを表しています。そして古代の日本人はその判断力の精神構造まではっきりと自覚していたのです。それが先に「心の先天構造」の項で説明した天津磐境（あまついはさか）と呼ばれる言霊十七個で構成された、人間誰しもが与えられている頭脳の思考構造です。ウ―アワ―オエヱヲ―ヒチシキミリイニ―イヰの十七個の言霊の構造のことです。

以上、三種の神器のうちの剣の意味についてお話してきました。三種の神器の草薙剣などというと、何か神話のおとぎ話のようで、現代人にとっては遠い世の中のことぐらいにしか思わ

れないでしょうが、しかしそういう器物で表されたものが実は読者自身の生まれながらに持っている判断力の構造を表徴したものなのだと知ったなら、それは身近なものとなってくるのではないでしょうか。

人が判断するとはどういうことなのか、と三種の神器の剣は現代人に無言の問いかけをしているのです。単なる宮中の儀式の道具なのではありません。大昔の霊知り天皇は、この天与の判断力を見事に行使出来る人だったのです。

曲　玉

三種の神器の第二は「八坂曲玉（やさかのまがたま）」です。曲玉とは丸い玉でなく、玉に尾が生えたように巴形になったものをいいます（図参照）。八坂曲玉は玉の真中に穴を開け、幾つもの玉を集めて紐を通して数珠（ロザリオ）にしたものです。曲玉とは、またそれを数珠にしたことは、何を表徴しているのでしょうか。

曲　玉

一瞬一瞬千差万別に移り変わる人間の複雑な心の現象を、草薙剣と表徴される人間の判断力で切り、分析していきますと、最終的には人間の心というものは五十個の要素から成り立っていることが分かってきました。そのそれぞれに、アイウエオ五十音の単音を当てはめて言霊と呼び

ました。それをまた麻邇（まに）とも呼びます。五十個の要素のうち、現象としては決して現れることのない心の先天構造の要素が十七個、現象として現れた最小の後天の要素が三十三個であり、合計で五十個というわけです。人の心をいくら分析しても、この五十個より多くも少なくもなり得ません。

この五十個の言霊は口から発音される音（言葉）の最小単位であると同時に、心の内容の要素の単位でもありますから、この世の一切のものの単位ということが出来ます。日本語でこれを麻邇と呼びますが、この名は世界共通語であり、キリスト教でマナ、仏教では摩尼、ヒンズー教ではマヌと呼んでいます。

八坂曲玉は言霊を表す五十個の玉の真中に穴を開け、紐を通して数珠（ロザリオ）としました。心を剣で分けていくと、結局五十個の麻邇を得ることになり、心の宇宙とはこの五十個の麻邇ですべてなのだということを表しているのです。八坂という名が冠されているのは、現象として表れた三十三個の言霊がすべて八つの性質（八つの父韻）に裏付けられていることを表現しているのです。八坂の坂は性質である性（さが）を示した言葉です。

また単に玉と言わないで巴形の曲玉としたのは、現象というものは一瞬も一定の状態に留まることがなく、次から次へと変化するものであることを表現しようとしたからです。○丸では回っても動くように見えません。そのために◎曲玉を用いたのでした。巴形の図形は玉が動

き、ころがる姿を表しています。

以上、三種の神器の第二の曲玉が示す人間の精神上の意味について説明してきましたが、この人間の心の究極の要素に因んで日本の皇室の立太子の儀式についてお話しましょう。

立太子式の一つの行事として壷切（つぼきり）の儀というのがあります。皇太子として立つ人は、立太子式に際して天皇から「壷切りの太刀」を授かります。壷切りとは壷を切ることではなく、壷の封印を切って中に入っているものを見ることです。壷の中には何が入っているのでしょうか。

壷の中には、アイウエオ五十音を一音ずつ粘土板に刻んで焼いた素焼きの板が入っています。その五十枚の素焼き板を見る、それが皇太子として立つ徴（しるし）となることを意味するのです。

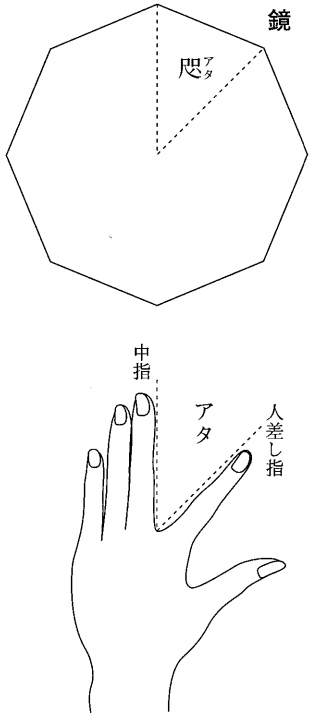
古代の天皇（スメラミコトといいました）は人間の精神の構造を明らかにした言霊の原理を知った人でありました。霊知り（聖）です。人間の心のすべてを言霊の原理によって把握して、その上で政治を行っていたのです。古代の精神文明の時代がそうでした。それが今から約二千年前、第十代崇神天皇の時、言霊の原理は世の中の表面から隠されてしまい、それ以後の世の中は言霊の自覚のない天皇の時代となったのです。言霊の原理は政治との縁を全く切られてしまったのでした。

しかし時が来たならば、天皇となる人は古代にそうであったように、ご自身が霊知りのスメラミコトに返り、言霊の原理を自覚して道徳の政治を行うようにとの教えを遺すために、立太

子の儀式の形式として壷切の儀を定めたのです。皇太子として立つ人は壷の中を見て、そこにあるアイウエオ五十音言霊の学を勉強し、天皇となる時の準備をすべしという黙示なのであります。

鏡

三種の神器の第三番目は「八咫鏡（やたのかがみ）」であります。鏡というのは姿や顔を映して見る道具です。精神的な内容として考えますと、心の善悪・正邪・美醜や物事の正誤・当否等々をたちどころに判定する基準になるものを意味しています。八咫鏡の咫はアタといって、太古の尺度の名前です。アタとは人間の人差し指と中指を開いた広さだそうです（図参照）。この咫を八つ集めた大きさの八辺形の鏡という意味です。



三種の神器の第一である剣には、精神的にいうと二つの働き（双刃）があることをお話しまし

た。その一つは分析（太刀）であり、もう一つは総合（連気）であります。人間の心をとことん断ち切って分析していき、もうこれ以上切ることが出来ない所まできた時、究極の要素として五十個の言霊を手にしました。一つ一つの要素の内容とその名前をはっきりと把握することが出来ました。そのそれぞれを表したのが、三種の神器の第二の八坂曲玉でありました。

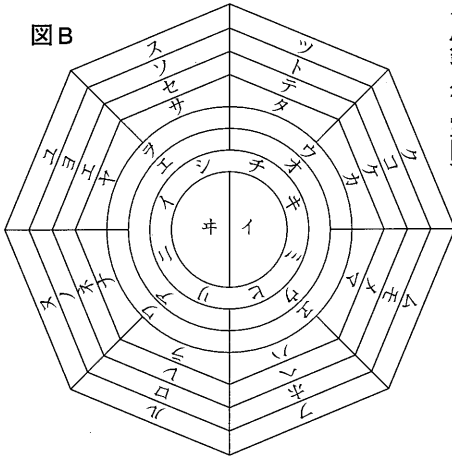
次に分析して得た五十個の言霊を剣（連気）の力で総合していくことになります。この総合の過程の操作にもちょうど五十の手段があって、ついに人間精神として理想の組織を持った構造図が完成することになります。この五十音の言霊で組織された人間精神の実践智の構造を昔の人は「天津太祝詞（音図）」と呼びました（図A参照）。

さらにこの構造を創造意志の働きである八つの父韻を中心に並べ変えて八角形の構造に収め

図A

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ									イ
ヱ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

図B



天津太祝詞（音図）　八咫鏡（言霊図）

たもの（その過程は煩雑を避けて省略します）、それが八咫鏡と呼ばれるものです（図B参照）。

人間の心を隅から隅まで分析して、その要素の性質内容をすべて明らかにした上で、その五十個の要素を理想の構造に組み立てた人間の行動の基準なのですから、この鏡に照らし合わせれば、人間がやること、これからやろうとしていることが適当かどうか、すぐに分かってしまいます。これは当然のことといえましょう。

以上、日本皇室の宝物とされています三種の神器――剣・曲玉・鏡――についてお話しました。それは天与の判断力、心の要素の全部、人間の心の鏡の構造という人間にとって最も大切なものを器物として表徴しているものであります。単にそれは皇室の宝というだけでなく、人間が人間としての種を続ける限り、人間精神の宝であることをお分かりいただけたのではないでしょうか。

三種の神器が人間の心の基本法則を暗示していることを知って、その眼で世界の宗教書をみますと、キリスト教の聖書や仏教のお経の中に同様の三種の宝のことが書いてあるのに気付きます。そのことに簡単に触れておきましょう。

例えば旧約聖書の中にユダヤの「三種の神宝」としてアロンの杖・黄金のマナ壷・モーゼの十戒石があったと伝えられています。この三種の神宝を木の箱に入れ、箱に棒をつけて人が担

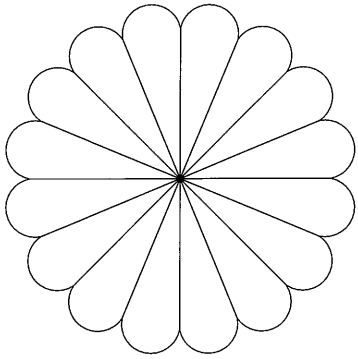
ぎ、民族の先頭に立ってヨルダン川を渡ったという故事が書かれています（このことが日本に伝わり、神社のお神輿を担ぐことの先例となったのだという話もあります）。三種の神器と神宝とを比べてみますと、草薙剣がアロンの杖に、曲玉が黄金のマナ壷に、鏡がモーゼの十戒石に相当することになります。

仏教では観普賢菩薩行法経というお経の中に「象の頭の上に三化人あり、一は金輪を把り、一は摩尼珠を持ち、一は金剛杵を把れり」と書かれています。金輪が鏡に、摩尼珠が曲玉に、金剛杵が剣に当たりましょう。その他仏説に閻魔大王の浄玻璃の鏡が説かれています。この鏡は亡者の生前の善悪の業が立ちどころに映し出されるといわれます。これで三種の神器の精神的な意味についての説明を終えようと思いますが、実際の三種の神器は第十代崇神天皇の時、宮中より移され、諸処を廻り、最終的に現在の伊勢の皇太神宮に祭られました。その経過は『日本書紀』に詳しく書かれています。その後、神器のうちの草薙剣は第十二代景行天皇の時、日本武尊の東征に関係して現在の名古屋の熱田神宮に祭られ、今日に至っています。宮中にある三種の神器はイミテーションということになります。

なお、神器をお祭りしてあります伊勢神宮の数々の神秘については、項を改めてお伝えすることといたします。

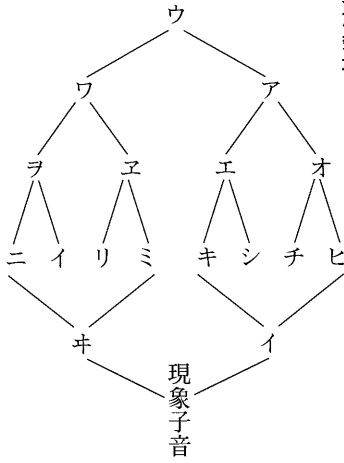
菊の御紋章

天皇家は代々十六弁の菊花の紋章を用いています（図参照）。三種の神器に次いでこの菊の紋章の言霊学的由来をお話することにしましょう。



十六弁菊花

天皇のことを昔はスメラミコトといいました。スメラは「統べる、統一する」の意です。ミコトとは言葉の意味。スメラミコトで国中の、世界中の言葉を聞こし召して、それを統一していく人の意味となります。霊知り（聖）であった天皇はそれが可能でありました。菊の紋章の菊は「聞く」の表徴であります。聞く、とは何を聞くのかという意味で十六弁の菊花は天皇を中心とした十六方位の地方・国々を表しているという説があります。この説も一つの説明ではあります。けれど、それなら何故天皇にはそれが可能であるか、という天皇としての資格が明らかになりません。古代の天皇は国家権力や武力によって国を治めていたのではなく、徳の高さ、能力の大



きさによって政治を敷く責任者であったのです。

人間は他から入って来る言葉の音声を耳で聞きます。そして耳で聞いた音声を頭脳に還元してその真実の内容が探られます。

人はおかしい時に笑い、悲しい時には泣きます。けれどおかしい時に泣き、悲しい時に笑うことだってあります。他から来る音声の真相は果たしてどうなのか、を頭脳で判断します。その頭脳の働きといわれるのが、心の先天の部分ということが出来ます。言霊学で天津磐境（あまついはさか）と呼ぶ十七個の言霊から成立っている機能のことです（図参照）。

耳から入った音声は頭脳に還元され、人間の思考の先天構造の中で洗練され、濾過されて「ああ、言葉の真相はこうだったのだな」と了解されます。この場合、頭脳の先天を形成している十七個の言霊をしっかり自分の心の中で把握し、自覚している人（霊知り）であるならば、どんなに心理的に複雑な言葉であっても、その真実の姿を聞き取ることが出来るでありましょう。それがスメラミコトの位を嗣ぐ資格であり、条件であったのです。

さてこの人間の思考頭脳の先天の構造を形づくっている十七個の言霊のうち、十六番目の言

霊イと十七番目の言霊ヰを一体化した働き、すなわち創造意志の主体と客体とを一体化して、宇宙でただ一つの創造の原動力とみなした力、これを宗教的には創造主、または創造主神と呼ぶのです。この創造主という立場からみますと、人間の思考の先天構造は全部で十六個の要素から成り立っているということが出来ます。

国家や世界の一切の言葉を聞こし召す（菊）スメラミコトの能力は、言霊十六個から成り立っています。これが天皇のご紋章に十六弁の菊の花が用いられる理由なのです。

以上、天皇のご紋章として用いられる十六弁の菊花の言霊学上の意味についてお話してきました。これに因んだ話を一つ付け加えておきましょう。天皇の菊花紋章ほどには知られておりませんが、皇后様の徴（しるし）として桐の葉と花を形どったご紋章のあるのをご存じでしょうか。天皇の菊花が「聞く」の暗示であるのに対し、皇后の桐は「切る」、前にお話しました「太刀」である人間天与の判断力のことを表徴しているのです。

宮中において行われる各種の行事やそのお道具で、古代の言霊の原理を形式として後世に遺すために制定されたものは右の他にまだ数多くあります。この本ではあまり深く立ち入ることを避け、ほんのさわりをご紹介させていただくに留め、次の章では伊勢神宮についての神秘の謎解きに入りたいと思います。

心（こころ）――語源は「ころころ」である。心は常にコロコロと流転して留まることがない。留まることがないことに観念して、そこに安住することを勧めるのが「南無阿弥陀仏」の念仏だといわれる。

第七章

伊勢神宮と言霊

伊勢神宮は今から二千年ほど前、崇神天皇の御代に創建されました。御祭神は内宮は天照大神です。どんな経緯があって建てられたのかは、千二百年前に書かれた『日本書紀』に詳しく載っています。しかし、ことさらに書かれなかったことも多くあります。

伊勢神宮と言霊との関係です。これよりその関係について数項目にわたって説明しましょう。私たち日本人の先祖の素晴らしい合理的精神に驚かれることと思います。

伊勢神宮

伊勢神宮は、かつては「お伊勢詣り」といって国民信仰の神宮でありました。現在でも伊勢神宮には絶え間なく観光客が訪れています。千古変わることなく清らかな流れの五十鈴川を渡り、内宮の参道を進んだ参拝者が神宮正殿の「唯一神明造り（ゆいいつしんめいづく）」と呼ばれる社殿を仰ぎ見る時、ブルーノ・タウトが「世界で最も美しい建造物の一つ」と称賛しましたその姿と雰囲気に「身も心も洗われた気持になる」とは大勢の人から聞く話です。

「何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」とは伊勢神宮を詠んだ西行法師の歌であります。けれど、「何事のおわしますかは知らねども」の時代は過ぎ去ったのです。言霊の原理が世の中に蘇ってきました今では、この原理に照らして、伊勢神宮に秘められ暗示されている数々の神秘の扉を大きく開くことが出来るようになりました。

この項では神宮の神秘の扉を開けて、その内容に入っていくことにしましょう。沢山ある神秘の暗示の中から主だったものを、謎のベールを取り払って新しい時代の光を当てることにします。先ず伊勢神宮の概略を書くことにしましょう。

伊勢神宮、通称お伊勢さん。内宮と外宮があります。所在地を書きますと、内宮は三重県伊勢市宇治、外宮は伊勢市山田。御祭神は内宮が天照大神、外宮は豊受姫神であり、内・外宮併せて伊勢神宮と申します。

神宮はいつから始まったのでしょうか。内宮は崇神天皇（約二千年前）の創祀であり、外宮は雄略天皇（約千五百年前）の時に祭られました。現在見られるような建築様式となったのは欽明天皇の頃（千四百年前）と推定されています。

また神宮は二十年ごとに建て替えられ、遷宮が行われることになっています。この二十年ごとの式年遷宮の制度が定められたのは天武天皇の時代（約千三百年前）でありました。

さあこれから伊勢神宮の神秘の謎解きに入ることにしましょう。

唯一神明造り

伊勢神宮の内宮と外宮の社殿の建て方（建築様式）を唯一神明造（ゆいいつしんめいづく）りと呼びます。その意味は全く文字通り「天照大神という神様の真実の姿を明らかに示すただ一つの建築の形式」ということであります。そのような建築の様式が何故工夫されるようになったのでしょうか。

それは先に何度かお話しましたように、人類最初の文明である精神文明についで第二の物質文明の進歩を促進させるための一時的な方便として、精神文明の基礎となっていた言霊の原理

を実際の政治に適用することを中止し、次第に人々の脳裏から忘れ去られるようにし、さらに時が来た時、再びその原理が人々の記憶の底から浮び上ってくるよう、言霊の原理の内容を神宮の社殿の建築の様式で形どるように設計し、建造したのです。

言い換えると、将来、物質文明が計画通り完成されようとする時、人々が昔言霊の原理があったのだということに気が付いて、その眼で伊勢神宮の正殿を見るならば、天照大神と尊ばれている神様の真実の精神内容とは、こういう内容であったのだと後世の人々が理解することが出来るよう、神宮の構造を工夫して造ったのです。

人間の心とはどういうものなのか、ということをすべて知り尽くしていた日本人の祖先が、人間の心の言霊による構造をそっくりそのまま形式として表した建物が伊勢神宮なのです。このような建築様式を唯一神明造りといいます。

それではアイウエオ五十音の言霊の原理がどの様に伊勢神宮の正殿の構造によって表されているかを調べていくことにしましょう。

心の御柱

さてこれから伊勢神宮正殿の建築様式についてお話することになるのですが、ご存じの方も多いことでしょうが、神宮の正殿の建物には一般の人は手を触れることが許されていません。

また正殿は周りの垣や樹々に囲まれていて、近くに寄って見ることも出来ません。伊勢神宮は神秘のベールに包まれています。

特に今からお話しようとしている「心の御柱」は神宮の建造物の中でも秘中の秘とされているものなのです。ですからその説明は、遺されている文献に頼るよりほか方法がありません。そこで一冊の文献からの引用をお許しいただくことにしましょう。その本は『謎を秘めた伊勢神宮の建築』（伊藤ていじ氏著、旭屋出版刊）であります。

「外宮も内宮も二十年ごとに建て替えられることになっている。……遷宮の儀式が終わると正殿を始め東西の宝殿、四重の御垣とそこに開かれた各種の御門など、古い建物の一切は取り払われ、その殿地は単なる石敷きの原に変わり果てる。……すべては自然物に還元されたかのように見える。しかし実際にはそうではない。その殿地を見渡すと、もとあった正殿の位置に小さな覆屋が残されているのを知る。……それにしてもあれは何なのだろうか。そこそが心の御柱といわれる神聖な柱が埋納されている場所なのである。もちろんそれを見た人は稀であるし……正確な実体については不明というほかはないが、伝えられているところによれば次のようなものである。

第一にこれは、檜の柱だということである。現在のものは内宮で長さ六尺（一八二センチ）、

太さ九寸（二十七センチ）といわれる。……尤もこの柱の長さと太さとは時代によって変遷があったらしく、弘安二年（一二七九）の『内宮仮遷記』によると外宮のものは約五尺（一五〇センチ）となっている。大きさについては外宮のものが経四寸（十二センチ）としている。

第二は、内宮の場合にはこの柱はすべて地中に埋納されているのに対し、外宮のものは半分以上が地上に突き出ていることである。前にあげた鎌倉時代の史料によると、外宮の心の御柱五尺のうち三尺が地上に出て、二尺が地中に入っていることになっている。また元来は内宮のものも外宮のものと同様に地上に出ていたらしく、前記の史料によると地上に三尺三寸（一メートル）くらい出て地中には二尺（六〇センチ）くらいが埋まっていた。……」

以上が伊勢神宮の内・外宮の正殿の床下に置かれた「心の御柱」についての他本からの引用です。この心の御柱がどんな意味を持っているものなのか、色々な学説があるようですが、はっきりとした定説はありません。

一説によりますと、昔、榊の木の枝に鏡を懸け、天照大神の神霊の降下を祈願した風習が、いつしか鏡と榊が別々になり、榊の代りに心の御柱が立てられたのだ、といわれます。その証拠には心の御柱は床下の地中に埋められており、御神体である鏡はその真上の正殿の床上に置かれているというのです。

またある説では、心の御柱とは男の性器を形どったのだと主張しています。昔男女の性交を神聖化した風習が信仰の対象にまで転化され、心の御柱となったというのです。それに対する反論もあります。内宮の天照大神も外宮の豊受姫神も女性であり、男の性器説は根拠がないというわけです。

このほかにも色々な説がありますが、これといった決め手に欠けていて、心の御柱の意義については定説がないというのが実情なのです。日本の神道信仰の最高の神宮である伊勢の内・外宮の、そのまた最高の神聖とされる「心の御柱」の意味が分からないというのはどういうことなのでしょうか。否、分からないのではありません。日本語の起源であり、人間精神の原理である言霊の学問の立場からみるならば、心の御柱の意味は明快に謎解きされるのです。その意味を理解することが出来た時は、私たち日本人の祖先の素晴らしい知恵と、長い歴史に対する鋭い洞察を知って驚嘆せざるを得ないことでしょう。

さて、心の御柱の言霊学による説明を始めましょう。

目を開いて一人の人間と対面していると想像してください。相手について、この人は背が高い、色白だ、丸顔だと感じます。これは五官感覚による観察です。次にその人と話をしてみたら、物知りで学問に優れた人だと知りました。これは知性的観察です。次にこの人は芸術的趣味がある、愛情があると感じます。これは感情的観察です。次にこの人は道徳的に立派で、機

転がきき、決断も早いと知りました。これは実践理性的観察です。

今度は眼を閉じてご自分の心を考えてください。眼を閉じると同時に相手の姿は消えてしまいます。あるのは自分の心だけとなります。すると自分自身の心の色々な働きが出てくる広い心の広がり、宇宙があることに気付くでしょう。精神宇宙の存在です。この心の宇宙をよくよく考えてみますと、今まで何回かお話してきたことなのですが、心の宇宙は五つの段階から成り立っていることが分かってきます。

まず第一に背が高い、色白だ、という五官感覚の判断が出てくる宇宙です。またこの宇宙から背が高くありたい、色白になりたいという欲望も出てきます。この五官感覚が出てくる元の宇宙に、言霊学は五十音のうちの母音のウを当てて名を付けました。言霊ウであります。

次の学問的知性の宇宙は言霊オ、第三番目の感情現象の宇宙は言霊ア、次の実践智である理性の宇宙を言霊エと名付けました。

そして最後の五番目の宇宙を言霊イと呼びます。この宇宙は普通漫然と暮している時は気が付くことのない宇宙なのですが、それでいて他のウオアエの四つの宇宙の現象を生み出す原動力となり、またそれら四つの宇宙をコントロールしている根本的な創造意志の宇宙なのです。

以上お話しましたように、人間の心は言霊ウオアエイの重なった宇宙を住み家としています。そして人間がこの世に生まれてきた時、大自然から授かっている生まれたままの心の構造はど

うなっているかを考えてみますと、その構造は五つの母音で表される宇宙の段階が上からアオウエイの順序で並ぶことになります。この心の住み家である精神の主体の構造を、古神道言霊学は天の御柱（みはしら）と呼びます。目に見えるわけでもなく、普通そんな自覚もありませんが、この天の御柱が人間の心の中に真直にすっくと立っているのです。人間はこの天与の天の御柱でもって人生のすべての問題を判断して生きていくのです。

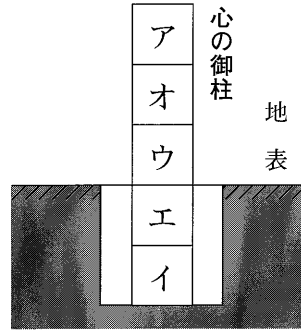
（この人間の生れたままの天与の心の構造を、言霊五十音で表したものを天津菅麻（すがそ）音図と呼びます。心のすがすがしい衣という意味です。『古事記』の神話の神様の名前でいいますと、伊耶那岐神様の音図ということになります。その他、人間の心の持ち方によって色々な五十音図が考えられます。）

こうした心の現象を生み出す元の宇宙、心の住み家の宇宙を器物として形として表徴したのが伊勢神宮の内・外宮の正殿の床下に祭られてある「心の御柱」なのです。

先の項で、言霊イというのはこの世界すべてのものの創造主だ、というお話をしました。創造主はこの心の御柱を上ったり、下ったりしながら他の四つの母音の人間性能を働かせ、それらをコントロールして、小にしては人間個人の生活を推進させ、大にしては国家・人類世界の歴史を理性をもって創造していきます。心の御柱は人間の、そして人類の心の住み家を表しています。

心の御柱の意味を以上のように理解した上で、神宮正殿の床下の心の御柱の祭られ方をみますと、驚くべき真実に突き当たることとなります。

現在、外宮の心の御柱は、その長さ五尺のうち二尺が地表より下に埋まり、残りの三尺が地表から上に出ているということです（図参照）。また鎌倉時代の記録によれば、内宮の心の御柱も同様であったと伝えられています。



このような神宮の正殿の構造、特に内宮の心の御柱の変化が何故起こったのでしょうか。それは神宮を創建した当時は、はっきり人々によって意識されていた心の御柱の意義が、時代の経過とともに忘れ去られ、御遷宮の際にその時々の人の考え方が入り込んだためでありましょう。しかし幸い、神宮の構造様式の大部分はまだ昔のままに継承され保存されています。

さて話の本筋に戻りましょう。心の御柱が長さ五尺ということは、それがアオウエイの五母音の言霊を表徴しているということにほかなりません。そして心の御柱の下二尺が地表より下に埋もれているのは、五つの母音のうちの下の二音であるエとイが人間の意識の表面から埋没し、忘れ去られてしまっていることをはっきりと示しているではありませんか。

言霊イとは人間の創造意志の世界を意味します。その法則が言霊の原理です。言霊エとは、

その原理に基づいた実践智の世界です。道徳や道徳による政治の社会のことです。

今から二千年の昔、崇神天皇の時、天皇と八咫鏡が常に同じところにあるという同床共殿の制度が廃止されて以来、言霊の原理（言霊イ）は日本人の意識から次第に薄れていきました。同時に、言霊の原理を実際の政治に適用実践（言霊エ）していくことも停止されたのでした。古代の道徳政治は終わりを告げました。

人々はその時以来、道徳的な理性に厳然とした心の法則があることを忘れてしまいました。以後、道徳といえば「何々すべし」、「何々すべからず」式のものだけとなりました。言霊イと言霊エの二つの次元は日本人の自覚意識から失われてしまったということが出来ます。日本語がどのようにして作られたかが分からない世となりました。同時に政治といえば、弱肉強食の権力闘争（言霊ウ）の場と人々は考えるようになったのです。

五尺の「心の御柱」の下二尺が地表から下に埋まっているということが、右に挙げた事実を見事に表徴しているのです。

天与の人間の性能のうち残されたものは、五官感覚による欲望活動（言霊ウ）と経験知の集まりである学問（言霊オ）と人間の感情に由来する宗教・芸術活動（言霊ア）の三つの次元だけとなります。この二千年の間、日本人は、また世界の人々は、この三つの次元の性能だけがこの世に生きていくために頼るべきものなのだと思い込んでしまっています。心の御柱が上部

三尺だけ地表から上に出されていることで、右の事実を的確に示しているではありませんか。

以上、伊勢神宮の内・外宮の正殿の床下に祭られてある「心の御柱」の神秘を、言霊の原理によって謎解きしました。「なんだ、ただそんなことか」と軽く受け取られる方もいらっしゃるかも知れません。けれど人間の心の構造とか、人類の歴史とかの難しい問題にかけて考えますと、心の御柱が驚くべきことを物語っているのに気付くのです。

伊勢神宮は二十年ごとに建て替えられ遷宮が行われます。その遷宮の儀式のうちで、この心の御柱の儀式が何よりも厳かに、そして秘密のうちに行われると聞きます。それは心の御柱の祭り方の意味するものが、単に日本ばかりでなく、世界人類の文明を創造する上での大秘儀だからなのであります。

人類の第二の文明である物質科学文明の発達を促進させるための方便として、人類の第一の精神文明の中心となってきた言霊の原理を、時が来るまで隠してしまうという歴史創造上の計画が、日本人の祖先たちによって立てられたという証拠を、はっきりと後世の人々が知ることが出来るよう工夫され、祭られたのが、この「心の御柱」なのです。

それは現代人が、日常に使っている日本語の中に秘められている言霊の原理に気が付き、その原理を自分自身の心の構造と照らし合わせて確認することが出来るならば、誰もが容易に伊勢神宮の正殿の床下に秘められている「心の御柱」の意義の重大さに気付くことが出来ます。

そして日本人の祖先が示した知恵とその洞察力の深さに驚嘆するでありましょう。

心の御柱と御神体

伊勢神宮の内宮の御祭神である天照大神の御神体は八咫鏡であります。八咫鏡は正殿の床下に埋められた「心の御柱」のちょうど真上の船形の御船代（みふねしろ）の上に安置されています。船は石船（いわふね）と呼ばれます。

正殿床下の心の御柱は先にお話したように、人間が生まれたままの自然の心の構造を五十音で表した伊耶那岐（美）の神の音図（天津菅麻（すがそ）音図）の母音の並びを形どったものです。この生まれたままの天与の五十個の言霊を操作し、運用して人類の歴史を創造していく規範（かがみ）となる最高の精神構造を完成しました。この完成された構造を天照大神と呼びます。またその構造を形どったのが御神体である八咫鏡です。

ですから伊耶那岐（美）神は親で、天照大神はその子供です。心の御柱は歴史を創造する土台であり、八咫鏡は創造のための完成された規範である、ということが出来ましょう。

神宮正殿の床下の心の御柱と、そのちょうど真上の床の上に安置された八咫鏡との関係は、以上のようになります。

言葉というものは、人の心を乗せて相手に運び、心を伝えます。いわば言葉は心の乗り物で

す。八咫鏡は言葉の言葉である言霊によって表現された人間の理想の精神のことですから、八咫鏡は乗り物を意味する船の形をした御船代の上に安置されているわけです。

またその船は石船と呼ばれています。石は五十葉の意味であって、五十音言霊のことです。五十音の言霊で出来ている人間精神の完成体を安置する船ですので、石船と呼ばれるのです。

伊勢神宮が五十音の言霊をお祭りしてある五十鈴の宮であることをご理解いただけることと思います。

内宮と外宮

伊勢神宮には内宮と外宮があります。内宮の御祭神は天照大神、外宮の御祭神は豊受姫神です。そして内宮・外宮併せて伊勢神宮といいます。

何故、内宮と外宮があるのでしょうか。また、天照大神と豊受姫神という二人の神様が一緒で一つの宮を作っているのは何故なのでしょうか。その意味についてお話を進めながら、内宮・外宮それぞれの構造の相違を言霊の原理によって明らかにしたいと思います。内宮と外宮の役目の違いがいかに巧妙にその建築構造に表現されているか、我々日本人の祖先の頭の良さに舌を巻くことでしょう。

内宮と外宮では御祭神が違いますから、それぞれのお役目というか、内容というものが違っ

ています。どう違うのか説明していきましょう。

内宮の御祭神は天照大神です。この神様についてはたびたびお話してきましたが、人間の心の要素である五十音の言霊を操作して、最後に結論として得られた人間の精神の理想構造のことです。人類が歴史を創造して行く規範であります。人間の実践智の法則でもあります。その構造を五十音言霊で表したものを天津太祝詞音図といいます。

それでは外宮の豊受姫神とはどんな神様なのでしょうか。辞書には「豊（とよ）」は敬語、「受（うけ、またはうか）」は食物のこととあります。そして豊受姫神で食物を司る神となります。言霊の学問でみますと、意味はもっと正確になります。

豊受姫神の豊というのは十四のことなのです。これは豊葦原の瑞穂の国の豊と同じです。十四というのは人間の心の先天構造である十七音の言霊のうち、その代表的な十四音（アオウエイ・ワ・キシチニヒミイリ）のことです（何故十四音が代表的となるかの説明はここでは省略します）。

豊受の「うけ」は槽または盃の意味で食物を盛る食器のことを示します。

そうしますと、豊受姫神というのは言霊で出来ている食物の入れ物の働き、ということになります。では、実際にはどのような精神の内容を示しているのでしょうか。

内宮の天照大神は、人類の歴史を創造する法則そのもの（鏡）であります。その構造は言霊

で出来ています。外宮は、天照大神が召し上る食物を入れる容器を意味します。言い換えると食物を司る神です。天照大神は歴史創造の神なのですから、その食物というのは歴史を創っていく上での材料ということです。歴史の材料といえば、人類の日々生み出していく精神的および物質的な成果全部を指し示しています。

そこで、内宮と外宮の働きとその関係がはっきりしてきます。内宮は歴史を創造していく言霊の法則（天照大神）を鏡としてお祭りする宮であり、外宮はその鏡に照らし合わせて、人々が生産する色々な心と物の成果を品定めして、それぞれの価値に従って調理して、歴史を創っていく上での役割を決定する働きである豊受姫神をお祭りしてあるのです。

内宮は原理・法則をお祭りし、外宮はその法則によって、世界中に起こるすべての物事を処理して歴史を創っていく場所といったら良いでしょうか。

伊勢神宮の内宮と外宮の精神上の内容の相違と関係を以上のようにみた上で、内・外宮両方の建築内容の違いを見ますと、精神的内容と建築様式の内容がぴったり一致していることに気が付くのです。それは驚くべき巧妙さなのです。以下その点について例を挙げていきましょう。

床　板

伊勢神宮の内・外宮の正殿の構造で明らかに相違しているものの一つに、床板の張り方があ

ります。内宮は床板が南北の方向に張られているのですが、外宮は東西の方向に張られています。この違いは何を意味しているのでしょうか。

『古事記』の「天の岩戸」の章に「天照大神の忌服屋にましまして神御衣織らしめたもふ時に……」と書いてあります。天照大神が織っていらっしゃる神御衣とは何でしょうか。それは時間を経（たていと）に、空間を緯（よこいと）にとって織りなしていく人類文明創造の歴史のことを言っているのです。

さて、内宮は人類の文明創造の規範である天照大神をお祭りしてあります。この鏡によって示されている原理・法則は、人類がその種を保って続く限り永久に変わることのない真理です。永遠に変わらないものという意味で、織物の縦の糸（経）で表します。地図をご覧ください。東経何度というように縦（経）は南北に通っています。この原理を後世に伝えるべく、内宮の床板は南北に張られているのです。

外宮の御祭神は豊受姫神です。この神の働きは天照大神の八咫鏡に照らして、その時代時代の出来事（天照大神の食事）を人類歴史の中に適材適所に組み入れて処理することです。それは原理法則が経であるのに対し、緯の働きをします。地図で北緯何度……といいますように、緯は東西に走っています。外宮正殿の床板が東西の方向に張られていることによって、豊受姫神の働きを的確に表現しているわけです。

内宮の経と外宮の緯が相交わって天照大神が行う人類歴史という壮大な織物が織られ、創造されていきます。内宮と外宮併せて伊勢神宮と呼ばれる理由をご理解いただけたことと思います。言霊五十音で出来ている八咫鏡（歴史創造の規範）を祭る伊勢神宮について説明しました事実を、ものの見事に表現しました和歌を一つここで紹介させていただきましょう。それは明治天皇の皇后、昭憲皇太后のお歌であります。

「敷島の大和言葉をたて貫きに織る倭文機の音のさやけさ」

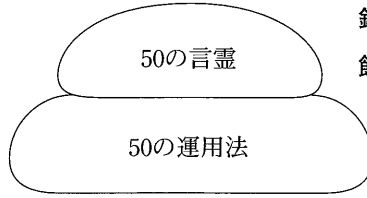
右のお歌の中の敷島は大和にかかる枕言葉。その語源は、磯（五十）城島で五十音言霊のことです。また「たて貫き」とは縦横の意味であります。

木　階

神宮正殿の正面についている木の階段について見ることにしましょう。その木階の段の数は内宮・外宮で相違があり、内宮は十段、外宮は十一段となっています。この段の数の相違は何を意味しているのでしょうか。言霊の原理から考えてみます。

すでに幾度かお話してきたことですが、人間の心は五十個の言霊から成立しています。この五十個の言霊を操作・運用して、歴史創造の理想の精神構造を完成させました。するとその完成までの基本的な手順が、またちょうど五十ありました。五十と五十で計百個の道理というこ

鏡餅



天津太祝詞

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ									イ
ヱ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ
ウ									ウ
ヲ									オ
ヱ									エ
ヰ									イ
ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア

完成された人間の心の鏡（八咫鏡）を表しますので、鏡餅と呼ばれます。

この鏡餅を言霊で表しますと、上部に天津太祝詞（ふとのりと）と呼ばれる五十音図、下部にその五十音図を上下の順を逆にして接続した百音図が出来ます（図参照）。その図は縦十列、横十列の正方形となります。十の数は結びで完成を意味しています。

さて階段とは英語でステップ、あるところまで到達する行程という意味があります。神宮正殿の八咫鏡を安置してある床上に行くまで、言い換えますと、八咫鏡である実践智の規範（かがみ）を完成するまで十段の音図の階段を登る必要があるということを表しているのです。

とになります。人間の心は、すべてこの百の道理で把握することが出来ます。

このことを物で表徴したのが神道で神前に供える上下二段紅白のお供え餅です。百の道理で百道（もち）（餅）というわけです。上の段が五十個の言霊を、下の段が五十の運用法を表示しています（図参照）。百の道理で

内宮の御祭神である天照大神は、人間精神の完成された姿でありますから、それを示すために内宮の木階は十段なのであります。

正月の十一日は鏡開きのお祝の日です。正月元日から十日までの十日間、床の間に飾った鏡餅を十一日に床の間より下げ、くずしてお汁粉に入れて食べるお祝の行事です。十日の十は完成・結びを意味する数です。そして翌日の十一日の十一とは、十で完成された原理を次に活用していくことを意味しています。

外宮の御祭神である豊受姫神は食物を司る神です。天照大神の食物といえば、人間の精神的・物質的な営みの生産物一切のことを意味しています。豊受姫神は、その人間社会の成果をすべて天照大神の鏡に照らし合わせて、その価値を決定する役目の神です。豊受姫神は十である完成された天照大神の原理を活用する役目です。

内宮は原理を祭り、外宮はその原理の活用の働きです。内宮は鏡であり、外宮は鏡開きということが出来ます。このことを表現して、外宮の木階は十一段なのであります。

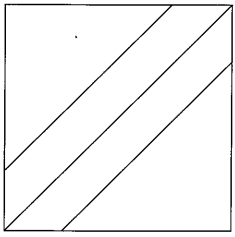
以上、内宮と外宮の正殿の木階の数の相違について言霊の原理から説明したのですが、このことに関した面白い言葉の語源について簡単に付け加えておきましょう。「和幣（にぎて）」と「掟（おきて）」であります。

昔は数を数えるのに指を使いました。物事の道理を調べるのに、一本一本指を折って個々の

道理を自覚していき、十本の指を全部折り終えた時、物事の一切の道理を掌握したことになります。すべてを手で握ったことです。この掌握された道理を握手（にぎて）といいました。和幣とも書きます。貨幣とは、労働の生産物の価値を掌握しているものという意味です。昔、お金のことを子供は握々（にぎにぎ）といったものでした。

十本の指を全部握り終えて自覚し、掌握した道理を、今度は指を一本ずつ起こしていって、現実の実情に当てはめて活用運用していきます。「汝殺すなかれ」「姦淫するなかれ」……と法律を作ります。指を起こしていくこと、起手が掟の語源なのであります。起手の始まりは十一数であることがご理解いただけたでありましょう。

千木（ちぎ）



伊勢神宮正殿の屋根は萱葺（かやぶき）で、四十五度の傾斜をもっています。棟の両端に千木が二本ずつ立っています。内宮の千木は内削（うちそぎ）といって切口は水平であり、外宮の千木は外削（そとそぎ）といって切口は垂直になっています（図参照）。

千木というものは何を意味しているのでしょうか。内削と外削との違いは何なのでしょうか。

千木というのは道木の意味で、道理の気ということです。御祭神の言霊学上の働きを千木で表しているのです。

哲学の言葉で表現しますと、内削は演繹法を、外削は帰納法を示しています。辞書では「演繹法とは一般から特殊を導き出す思考方法」とあり、また「帰納法とは個々の特殊の事実を総合して共通点を求め、一般法則を見出す思考方法」と説明してあります。大変難しい言葉の説明ですが、言霊の立場から内・外宮の御祭神の働きをみると、その意味がよく分かってきます。

内宮の御祭神である天照大神は神道信仰でいえば最高の神でありますし、言霊の原理からいえば五十個の言霊によって組織されている人間の心の最高理想の構造の姿ですから、人の知恵がこれよりさらに先へは進むことの出来ない究極の真理なのです。ですから、この世の中の社会の真理とか、道理・主義・主張の一切はこの究極の真理から出てくるもの、この最高構造の一部分を担うものであるに過ぎません。

それゆえ、天照大神の働きは演繹的です。内宮の千木はこれを表して内削なのです。

外宮の豊受姫神の働きはどうでしょうか。姫神の働きとは、前に説明しましたように天照大神の食物の材料である世の中の物心両面の産物を、天照大神の五十音の鏡に照らして料理することであります。言霊五十音図に照らし合わせて、この思想は五十音図のここに相当するもの、この主義主張は五十音のこの音とこの音の役目を強調しているなど、世の中の産物の内容を五

十音図に近づけていって、その役目を判定することです。これはまさしく帰納の方法でありましょう。

別の言い方をしますと、人類社会の色々な主義・学説などを八咫鏡という俎板（まな板、真名板、言霊五十音図）の上に置いて、料理して、人類歴史の創造の神である天照大神の食物として供する働きです。論理的にいいますと、下から上へ、特殊から一般法則へ帰し納める方法です。

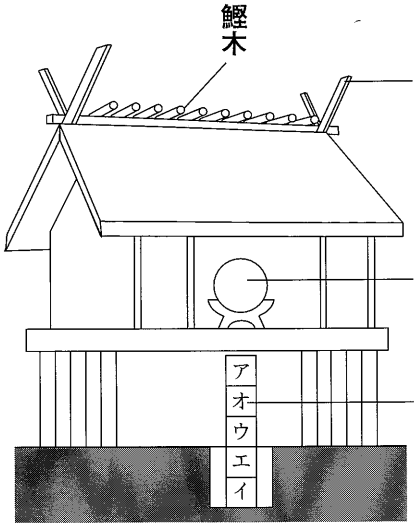
このように豊受姫神の働きが分かりますと、外宮の千木の外削であることの理由もはっきりとしてくるでしょう。

内宮・外宮の千木の内削・外削の相違とは以上のようであります。伊勢神宮が単に美しい建物というばかりでなく、その深遠な哲学的な言霊学的な表現をもご理解いただけるものと思います。

鰹木（かつぎ）

内宮と外宮の建築様式の相違は、右に挙げたことの他に鰹木があります。神宮正殿の棟の上に、棟とは直角の方向に鰹木が並んでいます。鰹木の数は内宮が十本、外宮は一本少なく九本です。鰹木とは何を意味し、内宮と外宮でその数が違うのは何故なのでしょうか。

鰹木とは実は「数招ぎ」の謎なのです。内宮の御祭神、天照大神と外宮の豊受姫神の働きの内容を言霊で表し、その違いを言霊の動きを示す「数霊」をもって説明したものです。言霊の他にその動きを表す数霊も関係することとなりますので、ここでは鰹木についても内・外宮で相違があるということだけをお知らせし、その説明は拙著『古事記と言霊』に譲ることといたします。



伊勢神宮の正殿の建築様式である「唯一神明造り」について、それがどのように言霊の原理を表しているかを心の御柱、床板、木階、千木、鰹木について調べてきました。

今から二千年の昔、神倭朝第十代崇神天皇の時、物質文明を振興させるための方便として、精神文明の中心であった言霊の原理を政治に適用することを中止したのでした。隠された言霊の原理は、伊勢神宮の神として、信仰の対象として祭られました。そして祭られた神の真実の姿を後世の人々に伝えようとして造られたのが、唯一神明造りの

建築様式であります。

清流の五十鈴川にかかる橋を渡り、参道を進み、唯一神明造りの神宮の本殿の建物に接する時、信仰心を持たない人でも神宮の建築の造形の美しさに心打たれない人はいません。日本人の心情として民族の心の故郷はここにあったのか、と思われる人もいらっしゃることでしょう。「何ごとのおわしますかは知らねども……」西行法師の歌が思い出されます。

そしてさらに、唯一神明造りと呼ばれる建築様式が暗示する人間の心の構造である言霊の原理をお知りになるならば、古代日本人の美的感覚の優秀さばかりでなく、人間の心と歴史に関する緻密な洞察力に驚異と畏敬の念を抱かないわけにはいかないのではないでしょうか。

［注］ここに説明しました唯一神明造りの様式を厳格に伝統として受け継いでいる宮としまして、伊勢神宮の他に、名古屋の熱田神宮や丹波の元伊勢神宮があります。その他の日本各地の神宮・神社は千木や鰹木についてのそれぞれ特有の伝統は、年月の経過と共に薄れ、単なる社殿の装飾物だけと思われるようになりました。数招ぎ（数霊）の伝統は全く無視されているものが多いようです。

たぬきそば――狸の肉の入ったそば、ではない。「た」とは田で、古代、人間の人間たるの資格全部を意味する五十音言霊図の自覚のこと。五十音図は田の形である。転じて肝腎要の意。たぬきそばは、そばの上にあげ玉が乗っている。あげ玉だけで、天ぷらの中味が欠けている。すなわち田抜きそばの意であります。

第八章　昔からの謎々

エジプトのピラミッドは幾千年も前に建造されました。その巨大な建造物は何のために造られたのでしょうか。ピラミッドの他にも、長い間遺されていて、意味がはっきりしないものや事があまりにも沢山あります。

昔の人々が現代に投げかけている多くの謎々の中から、幾つかに言霊の光を当ててみることにします。思いもかけぬ事実が浮かび上がってきます。

日本のおとぎ話（桃太郎）

今から二千年の昔、物質科学文明の進歩を促進するための方便として、精神文明のエッセンスである言霊の原理は、日本人の意識の底に隠されてしまいました。崇神天皇により「三種の神器と天皇との同床共殿」の制度が廃止されたのがその現れであります。

同時に将来物質科学文明が完成に近づいた時、言霊の原理が再び日本人の脳裏に蘇り、物質科学文明の原理とともに車の両輪となって、人類の新時代を建設することとなる準備として種々の施策が講じられたのでした。私たちが子供の頃、母親から聞かされたおとぎ話もその施策の一つなのだといったら驚く方も多いのではないでしょうか。

大切な教えを後世に残そうとする場合、まず書物として保存することが、考えられる第一の手段です。しかし、秦の始皇帝の「焚書」のごとき例もあります。その点、親から子へ、子から孫へ童話として語り伝えていくことは、あるいは最も確実な保存の方法なのかも知れません。日本に古くから伝わる桃太郎や舌切雀、花咲爺、カチカチ山、猿蟹合戦、浦島太郎などのおとぎ話は、実はアイウエオ五十音言霊の原理を巧みに内容に織り込んだ譬え話なのであります。

それらおとぎ話のいくつかの作者は、平安時代の政治家であり、学者であった菅原道真公だという説があります。今も天神様と尊敬され、学問の神と讃えられる菅公ならばと頷かれます。因みに「学ぶ」の語源は真名・真奈で五十音の言霊のことであります。ここでは有名なおとぎ話の中の「桃太郎」を取り上げることといたします。

●桃太郎

昔あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ柴刈に、おばあさんは川へ洗濯に行きました。川上から大きな桃が一つ流れてきました。持って帰ってその桃を割ると中からかわいい男の子が出てきました。桃から生まれたので桃太郎と名付けました。桃太郎はすくすくと成長して立派な若者になりました。ある日桃太郎は「これから鬼が島へ鬼退治に行って来ます」と申しました。おじいさんとおばあさんは、日本一の黍団子を作ってお弁当に持たせ、励ましました。途中で犬・猿・雉・（熊）が桃太郎から黍団子を貰って家来となりました。そして勇ましく鬼が島に乗り込み、悪い赤鬼や青鬼をさんざん懲らしめました。鬼たちはついに降参し、もう悪いことはいたしませんといって自分たちの宝物を全部差し出しました。桃太郎は家来とともにその宝物を持っておじいさんとおばあさんの所へ帰りました。めでたし、めでたし。

日本の古典、『古事記』の神代の巻をお持ちでしたら参考にしてください。

おじいさんとおばあさんの名前を伊耶那岐の神・伊耶那美の神といいます。人類社会の創造の主神であり、また言霊の神であります。おじいさんは山へ柴刈りに行きました。山とは八間のことで、人間天与の創造智性である八つの父韻言霊のことです。柴とは霊の葉の謎で、霊とは言霊のことですから、柴は五十音言霊を指します。

おばあさんは川で洗濯をしました。川の名を『古事記』で筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原の川の瀬といいます。洗濯とは古神道の禊祓のことです。人間の心を構成する言霊の数は五十個、その五十個の言霊をどのように活用したら人間精神の理想の構造が出来るかの操作の手順が五十あり、この手順を禊祓といいます。五十個の言霊を五十通りに操作しますから、合わせて百の原理となります。川から桃が流れてくるということは禊祓によって百（桃）の原理が出来上がることを譬えたものです。正月の床の間に飾る鏡餅も同じことを表徴した行事であります。

桃の中から桃太郎が生まれたとは、この百個の原理を理解し、これを活用することが出来る人が生まれたということを意味します。それは百個の人間生命の根本原理で人類の文明の歴史を創造する実行者のことであります。『古事記』の「黄泉国」の章に「伊耶那岐の命、桃の子に告りたまはく、汝吾を助けしがごと葦原の中つ国（日本）にあらゆる現しき青人草の、苦き

瀬に落ちて、苦しまむ時に助けてよと告りたまひて、意富加牟豆美の命という名を賜ひき」とあります。梅若の狂言にある「桃太郎」はおとぎ話の桃太郎のことで、狂言の中でシテの桃太郎はみずからを意富加牟豆美の命と名乗ります。大いなる神の稜威の身という意味で、言霊の原理（八咫鏡）に基づいて歴史を創造する神である天照大神のことであります。

桃太郎は健やかに成人して、鬼が島に鬼退治に行きます。鬼の「お」は言霊オのことで、物事の関連性（緒・尾）を調べることであり、鬼の「に」はその関連性を学問として第二次的にまとめていくことで、その作業から物質科学や産業経済の分野が展開してきます。それは『古事記』が説く須佐男の命の支配する世界であり、人類に素晴らしい便利な生活の道具（宝物）を提供しました。と同時に権力闘争の道具に使われ、戦争による生命の危険・人心の荒廃・地球規模の公害をもたらしました。いつまでもこの宝物を鬼の独占の手に委ねておくわけにはいきません。天照大神の生命の原理の中に取り込まなければなりません。

おじいさんとおばあさんは黍団子を作って桃太郎に持たせます。黍とは伊耶那岐・伊耶那美の岐美であります。『古事記』は岐美二神の結婚によって三十三の子の神が生まれてくることを書いています。子とは三十三相の後天現象のことで、円満玲瓏な言霊の玉すなわち団子のことです。百個の言霊原理によって組織された人間精神の完成構造の鏡に照らし合わせることによって、初めて物質科学の成果を人類の福祉に奉仕させることが可能となります。

桃太郎から黍団子を貰った犬（言霊イ）、猿（言霊ウ）、雉（言霊オ）、そして熊（言霊ア）が家来となってお供をしました（現在では熊が省略されています）。仏教でいえば仏陀に従う四天王のことです。この場合、桃太郎は言霊の原理（言霊イ）に則って言霊ウオア（欲望・経験知・感情）をコントロールする実践英知（言霊エ）に当たります。

かくて桃太郎は四天王を従えて鬼が島に乗り込み鬼達を征伐しました。物欲と権力闘争に明け暮れている世の中に姿を現し、言霊の原理を高く掲げて世の中の矛盾を解消し、鬼が島の宝物である科学文明の利器が人類全体の幸福な生活に百パーセント役に立つ恒久平和の世界を実現させました。桃太郎の凱旋であります。めでたし、めでたしということになります。

以上、桃太郎のおとぎ話は現代の物質科学文明が完成に近づいた時、その科学文明とともに数千年以前すでに発見・完成されていた精神文明のエッセンスである言霊の原理とが相携えて、人類の新しい第三の文明を創造する消息を予言した譬え話であり、童話であるということが出来ましょう。

カゴメ、カゴメ

「かごめ（篭目）、かごめ、篭の中の鳥は、いついつ出やる。夜明の晩に、鶴と亀が出会った。後ろの正面だーれ」

右のわらべ歌はどなたもご存じのことと思います。けれどこの歌が言霊の原理よりみた人間社会に関しての予言書であることを知っていらっしゃる人は少ないようです。「へえー」と思われる方も、この文章が進むにつれて納得されることでしょう。

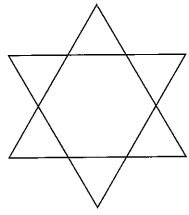
言霊の原理が方便として世の中から隠されて以来、時が来て再び日本人の心にその真理が蘇ってくることを願って、色々な施策が講ぜられたことはすでにお話しました。伊勢神宮の唯一神明造りの建築も、『古事記』『日本書紀』の編纂も、また皇室の色々な儀式の形式の工夫などもそのためでした。

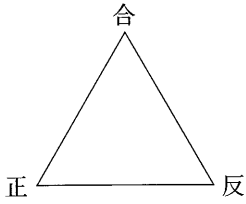
さらにもう一つ他の方法がとられました。言霊の原理を秘めた童謡や童話を作って子孫に遺すことです。童謡や童話は親から子、子から孫へと語り伝えられます。伝統の書物や建築物は、時には消失してなくなってしまうこともあるでしょう。けれど親から子へと語り伝えられる歌

や話は、世の中が続く限り絶えることはありません。

昔から日本に伝わる童話――桃太郎・浦島太郎・カチカチ山・舌切雀・花咲爺・猿蟹合戦などは、ひとたび言霊を知った眼でみますと、明らかに言霊の原理を秘めた歴史的予言書であることが分かってきます。そしてこの文章の初めに挙げました「カゴメ、カゴメ……」の童謡も同じ内容のものなのです。「カゴメ」のわらべ歌の意味をお伝えすることにしましょう。

カゴメ

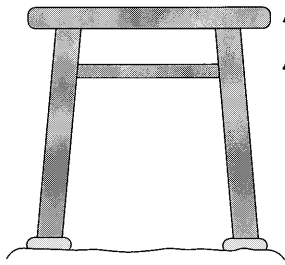




まずわらべ歌の文章通りの意味をみましょう。「篭目の篭の中に閉じ込められた鳥はいつ出てくるのか。夜の明けようとする頃、鶴と亀が出会う時にだよ。後ろの正面にいるのは誰だ」という意味であります。さて歌の言霊学的意味に入りましょう。

図に示しますマークをカゴメといいます。この商標をつけた調味料を販売する会社の名前をどなたもご存じのことと思います。それよりももっと有名なのは、イスラエルの国旗のマークがこのカゴメであることです。

昔、経験知である言霊オの心の構造を表すのに三角形△を用いました。個々の経験と経験を関係させて、その共通の状態や法則を探っていくことが経験知である学問や科学の研究の仕方です。この方法を哲学的に言いますと、正反合の弁証法的発展の思考方法と呼びます（図参照）。



鳥居

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
イ									ヰ
ウ									ウ
エ									ヱ
オ									ヲ

この学問のうち、精神的な学問は形而上学と呼ばれて、上向きの三角形△で示され、物質的な学問は形而下学といわれ、下向きの三角形▽で表されます。この形而上と形而下の二つを合せた学問全体の思考方法は✡の形で表され、この形をカゴメ（籠目）と呼びました。物質文明尊重の世の中では、もっぱらこの学問的思考方法が世の大勢を占めることになります。

次に「籠の中の鳥は……」の鳥の意味に移りましょう。神社には鳥居が立っています。この鳥居の鳥も籠の中の鳥も意味は同じで、言霊を指しています。鳥居の二本の柱は私とあなたを意味しています。五十音図で言えば母音と半母音です。その二本の柱を結んで上に渡した横木は、五十音言霊図でア・カサタナハマヤラ・ワの十言霊を示しています（図参照）。

私とあなたの間を飛び交って、お互いの心を伝えるものは言葉です。もっと正確に表現しますと、言葉に秘められ、その言葉を形成している言霊です。昔の日本人はこの私とあなたとの間を飛び交う言霊を、「鳥」がこちらの枝からあちらの枝に飛び交うのに譬えたのでした。

「淡路島通う千鳥の鳴く声に……」の古歌はやはりそのことを意味しています。鳥とは言葉の原理、言霊の原理を譬えた言葉なのです。

また鳥とは十理（とり）で、五十音言霊図の上段の十音の原理のことでもあります。前にもお話しましたように、神とは私たちが使っている言葉の原理、言い換えますと言霊のことなのだ、ということを参拝者に暗示しているのが神社の鳥居なのです。

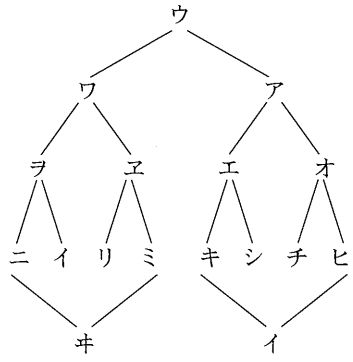
そうしますと、「かごめ、かごめ、篭の中の鳥はいついつ出やる」とは、「カゴメの形で示される物質文明の思考の社会の中に閉じ込められ、隠されてしまっている言葉の法則・言霊の原理はいつ再びこの社会に蘇ってくるのだろうか」という意味になるでしょう。

「夜明けの晩に、鶴と亀が出会った、うしろの正面だーれ」と歌は続きます。現在「鶴と亀がすべった……」と伝わっているところもあるようですが「出会った」が本当です。夜は、明け方が一番暗いといいます。「夜明けの晩」の一番暗い時、物質文明が盛んになればなるほど、世相はかえって公害だの、原爆の脅威など暗黒さを増していきます。華やかな繁栄の陰に言い知れぬ不安は募るばかりです。

そんな状況に世の中が立ち至った時、「鶴と亀が出会った」となります。さて何を意味しているのでしょうか。

鶴とは剣を、亀は鏡のことを指した譬えなのです。前にもお話しましたように、古代の剣は

天津磐境（鶴）



天津神籬（亀）

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ	シ	イ	ニ	リ	ヒ	ミ	キ	チ	イ
ヱ	セ	エ	ネ	レ	ヘ	メ	ケ	テ	エ
ヲ									オ
ウ									ウ

両刃の太刀で人間の判断力を表徴したものです。それを言霊で示したのが、言霊十七音で作られている天津磐境（あまついはさか）の原理です（図参照）。人間が生きていくための物事の判断力の構造を言霊で示したものです。

人間の判断力で分析して得た心の要素を再び総合して出てきた結論を、五十音言霊で表したものを天津神籬（あまつひもろぎ）と呼びます。それを粘土板に刻んで焼いたものを甕神（みかがみ）と言いました。鏡の語源です。または単に甕（かめ）とも呼びます。

以上で、鶴は人間の判断力である天津磐境、亀は結論である天津神籬を示していることが分かります。鶴は人間の思考の初め、亀は思考の結論。そうしますと「かごめ、かごめ……」の童謡の全部の意味は――

「大昔、物質文明を作る人間の考え方の形式である三角形のカゴメ（篭目）の中に封印されてしまった人間の言葉の原理（言霊）はいつ、この世の中に再び戻ってくるのだろうか。世の

中の道徳が乱れて最も暗い世となった時に現れるよ。その時人間の心の判断力の始まりから、結論まで全部その謎が言霊で明らかになるんだよ」ということになります。

そのように人間の心の内容がすべて明らかに分かってきた時には「うしろの正面だーれ」、あなたという人間を人間たらしめている真実のもの、「それはなあんだ」というわけです。

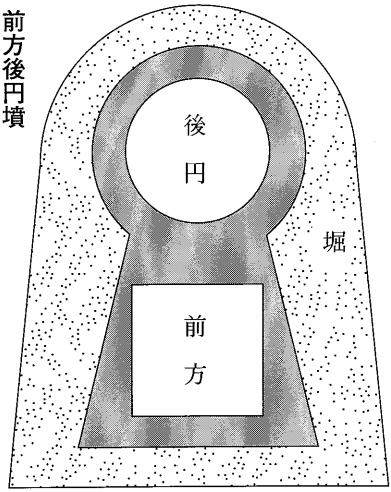
人間が人間であることの条件、それはアイウエオ五十音言霊であることを後世いつの代まで も遺そうとして、昔の人は親から子、子から孫と伝える童謡に託したのがこの「かごめ、かごめ……」の歌なのであります。

私たち日本人が日常使っている日本語の中に秘められた言霊の原理が、人間精神の秘宝であることに気付く時、人々は日本が世界人類に対して負っている責任の重大なことを自覚して、国家としての新しい使命に勇躍することが出来るでしょう。

前方後円墳

昨今は、考古学がちょっとしたブームだそうです。〇〇王の墓の発掘、××城跡の発見など考古学的発掘のニュースがテレビや新聞を賑わしています。民族の昔に一般の人の眼が向くということは、国民の生活が安定していること、また自分の国の存在に誇りを持ち始めている証拠で、まことに結構な風潮です。

さて考古学上の発掘の中心となるのは何といっても古代の古墳、前方後円墳でありましょう。古代の天皇その他皇族や王族達の墓とされています。そのお墓の形は「前方後円」という名のごとく、お参りする人に近く大きな正方形の築山を作り、後方にその正方形よりはやや小さい円形の築山を接続させ、その方（四角形）と円との周りを水を



前方後円墳

溜めた堀で囲ったものです（前ページ図参照）。

発掘によって出土した種々の埋蔵品、それを入れてあった穴の壁の色彩などについては、今日では色々なハイテクの装置を使って精密な検査がされているようです。けれど筆者が不思議に思うことは、古墳全体の形である前方後円についての検討が未だにされていないことです。古代や古代人について調べるためには、まずそのお墓の形の意味を明らかにしなければならないのではないでしょうか。前方後円墳の意味について、言霊学が現代人を古代人の持っていた精密な精神性に導いてくれます。

まず問題となるのは、前方後円墳の方（四角形）と円はどんな意味を持っているのか、ということです。次の問題は、このような形のものを何故天皇や貴人のお墓として作ったのか、という点でありましょう。

人間の心について考えてみましょう。生まれたばかりの赤ちゃんのことを「玉のような」と形容します。生まれたばかりの赤ちゃんは、何らの作意もない大自然そのままの姿です。人間が大人になり、宗教によって自分の本性を見ようとするのも、実は生まれたばかりの赤ん坊の心に帰ろうとすることなのです。「汝翻って幼児の如くならざれば天国に入るを得ず」と聖書に記されています。大自然そのままの形は丸〇で表されます。

蛇足になりますが、大自然の現象を振り返って、その現象間の法則を求め、ついには大自然

そのものの真理に到達しようとする科学的思考は正反合の弁証法の三角形△で表されることは前項のカゴメの形で説明しました。この思考の段階を、言霊学の教科書である『古事記』は天(あめ)の常立(とこたち)神（言霊オ・経験知）という神名で表しています。大自然（天）を恒常に（常）成立させる（立）実体（神）というわけです。大自然そのものは丸○で、その大自然を追及する学問思考は三角形△▽で示されます。

丸○である大自然から与えられた人間の色々な性能を、人間社会の文化を創造するためにどのように使っていくか、という実践智は大自然のものではなく、大自然の法則を自覚した上で、それをどう活用するかの人間の実践智であり、作意的なものです。文明創造の政治は、単なる大自然とは異なります。この人間の能力は方形・四角□で表しました。その方法・法則を中国の易は八卦で表し、言霊学はヒチシキミリイニの八つの父韻で示します。その形は⊠または⊞となります。この人間の働きを『古事記』は国(くに)の常立(とこたち)神（言霊エ）と呼びます。国家（国）が恒常（常）に成立する（立）ための実体（神）というわけです。

大自然の丸○に対して、古代人は文化創造活動の能力（実践智）を方形□で表したのでした。神武天皇が始めた神倭皇朝からこの方、日本の天皇は世襲となりました。次の天皇を選ぶのに能力でなく血筋を尊んだのです。血筋となると自然のことに属します。天皇は天の命（大自然）によって皇帝の位に就きます。そしてその天皇の下に文武百官がいて、学問や風俗・習慣

などを基礎に政治を行ない、民衆を治めることになります。

この形を民衆の方から見ますと、政治というものはまず近くに文武百官のいる諸官庁があり、その奥に天命によって位につかれた天皇がいるということです。前方後円の形が国家の中での天皇の座の権威の内容を簡潔に表しているではありませんか。文武百官の上に位している天皇の座は、人智の及ばない天の命である絶対のものであることを示しているのです。

さて、それでは前方後円の形をお墓として採用した理由は何なのでしょうか。

人は死んだ後でも、生きている時と同じような状態で生命が永遠であることを望むでしょう。死んだらすべてが無になるなどということは、考えただけで恐ろしいことです。天皇や王族が亡くなった場合でも、その人たちが国家に遺した功績と権威が永遠であることを形に表そうとします。そのためには国家の政治の中での天皇の精神的権威を表した前方後円の形を、そのままお墓の形にすることが死者に対する最大の敬意であったのでしょう。貴人のお墓を前方後円墳としたのはこのような理由によります。

日本古代のお墓の形式である前方後円の円は大自然であり、方形は人間の自覚された働きであるという考え方は儒教や仏教とも共通したものであったことが、今でも遺されている言葉や建築物によって証明されます。そのことに簡単に触れておきましょう。

まず円について見ましょう。中国では昔、皇帝の権威は天から授かったものと考えました。

それを表すために、天子は冬至の日に壇を築いて天を祭りました。これが天壇です。天から授かった天子の権威の象徴で、○の形でもって表徴しました。今でも北京や奉天などに旧跡があるそうです。

仏教ではどうでしょうか。法華経の中に明らかに示されています。妙法を説法する釈迦如来に対して、その説法が真理に叶ったものである時、釈迦如来の後方に位置する多宝仏という仏が「善哉（よいかな）」と言って釈迦如来の説法を承認する場面の記事があります。説法が真理かどうかを判断するには、人間の精神の先天構造に照らし合わせて初めて可能となります。心の先天構造というものは、人間に与えられた天与の思考構造です。大自然に属するものといえます。多宝仏とは、精神の先天部分を表徴している仏の名前なのです。

古くからある寺院の多宝仏を祭る多宝塔をご覧になってください。その外側が円形であることを発見されるでしょう。

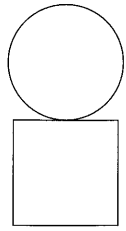
次に方形について見ましょう。中国に社稷（しゃしょく）という言葉があります。昔の中国の政治では社とは土地の神のことであり、稷は穀物の神として、天子や諸侯がこの二神を王宮の右に祭ったことから、社稷とは国家・朝廷を表す言葉となりました。治国平天下の策を司どる政治運用の政府のことです。易の基本形である方形□をもって表されました。

また仏教においても、修行僧や一般の民家の檀家を和尚さんが接見したり説法する場所は、

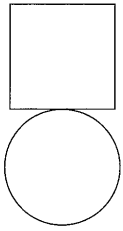
方丈とか本堂とかいって四角形の建物が普通です。和尚さんの説法は、法を自覚した上での人間の作意であって、自然ではないからです。

前方後円墳の形が示している意味は以上のお話でご納得いただけたことと思います。中心に天より統治の権威を授けられた天皇がいて、周りにその権威の下に民衆を治める諸官庁があって、政治を司どるという国家の権威がいつまでも永かれと祈願して、天皇や王族の遺体をその精神的表徴である前方後円墳に埋葬したのです。

ここで少々付け加えたいお話があります。二千年以上前、神武天皇からの天皇家は世襲を事とし、その賢愚に関係なく天子の位に就きました。けれど神武以前、いわゆる神代の時代はどうだったのでしょうか。前にお話しましたように、その時代の天皇は聖（霊知り）天皇でありました。天皇となる資格とは、人間精神のアイウエオ五十音言霊の構造を心の中に自覚していることであり、世襲とは限らなかったのです。



前方後円



前円後方

この場合、その天皇のお墓は（それが今後発見されたらの話ですが）前方後円墳ではなく、前円後方墳でなければならないはずです（図参照）。その聖天皇は人間性の全部を知り、その法則によって世の中の人の言葉を「聞こし召す」スメラミコト

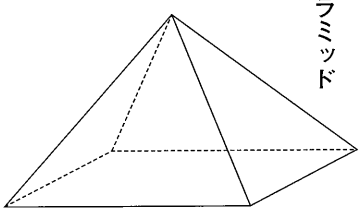
（言葉の統一者）であり、政治の総責任者であります。天皇が□です。その天皇の命令を、下にいる文武百官が御心に沿って、学問弁証法的に法律条文化したことでしょう。その仕事は△であり、その元は大自然の○で表されます。

古代のお墓ということになりますと、もう一つ付け加える話があります。それはエジプトのピラミッドです。約五千年ほど前のエジプト国王の墓で、エジプトのメンフィス地方に約七十五のピラミッドが現存していると聞きます。その形は巨大な石造四角錐です（図参照）。

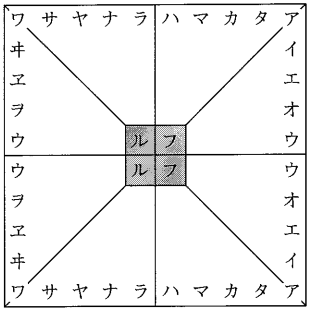
この巨大なピラミッドを建造した理由については、昔から天文学・地球物理学その他の方面から種々の推測が行われています。それらの研究もそれぞれ価値あるものでありましょう。けれどピラミッドが大国エジプトの王の墓であることを考えますと、その形は人間の精神の典型を表徴したものとするのが最も妥当のようです。

そう考えますと、ピラミッドと同様な形を持った精神的表徴が日本の古神道に遺されています。それは高千穂（たかちほ）の奇振獄（くしふるだけ）と呼ば

ピラミッド



高千穂の奇振獄



れるものです（前ページ図参照）。

人間の実践智（言霊エ）の精神構造を表す天津太祝詞（あまつふとのりと）の五十音図を上下・陰陽に並べますと、図に見るような百音図が出来ます。その百音図の中心に「フル・フル」の四字が入ります。この四字の所をつまんで、底辺に直角の方向に引き上げますと、「フル・フル」を頂点とした五段階の四角錘が出来上ります。

図形の弄びのように感じられるかも知れませんが、こうして出来た四角錘を昔の神道では高千穂の奇振嶽と呼び、人間の実践智を活用する言霊の動きを表したものなのです。この場合、「フル」とは実践智の原理を活用する、という意味であります。またこの図形を昔、百敷の大宮（おおみや）と呼び文武百官が集う国家の政庁を表してもいました。

マニという言葉が昔から世界の共通語であったように、このピラミッドの形も当時世界的に知られた真理を表すものであったのでしょう。エジプトの王様たちは、死んでその肉体が息づかなくなっても、人間精神の真理の象徴である巨大なピラミッドを造り、それを魂の住み家として永遠の生命の中に生き続けようと希望したのでありましょう。

さらに余談になりますが、ピラミッドの前に頭が人間で体がライオンの姿をしたスフィンクスが、後ろ向きに置かれているものがあります。スフィンクスとはギリシャ神話の中に出てくる怪物で、岩の上にいて前を通る人に「朝は四足、昼は二足、夕は三足のものは何か」と謎を

かけ、解けない者を殺したと伝えられています。謎の正体は今では誰でも知っている通り「人間」です。

その人間とはそもそも何者であるのか。「うしろの正面だあーれ」、そこにピラミッドが建っています。ピラミッドとは、永遠に変わることのない人間精神の実践智の活用の構造を表しているのです。

たらちね――垂乳根。母または親にかかる枕言葉、語義不詳とある。言霊の学からみると、足道音、道理を生む音の意。五十音の言霊を生む伊耶那岐・美の二神である言霊イ・ヰ。二神は万物を生む親である創造主神でありますので、子を生む親・母の枕言葉となりました。

第九章　事や物に名前を付けること

言霊学は日本語の起源であるといいました。それなら物や事柄にどのようにして名前を付けていくのでしょうか。そして付けられた名前は、その事物の何を表しているのでしょうか。日本語のすべての語源を明らかにするには、言霊学の奥深いところでの理解が必要になってきますが、ここでは簡単な言葉を例に挙げて名付けの手順をご紹介しましょう。

日本語の物事の名が簡単で、しかもそれでなければならない事物の内容を示していることにお気付きになれば幸いです。

机・筆

個人の経験知による先入観を捨てて、広い宇宙の心に立ち返って、その眼で物事を観察しますと、物事の真実の姿を見ることが出来ます。その姿に、心の要素である五十音言霊を選んで二個、三個と結びつけ名前を付けますと、真実の姿そのものの名前が出来ます。日本人の祖先はそうやって物事の名前を付けていったのです。言霊の原理が日本語の原典である所以です。

この章では古代から変わらない事物の名前の語源について二、三お話することにします。

その上に物を載せたり、その上で字や絵を書く家具を机と呼びます。この机の語源をお話しましょう。机の語源は「斎き据え」です。斎くの語源は五作る、であることはすでにお話しました。自分の心の中に人間の五つの根本性能の宇宙であるウオアエイの五つの母音をしっかりと区別して、理解することでした。昔の人は大勢で物事の対処法を考える場合、全部が車座に坐り、その真中に榊その他の木を根から切ったものを立て、人々はそれを中心にして事態の対処法が分かることを念じたものでした。立てた木を神籬（ひもろぎ）といいます。霊諸招の意が詰った言葉です。同じ座に集まった人の心の中の思い（霊）の全部（諸）をその木に宿らせ（招）、その

上で和の精神からする解決の方法が、人々の心に浮んでくることを念ずる方法です。それによって全部の人が納得する処理の方法が見出せると考えていたのでした。

神籬の木は、適当な高さの台の上に載せられました。この台の上に神籬を斎き、そして中央に据えるということ、すなわち「斎き据え」から、それが短く詰って「つくえ」の言葉が出来ました。机の語源です。

文字を書く道具に筆があります。耳慣れない言い方でしょうが、この筆の語源は「ふたみて」です。漢字を当てますと「二見手」となります。二見手とはどんな意味でしょうか。その意味が現代的であまりに哲学的であるのに驚かされるのです。

二見手の二とは私とあなた、または私と対象物の二つのことを指します。書かれた文字（文章）を見ますと、文章に書かれた対象の人物や品物の様子が理解されます。と同時にその対象について書いた当人が、どんな思いでそれを書いたかも文章から察知されます。

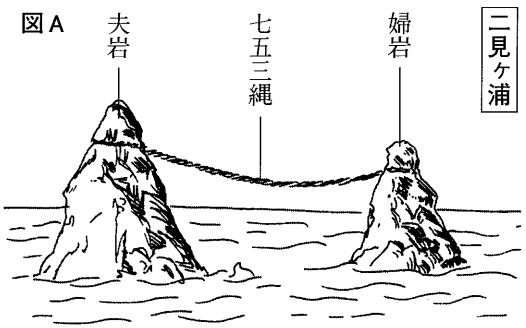
例えば筆者が、ある人物のことを描写する文章を書いているとしましょう。書き続けていくうちに、相手の人物のことを今までよりよく知るようになってきます。と同時に、筆者自身がその人物にどんな印象を持っているか、尊敬しているかどうか、好きか嫌いか等々も、今までより一層はっきりと分かってくることになります。

筆で文字を書くことによって、書く主体と書かれる客体の双方の姿がはっきり見ることが出来るということから「二見手」、それが詰って「ふで」となったのです。筆の語源は以上でお分かりいただけたでしょうか。

色々な事物の日本語の名前の語源のお話をしますと、「それなら二とは、手とは、そして見るの語源は何なのか」と一音で一つの名前を表す言葉の語源を質問されることがあります。「ふ」「み」「て」など一音でそのまま物や数や動作の名前になっていますから、その語源の説明をするためには「ふ」「み」「て」……等の言霊の内容を説明しなければなりません。これは言霊の学問のあまりにも内奥に入ることとなり、煩雑となりますので、ここでは省略させていただきます。

さて筆の語源は「二見手」だと申し上げますと、読者の中には直ちにある地名を連想なさる方がいらっしゃることでしょう。そうです。三重県伊勢の近くに二見ヶ浦があります。伊勢の神宮に参拝された方は、ほとんど観光巡りで行かれるところです。二見ヶ浦には有名な夫婦岩（めおといわ）の景勝があります。

昔、お伊勢詣りが盛んだった頃、大方の人は陸路を松坂方面から伊勢に入りました。が海路をとった人もあったそうです。舟が二見ヶ浦の夫婦岩を正面に見る位置に来た時、人々は夫婦岩の方角に向って伊勢神宮を遥拝したと伝えられています。



図B

八父韻（七五三縄）

半母音（あなた）	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	母音（私）
	ヰ									イ	
	ウ									ウ	
	ヱ									エ	
	ヲ									オ	

伊勢神宮といえば、古代から日本民族にとって関係の深い神宮であることを日本人の大方は知っています。けれど伊勢神宮も、二見ヶ浦の夫婦岩も、言霊そのものをお祭りし、表徴したものであることを知る方は少ないようです。伊勢神宮については先にお話しましたので、ここでは夫婦岩の話を進めることにしましょう。上のA図とB図をご覧ください。

夫婦岩は大小二つの岩が海に浮び、その間を大きなシメ縄を渡して結んでいます（A図の夫婦岩は陸の方から見たもので、実際には海の上、舟から夫婦岩を通して伊勢神宮を遥拝したのですから、図とは反対に向かって右が大きい夫岩、左に小さい婦岩を見るようになります）。

右のことを頭に入れておいて、B図の五十音図と比べてみてください。大きい方の夫岩は音図のアイウエオの五母音に、小さい方の婦岩はワヰウヱヲの半母音に当たります。そして二つ

の岩に渡されたシメ縄は母音と半母音を結ぶ八つの父韻を表していることになります。

としますと、大きい夫岩は主体である私を、小さい婦岩は客体であるあなたを表徴しており、私とあなたとの間に意志の波動（八つの父韻）が飛び交って、一つの出来事が起こるという言霊の原理をはっきりと説明した形になっていることが理解されるでしょう。人と人、人と物との交わりというものは、いつもこういうメカニズムで起こってくるものなのです。昔の人は言霊の原理が世の中から隠されてしまった後、色々な構造物や手段を使ってその原理の存在を後世に遺そうとしたのでした。

文字を書く道具である筆は、その筆を進めることによって客体である対象ばかりでなく、筆を持つ主体である自分の心をも描いていくことになります。まさにこの意味で「二見手」です。伊勢の景勝二見ヶ浦の夫婦岩も人間と人間、人間の物との交わりの法則、それは取りも直さず人間生命の法則でもあるのですが、それを太平洋の波間から永遠にそこを訪れる人に語りかけているのです。

事や物に名前を付けること

この本のお話も終わりが近づきました。ここで、物事に言霊によって名前を付けるということの意味がどんなものかを説明することにしましょう。

人間の心とは何か、また心と言葉とはどんな関係にあるのか、ということをテーマに心の奥底にまで踏み入り、研究の結果、人の心が五十個の要素から成り立っていることを発見し、そのそれぞれにアイウエオ五十音の単音を当てはめ、言霊と呼びました。それは言葉の最小単位であると同時に心の最小単位でもあります。

精神の側から見たこの宇宙は、究極的にこの五十個の言霊によって構成されていて、それ以上のものはなく、それ以下のものもないわけです。そして私たち日本人の祖先はこの五十個の言霊の認識の下に、言霊の結合によって宇宙の中の事や物に名前を付けていきました。古代日本語、大和言葉の創造です。

こうやって言霊を結び付けることによって作られた言葉は、そのまま、その物事の真実の姿を表すことになります。言葉がその実相であって、その姿をことさらに概念や何かで説明する

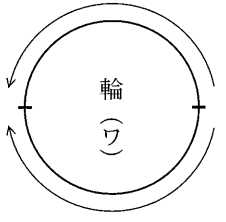
必要がありません。そこには議論が起こる余地がありません。それゆえ、我が国のことを昔は「惟神言挙せぬ国」といいました。「名前がそのまま物事の実相であって、その他にくどくどしい説明を必要としない国」という意味であります。

真実の姿とか実相などといいますと、物事を人が普通に見た通りのままの姿ならそれが実相だろうと思いがちです。けれど、そうも一概に言い切れないことが多いのです。何か紛争が起こりますと、現状の解釈について意見が噛み合わないことがあります。甲論乙駁議論は果てしなく続きます。物事の真実の姿はただ一つしかありませんのに……。

そこで、言霊によって物事の名前を付ける意味の大切さというものが、浮かび上ってくることになります。例えば次のようになります。

六〇四年、聖徳太子が作った十七条の憲法についてみてみましょう。その中に「和を以て貴しとなす」とあります。なにげなく読めば、「仲良しなことが大切だ」ぐらいにしか受け取れません。「そんなことくらい、当たり前じゃないか」ということになります。しかし、それなら「和」とは何だということになると、実際の世の中ではなかなか難しいことになるのではないでしょうか。このことを言霊ワの立場からみますと、議論の余地のない決定的な意味が出てくることになります。

ワという音一字で示される言葉を辞書で拾ってみてください。あまり多くはありません。



和・輪、その他、吾に対する汝ぐらいです。音図上で考えますと、アは純粋主観であり物事の発端で、ワは純粋客観で物事の結末ともなります。

輪○とは、円状のある点から二つの反対方向に別れていき、やがて究極的にまた一点において一致することです（図参照）。

ここに仲のいい二人の友達がいました。ある時、二人の間に利害の対立する問題が起こりました。二人はとことん議論をしました。意見はどうしても噛み合いません。それどころか、議論すればするほど利害の対立が深いことが明らかになるばかりです。もう絶望です……。その時、友情が蘇ったのでした。二人のお互いに見つめ合った目と目に笑いがこぼれたのです。それからの話し合いはスムーズでした。どうしたらお互いにとって最良の道かの結論はすぐ出ました。友情の輪は以前にもましてかたく結ばれたのでした。

これが初めの一点から一旦別れて、やがて究極で結ばれる輪（ワ・和）の完成です。この意味の輪が、真の「和」であるのです。このように自分の心の中で言霊ワを知った人は、いつでもその心は和でいられるわけです。口角泡を飛ばして議論をしていても、その人の心は「和」なのです。これが言霊ワの意味内容であります。言霊ワを知った人は、心は出発点から和で始まり、常に和なのです。ある主義者が絶叫する「我々は平和を闘いとろう」などという言葉が

いかに空虚で平和の心からかけ離れたものであることか、お分かりいただけるでありましょう。

例を挙げてお話しましたように、五十音の言霊はそれぞれ人の心の中に占める決定的な意味と内容を持っておりますので、その言霊の結び合わせで作られた物事の名前は、その名前でなければならない決定的な内容であることもご了解いただけるものと思います。私たちの日本語の名前とはそういう立場から付けられたものなのです。このことを弘法大師は「声字即実相」といったのでした。そのようにして物事に名を付けること、またその限りない発展と伝承が私たち日本文化の伝統なのであります。

和ということ

前項のお話にちなんで、現代の世相について、言霊学の立場からの感想を一つ申し上げることにしましょう。

近頃は結婚式が大層派手やかになってきました。筆者など、たまに招かれて披露宴に出席しますと、その豪華さに目を見張る思いがします。結婚式が若いカップルの新しい人生の門出として派手になるのは別に悪いことではありませんが、ただ残念に思われるのは、結婚式が豪華になっていくのに正比例するかのように、夫婦の離婚が増えていることです。大勢の人々から祝福されて希望の門出をしたはずのカップルの行き着いた先が気まずい別れ話に終わるとは、何とも情ないように思われるのです。離婚の原因はどこにあるのでしょうか。

離婚の原因の一つに性格の不一致というのがあります。離婚の理由を尋ねますと「お互いとことん話し合ったのです。彼（彼女）の言い分はよく分かりましたし、その言い分がどんな根拠から出てくるかも分かりました。その結果どうしても意見が合わないということになったのです。性格の不一致です」という答えが返ってきます。

そこで、性格の不一致とはどういうことなのかを考えてみましょう。

前にもお話しましたように、人間には生来五つの性能が与えられています。言霊学はその五つの性能を五つの母音で表します。言霊ウ（五官感覚による欲望）、オ（経験と経験との関連を求める経験知）、ア（感情）、エ（実践智）、イ（創造意志）の五つの性能です。

「彼（彼女）のいうことは分かった。意見はどうしても合わない、性格の不一致だ」ということは、お互いの行為をそれぞれの経験知（オ）で解釈した判断なのです。そしてその判断の相違がお互いの感情（ア）の縺れをも引き起こしたのです。さらにお互いの心の断絶を決定的にするのは、そのカップルのそれぞれが「経験知による判断が人間の持っている性能の最高のものだ」と思い込んでいることなのです。そう判断した以上、断絶は決定的となり、愛情はまったく冷え込んでいくことは当然であります。

お互いの認識が断絶して愛情が持てなくなれば、双方の関心は外に向かいます。離婚して、お互いに失った夢を別の人生にかけなければなりません。離婚は避けられないという結論となりましょう。

性格の不一致ということを以上のように聞きますと、筆者はふと考えるのです。元々生まれや育った環境も全く違った二人が結婚したのですから、意見も関心事も違っているのが当たり前なのです。その相違した人生の持主同士が愛情を感じ合って結婚したのです。性格の不一致

は、結婚当初から二人が死ぬまで存在するのではないでしょうか。そこに人間の生来与えられている第四、第五の知恵があることを、しっかりと認識する必要が起こってくるのです。言霊エの実践智と言霊イの創造意志の二つです。

実践智エとは欲望ウ・経験知オ・感情アの三つの性能を今・ここでどのようにコントロールしたら相手にも自分にも明るい希望の将来を創れるかを選ぶ人間の能力です。経験知を知識というなら、この実践智は創造の知恵と呼ぶべきものでしょう。

夫婦の間で何か気まずいことが起こると、お互いに今までの人生で蓄えた経験知を動員して、相手の、そして自分の心の分析をします。それで納得すればよいのですが、どうしても納得することが出来ない時、果てしない分析が心の中に次から次へと起こります。そしてジレンマが起こり、どうしてよいか分からなくなります。

相手と自分の心に関する知識は多ければ多いほど良いでしょう。ただその知識が人間ただ一つの知識ではなく、もう一つ、その知識や感情をコントロールして、さらに心豊かな生活を確実に創造していく実践智をも授かっていることに目を向けてはいかがでしょうか。

心豊かな生活を楽しむためには、お互いに知識を豊富にしていくことが必要です。と同時に、知識が豊かになれば夫婦であるお互い同士観察眼も鋭くなるのですから、その観察の判断をコントロールする知恵（言霊エ）も豊かに大きなものになっていかなければならないでしょう。

そうしないと、相手に失望を感ぜざるを得なくなるのです。

人間の持って生まれた性能は、あれもしたい、これもしたいという欲望（ウ）や、こうすればああなる、ああすればこういう結果となるということを知る経験的知識（オ）、人を愛したり憎んだりする感情（ア）ばかりでなく、この三つの性能をコントロールして、より心豊かでより深い愛情を育んでいく家庭を創造して行く実践智（エ）と、それを頑張って可能にする創造意志（イ）もあるのだということを言霊学は教えてくれています。

夫婦の仲がもう駄目だという断絶を感じて、お互い別離して第二の門出に希望をつなぐのも確かに一つの道です。けれど「断絶」と感じた時、勇気を奮い起こして、断絶の向こうに今までの人生で経験したことのない深い人生の喜びの境地が待っていてくれることを願って、お互いに自分の内部に踏み入っていく道もあるのだ、ということを知ることも必要なのではないでしょうか。自分の実践智と意志によって家庭の中に作り出していくパラダイスが、そこに約束されるのです。

筆者は結婚式に招かれ、披露宴の席でお祝いの言葉を求められますと、人間に与えられながら、現代人の常識からは正当なお墨付きを十分に与えられていない人間天与の二つの性能――創造意志と実践智――について砕けた調子でお話し、新郎新婦の新しい門出の餞（はなむ）けの言葉にしています。

そして餞けの最後に「夫婦間のどんな危機も乗り越えてさらに楽しい生活を築く創造の知恵が、人間には必ず授かっていることを確信して、いつも鴛の鳴く声のように楽しい溌剌とした家庭を作ってください」と結んでいます。

ちなみに鴛の語源は「憂(う)くいず」（憂えることなし）だそうであります。

あおによし――辞書に語義不詳とあります。アは感情の宇宙、宗教・芸術の世界。オは経験知の宇宙、学問の世界。奈良時代は宗教・芸術と学問の華が咲いた時代でありましたので、アとオに良い奈良の意で奈良の枕言葉となりました。

第十章　現代と言霊学

言霊学は数千年前の大昔に発見された日本独特の学問です。それもあって、今まで昔の物事と言霊との関係に多くの紙面を費やしてきました。そこで、言霊学は昔の回顧の学問かと思われる方も多いかも知れませんが、とんでもありません。言霊学は、私たち日本人が日常使っている日本語に含まれている人間の心と言葉に関する学問なのです。

言霊学は現代の日本と世界が直面している幾多の難問を、根底から解決する頼もしいヒントを提供してくれます。そのことをお知らせするのが、この書の主な目的なのです。試みにその数項目を取り上げてみました。多くの方々が今日の懸案の解決に自信をお持ちくださることを願っています。

大脳生理学と言霊

言霊に関連した話が、今まで昔のことに偏り過ぎた嫌いがあります。この辺で、極めて現代的な事柄と言霊との関係についてのお話をすることにしましょう。

まずは近年急速に研究が進んだといわれる、大脳生理学と言霊との関係を取り上げることにします。と言いますのは、もう十数年も前、一度読んだことのある大脳生理学の本を最近再び熟読する機会がありました。その本というのは『日本人の脳』（角田忠信氏著、大修館書店一九七八年二月初版発行）であります。本を読んでいくうちに、その研究内容と角田氏の日本人の本質に対する洞察の深さにすっかり心を引き付けられてしまいました。それは、この研究によって明らかにされた日本人の脳の特異性と言霊の学問とが、精神生命の深いところで密接な関係のあることに気付いたからであります。

大脳に関する極めて科学的な研究と、日本語の原典である言霊の学問とが、どんなところで関係を持つことになるのかをお話します。

まず角田氏の『日本人の脳』の中の一部を引用しますと――

「人間の大脳半球は解剖的には左右が対称的に見えるが、機能的には著しい差があり、そのうち最も顕著なものは言語の局在ということであろう。言語機能が大多数の人では左の脳にある……」

角田氏の研究の全部を引用・紹介することは不可能なので、文章を要約することをお許しいただくと次のようになります。

人間の大脳は形の上では左右一対で対称的になっているが、左右の脳が取り扱う対象はそれぞれ分担が違っていて、欧米の研究によれば脳の左半球には科学技術的なものの考え方を支えるような合理的分析的思考、言語、計算などの中枢があり、右半球には芸術や宗教的心情の基盤となるような直感的・総合的・非言語的な認識の中枢がある。……

欧米人は左の脳で言語（特に子音を含む音節単位の母音）、数計算を取り扱い、右の脳で音楽、機械音、母音、自然の風の音、虫の声などに対応すると考えられた。……

それゆえ、欧米先進国は左脳主導の文化（科学・産業）が発達し、後進的第三世界では右脳主導の文化（宗教・芸術）が形成されてきたということが出来る。そして日本は先進国であるから当然欧米型であろうと思われていた。……

ところが角田氏の研究によれば、日本人について実験してみると、左右の脳の分担の仕事に

欧米型と著しい相違が発見されたという。……

日本人の左脳は論理、数学などの西洋的ロジックに加えて、一音一音の母音や、情緒的・感情的な自然界にある音（動物の鳴声や小川のせせらぎ、風や葉の音）から邦楽器音まで含んでおり、まさに日本人の心を表すようなユニークな分担となっている。そして日本人の右の脳は「もの」で表される西洋楽器や機械音などに限られる。……

このような日本人の脳の分担の欧米人との相違は、肉体的遺伝のためではなく、全く日本語そのものに原因があることが証明されているという。（言い換えると、血統的な日本人だからそうなのではなく、生まれてから人格形成までの期間、日本語を基調として育ったか否かで、脳の分担が決定される）……

先進国の中では、日本人だけが異質な脳のメカニズムを持っていて、朝鮮・東南アジア諸国・インド、香港の中国人などは完全に西欧人と同じ脳のパターンをしていることが分かってきた。……

以上、角田氏の大脳生理学の論文を大変短く重点的に要約してみました。要約に間違いがあればご勘弁願いたいと思います。さて右の角田氏の論旨を読まれた方は、少なくとも次に挙げる二つの点について疑問をお持ちになるのではないでしょうか。

その第一は、左と右の脳の分担の優位性の点で同じパターンを持つ先進国と第三世界の人々において、西欧先進国は左脳主導の科学・技術的な文化、他方の第三世界（主に東洋）は右脳主導の情緒的な宗教・芸術的文化という両極端の文化に分かれたのは何故なのであろうか、という疑問であります。角田氏もこの疑問に触れて著書の中で「この点は今後研究すべき重大な課題であろう」と言っています。

もう一つの疑問は、日本人だけが何故西欧型と異質の脳のパターンを持っているのか、そのような脳の分担に重大な相違をもたらす日本語とは、どんな本質を持っているのであろうかということであります。

この本では第一の疑問の解答はまたの機会に譲り、第一の疑問を解く鍵となります第二の疑問だけを取り上げることにします。日本人だけが西欧型とは違った脳のパターンを持っているという事実をもたらした日本語とは、どんな本質を持っているのかという点についてです。

左と右の脳の分担のパターンで西欧型と日本型との最も大きな違いは、西欧型が右脳で取り扱う母音や自然の川の音、虫の声などを日本型では言語脳である左脳が分担するということです。

この点に関して角田氏は次のように言っています。

「日本語の母音が意味のある単語であること、また単語でなくとも『あ、そうか』の「あ」、

『え、ほんと』の「え」、のように日常頻繁に使われる有意の語として用いられることが、母音を子音と等価の言語音として言語半球（左脳）で処理する最も有力な原因であると考える」と。

西欧型が右脳で処理する母音を、日本型が左脳で取り扱う原因がそうだとしたら、子音でも母音でもない自然界の小川のせせらぎ、風の音、虫の鳴き声まで、日本型が左脳で処理する理由は何なのでしょうか。角田氏はさらに言います――

「日本語の母音あ・い・う・え・お（唖・胃・鵜・江・尾等）はみんな意味を持っている。……それが大和言葉として何処まで遡るか分からないのですが、日本語の母音の特質が原点にあって、多くの自然音も言葉の方の左脳に取り入れてしまうのです」と。（――線は引用者）

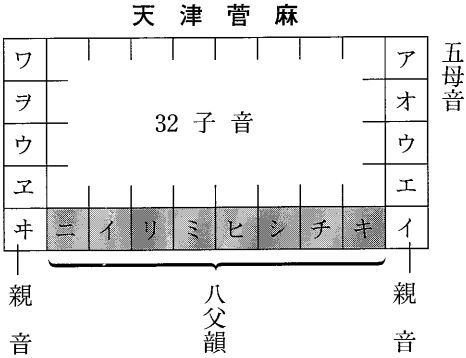
角田氏のこの洞察は誠に素晴らしい。氏の言葉にあるように、日本語が大和言葉としてどこまでもどこまでも遡って行き、その大和言葉が作られた時点に行き着いた時、そこに五つの母音はもちろんのこと、日本語全体の原典であるアイウエオ五十音言霊の学問が存在しているのです。

日本人が言語脳である大脳の左半球で、西欧型の言語や数理的なものばかりでなく、母音も、風の音も、虫の音も、自然界に普通に存在しているすべての音を処理するという日本型の特異性の原因を、日本語が作られる法則の立場から言霊学は明瞭に説明してくれます。

近年の科学である大脳生理学が発見した事実と、数千年以前日本語が作られる原典となった

言霊の学とがそこでドッキングすることが確認されることとなります。

まず西欧型が右脳で処理し、日本型が左脳の言語脳で取り扱うとされる母音について考えてみましょう。西欧型の大脳が音楽音・機械音として捉えるアイウエオの母音を、日本型は言語として取り入れるのは何故なのでしょうか。それは日本語の母音が本来どんな意味を持っているかによるでしょう。



具体的な音(おん)で考えてみましょう。母音を二音連ねて「あお」と言えば、普通誰しも「青い色」のことを頭の中にイメージとして浮かべるでしょう。けれど二つの音を切り離して「あ」と「お」と一音ずつ聞くと、角田氏の文章にあったように「唖」と「尾（動物の尾）」と聞く人より、「あ」と「お」の意味内容のない単なる一音として聞く人の方が多いのではないでしょうか。さらに五つの母音を一つ一つ切り離して「あ・い・う・え・お」と発音しますと、誰しもその一音一音に具体的なイメージを持つ人は少ないはずです。

実際に現代では日本語の五つの母音の一つ一つは、特別の場合のほかは意味・内容を持たないものと思われているよう

です。けれど日本語が初めて作られた大昔では、アイウエオの五つの母音のそれぞれは一定の厳密な意味・内容を持っていました。五つの母音だけではありません。アイウエオ五十音の全部がそれぞれ特定の意味内容を持った音であって、その五十音で精神的宇宙を構成していることが分かっていました。そして五十音の一つ一つを言霊と呼んだのです。

それでは五つの母音は、それぞれどんな意味内容を持っているのでしょうか。前ページの図をご覧ください。

図は、人がこの世に生まれた時にすでに授かっている心の構造を表した天津菅麻（あまつすがそ）という音図です。その心を構成している要素は全部で五十個ありますが、その中で図に書き入れました十八個（ウは重複）が心の先天要素です。

今まで、この書の中でたびたび説明してきたことですが、先天要素とは人の心がまだ現象として現れる以前の、意識にのぼる前の働きを受け持つ能力の構造のことであります。その先天構造を組織している十七個の要素とは、五つの母音、四つの半母音、八つの父韻の合計です。

この先天であります十七音のうち、アイウエオ五母音とは何を表しているのでしょうか。前にも説明を繰り返したことですが、改めてお話しますと、物事の現象が現れてくる大元（おおもと）の宇宙、言い換えますとそれ自体は決して現象として現れることはありませんが、そこから色々な現象が現れてくる宇宙を母音で表したのです。

目を開いて大空を仰いで見ましょう。青い空があります。白い雲が浮んでいます。さらにその先、遠くには色々な星があり、星雲や銀河系があるはずです。と同時に、それらを見ている人間の五官感覚の意識があることも知らなければなりません。青い空がある、白い雲が浮んでいるという、見る人の意識現象が出てくる元の心の宇宙があります。私たちが日頃使っている日本語を作った原理・法則であります言霊の学問は、その五官感覚が出てくる元の宇宙に母音のウという一音を名付けたのでした。言霊ウの確定です。

ただ宇宙といえば、眼前に展開している地球や太陽を含んだ広い宇宙のことを考えます。けれど人間の持って生まれた性能は五官感覚の世界に限られたわけではありません。宇宙の中で起こるさまざまな現象の法則を考える学問的世界もあり、また五官感覚とも学問とも違う感情の世界もあります。

このようにわが日本人の祖先は、人間に授かった性能に従って人の心が住む宇宙が五段階であることを確かめ、それぞれの宇宙にアイウエオの五母音を当てはめたのでした。ウ（五官感覚による欲望の宇宙）、オ（経験知）、ア（感情）、エ（実践智）、イ（意志法則）の五段階の宇宙です。そしてこれ以外の宇宙はありません。

以上、日本語の中の母音の一音一音が持つ意味・内容を説明しました。そこでもうお分かりのことと思いますが、日本語の母音の一音一音は単なる「音」なのではなく、それぞれ確定し

た意味内容を持った立派な言葉なのです。大昔の日本人はただ一音「ア」とか「ウ」といえば、それが何であるか明瞭に知っていました。日本語の母音はそれぞれ立派な言葉なのです。

これで西欧型と違い日本型の大脳パターンが、母音の一音一音を左脳の言語脳で処理することの理由が明らかになりました。

さて、次は母音だけでなく、自然界の風の音、葉のさやぎ、小川のせせらぎの音まで日本型が言語脳で処理する理由です。

日本語の母音は今お話しましたように、それ自体は決して現象として現れることのない人間の心の先天構造の中の音でありますが、風の音、虫の音、川のせせらぎなどは立派な現象音です。日本型は何故これらの音をも言語脳で処理するのでしょうか。

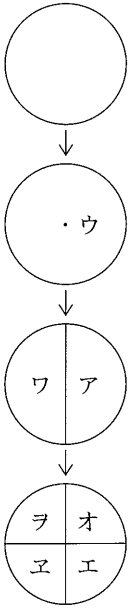
話があまり長く、煩雑になるといけませんので簡単に説明しましょう。

日本語でアイウエオの母音といえば、物を見たり聞いたりしている自分自身であること、そのため日本型は母音を言語脳で扱うことは検討しました。しかし風の音・小川のせせらぎなどは自分に対しているものです。私は聞く者であり、風の音は聞かれるものです。言霊で言えば私は母音アで、風の音は半母音ワであります。私自身でない風の音を何故言葉として聞くのでしょうか。そこに日本語の、そして日本語で育った日本人の世界でただ一つの特異性があるのです。

人が野原を歩いているとします。すると小川のほとりに出ました。さらさらと川の音が聞えてきました。「何と心地よい音なんだろう」と思います。「どうしてこんなに気持ちよい音なんだろう」と考えます。物事は普通ここから始まるように思われています。

しかし図をご覧ください。前にお話したことがありますが、心に何も起こっていない時、言い換えますと心の先天構造から見ますと、「何」「何故」という考えが始まる瞬間が物事の初めなのではありません。その前にまず何もない宇宙に、何か分からないが始まりの意識（言霊ウ）が起こるのです。それが「何だ」「何故だ」と思う瞬間に、その何か分からないが存在するものが聞く私（ア）と聞かれる川の音（ワ）に分かれます。

この心の先天構造のメカニズムを一音一音の言葉として受け取り、それを法則に組み立てて作られたのが日本の大和言葉なのであります。その心の構造をしっかりと受けとめて作られた言葉は、世界でただ一つ、日本語だけです。



自分から見て外で起こる自然の現象の宇宙が、自我という内なる宇宙と、実はもともと同一のものである、ということを知った上で作られた言葉を使っている日本人は、自然の中の音である川の音・虫や鳥の鳴き声などを、外界から聞えてくる声として

聞くと同時に、その音はまた無意識にではありますが、自らの自我の宇宙の音としても聞いていることになります。

例を挙げましょう。芭蕉の有名な俳句に――

古池や　蛙とびこむ　水の音

があります。光景としては「古い池があって、蛙がとびこんでポチャンと音を立てた」というだけの何の変哲もないものです。ところが、この十七音の句を上から下まで言葉に出して読んでみますと、その光景が眼前に浮ぶと同時に、そのポチャンという音の中に自分の存在が吸収されてしまい、自分が音を聞くのでもなく、音が自分に聞かれるのでもない、音と自分が一つのものになってしまいます。日本語にはこういう力があります。自然の発する音も日本語においては立派な言葉なのです。

日本人にとっては、窓の外で鳴く虫の音も、それを部屋の中で聞いている自分も、同じ一つの宇宙の中にある現象だと思わせてくれるものを私たちの日本語は持っているのです。それが言葉の単位であると同時に、心の単位でもある言霊の成せる業なのであります。

以上が日本型が自然界に起こる音を言語脳で処理する理由です。反対に起きてきた現象を、それは何か、何故に、という主体と客体が分かれたところから思考するための言語である日本語以外の言語は、自然界の色々な音を音楽として聞くことはあっても、言語として聞くことは

ないわけです。自分の生命の本体は宇宙そのものなのだ、ということをしっかりと認識し、その上で心の構造の示すままに作られた日本語は、世界の言語の中で最も特異な言語なのであります。

その日本語の持つ特異性を、大脳生理学が見事に証明したということが出来ましょう。

教育と言霊

教育の荒廃・貧困が叫ばれてから、もう永い年月が経ちます。教育制度の改革の論議は毎年のように繰り返されていますし、大学の入学試験のやり方はめまぐるしいばかりに変わります。迷惑するのは受験生ばかり、ということになりかねません。社会の有識者を集めた審議会などがその都度開かれているようですが、決定的な妙案は出てこないのが実情のようです。

そこでご参考までに言霊の学問の立場から、極めてユニークな日本の教育の見直しの方法を提供してみることにしましょう。

教育制度審議会の委員の人々を見ますと、いずれもそれぞれの社会の錚々（そうそう）たる人物を網羅していることが分かります。けれどどうしてうまくいかないのでしょう。その理由は明瞭です。世の中のそれぞれの分野のいかに立派な人の意見でも、その人の個人的な経験に基づいた人生観から打ち出された教育論だからです。人によって意見が異なります。

前にも申し上げたことなのですが、どんな立派な人の意見でも、それが個人の経験から出された意見である限り、その人たちの意見の最大公約数としてまとめられた結論は、人間性とい

うものの一部の真理ではあっても、人間性全体をカバー出来る真理ではないということです。

現在の社会で、「人間とはそも何であるか」の質問に真実を答え得る人は一人もいない、と言っても過言ではないでしょう。明治時代に「人生不可解なり」と言って華厳滝で自殺した藤村操の言葉は、今でも通用しているのです。

しかし事態は変わってきました。「人間とは何か」に百パーセント答えて余すところのない日本固有の法則・原理が世の中に現れてきたのです。人間の精神の構造とその動き方を解明し尽くしたアイウエオ五十音言霊の原理です。

この原理によれば人間は生まれた時から天与の五つの性能を持っています。五官感覚による欲望・経験知・感情・実践智・創造意志の五段階層の性能です。これをウオアエイの五つの母音で表します。それぞれの界層の性能から心の現象が現れ出てくるのに法則があり、キシチヒミリイニの八つの父韻の展開でこれを示します。そのようにして現れ出てくる心の現象の単位を子音三十二で表し、すべて合計五十個の言霊の活動として心を捉えました。人間の心はこの五十音の言霊で全部で、これ以外の人間の心はありません。

この原理は数千年前の大昔に発見完成され、これによって日本の大和言葉が作られ、人間社会の精神文明を築いたのですが、今から約三千年前にゆえあって世の中から隠され、明治以後世の中に再現されてきたものです。

「人間とは何か」の精神面からの解明が出来ているのですから、現在、一応の完成が予想される物質科学と並んで、人間の教育は迷うことなく実施される時代がきたといってよいのではないでしょうか。この観点から取り敢えずの提言を次に二、三簡単に書き記すことにしましょう。

まず第一に、教育のよって立つ視点を変えることであります。

今までの学校教育は、言霊学でいいますとウ（五官感覚・産業・経済）、オ（経験知・人文科学・物質科学）とア（感情・芸術・宗教）の三つの次元性能を重視して、残りのエ（実践智・道徳・政治）とイ（創造意志・言葉・言霊）の二つの次元をほとんど無視してきました。前者である三つのうちのア（感情）についても、宗教教育は特定の宗教についての教育を禁止することから、宗教の心そのものをも教育の場から外してしまいました。

すでに、神や仏に対する人間の態度に「拝(おが)む」と「斎(いつ)く」の二様があることをお話しました。幼児から青年になる間に、自分というものの真の本体が神であり、仏であり、宇宙そのものであることを、はっきりと考えさせる教育に戻ることです。自我意識の成長を強調することもある時までは結構なことですが、その自我とは生まれてから身につけた経験・知識・習癖などであって、真の自分ではないのだ、ということをも合わせて知らす教育が必要です。自我意識というものは、ただそれだけでは砂上の楼閣、幻の意識に過ぎないものなのです。若い人は自分

自身の本体が神・仏・宇宙であることを意識することによって、人の心とは光そのものなのだということに気が付くでしょう。それによって若い人の心は幾多の束縛から解放されて、明るい希望に満ちたものになることでしょう。

こう書きましても、筆者がある特定の宗教信仰を勧めているのではないことは、お分かりいただけると思います。人間の根本性能として、宗教や芸術の心の起こってくる宇宙（言霊ア）が存在することを教育の上で確認することなのですから。

自我の本体の存在に気付く時、若い人は言霊エ（実践智）によって言霊ウオアの三性能がコントロールされる、という人間の心のメカニズムを知ることになります。「大道廃れて仁義あり」人間が何であるかの原理が世の中から隠されてしまって、初めて「かくすべし」「かくすべからず」式の道徳や戒律が人間社会の道徳と思われるようになりました。今はその「べし」が若い人たちから総反撃を受けている時代です。「べし」の道徳は否定されて、それに代るものが確立されていません。

外から強制される道徳ではなく、人間の心の構造（言霊イ）とその構造に従って自分の人生を創造して行く法則（言霊エ）の能力が生まれながらに与えられていることを知り、また、その能力を知ることによって、人は初めて自主性ある人生をつくることが出来ます。それは若い人にとって何物よりも尊い魂の光となり、人生の生き甲斐を感じることとなりましょう。

次は、今行われている文字についての教育の見直しです。

子供は、家庭・幼稚園・小学校……で文字を教えられます。現在はまず平仮名を教え、次に漢字、片仮名の順だそうです。この順序を片仮名、漢字・平仮名の順に改めることです。

「文字の覚える順など大した影響はないのでは」とお思いになるかも知れません。しかしこれは大きな問題なのです。

男女の結合によって生命が母親の胎内に宿ってから呱々の声を上げるまでの十ヵ月と十日の間に、人は遠い大昔の生命の誕生から現在の人間に進化するまでの長い年月の進化段階を、母親の胎内で経験することは、生理学でよくいわれることです。同様に、人は幼児から大人になるまでに、人類の文化の始まりから今日までの知的進化をなぞらって知識を修得していく必要があります。

その知識修得の基礎の一つに文字があります。西暦三、四世紀頃、日本に漢字が渡来するまで、日本には文字がなかったというのが歴史学の通説だそうです。けれどこれは間違いです。神代神名(かな)文字という立派な文字がありました。竹内古文書その他に多くの神代文字が発見されています。その中には言霊の原理を図形化し、その各一部分をとって文字としたもの、そのほか、象形文字、竜形文字など、言霊の原理を知った上でみると、その真実性がよく分かるものが存在します。

文字教育はいかにあるべきか。まず最初に片仮名文字を教え、次に漢字、平仮名の順にするべきです。現在、新聞・雑誌その他で片仮名の使用はごく一部に限られていることを考慮するとしても、平仮名・漢字より先に片仮名を短時日ではあっても教えることが肝要です。

この文字修得の順序を無視しますと、人間の知識修得能力の中枢に混乱が生じ、若者の知的成長に悪影響を与えます。こう申し上げた観点から社会をご覧になってください。この影響から起こる若者の思考秩序の混乱は、社会相に色々な現象となって現れていることにお気付きになるでありましょう。

第三番目に歴史教育についてです。

蟹は甲羅（こうら）に似せて穴を掘る、といわれます。歴史書を書く場合、その歴史は著者の主観に左右されがちです。前述しましたように、人間には五つの母音ウオアエイの言霊で示される五つの性能が与えられています。ですから歴史を書く場合、この五つの性能の総合の立場からなされなければなりません。けれど現代人の意識はウ（欲望）、オ（学問）、ア（感情）の三つの次元にしか向いていません。残りの二つ、エ（実践智）とイ（創造意志・言葉）は無視されてしまっています。そこに現代の歴史書の偏見が起こってくることになります。

第二次世界大戦に負けるまでの日本の歴史は、あまりに神懸かり的で合理性に欠け、近代歴史学の批判に耐え得るものではありませんでした。戦後これに変わって登場した「実証的」と

称する現代の歴史書は、戦前の歴史観を否定し、放棄するのに急ぐあまり、小児病的推理小説化した観があります。数年前まで、『古事記』の編纂者の太安萬侶は架空の人物とされていました。それが安萬侶の名前が書かれた木簡（もっかん）が発掘され、実在が実証されました。にもかかわらず、太安萬侶をめぐる当時の歴史的事情が改めて見直されたとは、未だに聞いていません。偏見だといわれる一つの例であります。

その結果は、戦後の日本人の意識から、何千年の間続いてきた自分たちの祖先の足跡とその伝統を、完全に近いまでに抹殺してしまうこととなりました。若者の非行化・無気力化の最大の原因がここにあるようです。どんな過去であろうとも、それを実証する文献・遺跡遺物が今までに見付かっていないという理由からだけで、その存在そのものを全部架空のものと断じ、抹殺してしまうということは暴論です。これでは日本の現在というものが中途半端な茎と花があって、根が付いていない根なし草か、糸の切れた奴凧となってしまうではありませんか。

現代の日本人ほど世界中で無国籍化された国民、民族は他には見当たらないのではないでしょうか。

とは言いましても、筆者は戦争前のように日本人の優秀さを世界に向かって振り回せと主張しているのではありません。幸いに日本の言葉を作った原典であるアイウエオ五十音言霊の原理が完全な姿でこの世の中に蘇ってきたのです。歴史を実証するものは古文献や発掘される遺

跡、考古学的遺物ばかりではなく、私たち日本人が日頃使っている日本語の中に秘められた人類の精神的な宝、言霊の原理があることを認識していただきたいものです。

遺跡や遺物は言葉を話してくれません。そこに考古学的な比較・推理・推論を必要とします。けれど、言葉とそれを作った原理という観点に立ってみますと、日本の過去の歴史と、日本と各国との関係の歴史を考える道が自ずから開けてきます。言葉は生きている遺跡ということが出来ましょう。

日本を考える人々の衆知を集めて、日本語の中にあるアイウエオ五十音言霊の原理に則って、日本並びに世界の真正の歴史を編纂する会を作ることを提唱したいと思うのです。

重ねてお話しましょう。人間には生まれた時から授かっている五つの性能があります。ですから、人類や日本人の歴史の創造はその五つの性能の活動によって行われています。にもかかわらず、現代の歴史書は五つの性能のうちの三つ、ウオアの性能だけの観点から書かれたもので、戦前の神懸かり的な歴史と同様に偏見に満ちています。

人間の持つ五つの全性能の自覚の下に日本と世界の歴史が新しく編纂されるならば、現在の歴史書からは想像もつかないほどスケールの大きい、公正で謙虚でロマンに満ちた歴史が日本人や全世界の人々の目を醒すこととなるでしょう。次の時代を担う若い人々に対して、これ以上の贈物はありません。

コンピューターと言霊

この本のページも残り少なくなりました。時代の最先端の技術と言霊との関係についてもう一つお話をしましょう。

最近のコンピューターの研究の進歩は目覚ましいものがあります。第五世代コンピューター、第六世代コンピューター……と人間の頭脳にとって代わる高度な機能を持つコンピューターの開発が試みられていると聞いています。人間の心の現象は千差万別、ほとんど無限に近いものですから、その心を機能的にコンピューターで捉えるのもさぞ難しい作業なのであろうと研究者のご苦労が分かるような気がします。けれど人間の好奇心も留まることを知りませんから、人間の頭脳の働きに近いコンピューターの開発に今後も各国ともしのぎを削ることでしょう。そこでコンピューターと言霊との関連の可能性について感想を述べてみることにします。

筆者はコンピューターに関する知識は先ず零（ゼロ）に近いと言っていいでしょう。普通の数の数え方が十進法であるのに、コンピューターは二進法であり、零か一かで、それを電気のプラスとマイナスで表して行くということくらいしか知りません。それでもコンピューターで人間の頭

脳の働きを再現するということは、人間の心の動きを数に置き換えていくと解釈して間違いないのではないでしょうか。

人の心は気まぐれです。昨日まで甘いものが好きだった人が、ある日突然、塩辛い物が好きになることだってあります。過去のデータの範囲内で動くだけのものならその予測も可能でしょうが、今・ここでどの方向に動くかという人間の実践活動の予測を、どのように捉えることが出来るのでしょうか。その上、今までの心理学・哲学・論理学、その他の学問によっても、人間の心の構造とその動き方についての明確な理論が出来上っているわけではないのです。人間の頭脳機能のコンピューター化のためには、その前に人間の心自体を正確に捉えることが必要のように思われます。

そこでアイウエオ五十音言霊学からの提言です。

私たち日本人が、日頃使っている日本語を形成しているアイウエオ五十音言霊の原理によりますと、人間の心はその五十音一音一音の五十個の要素から構成されています。人間の心は母音ウ（五官感覚による欲望、そこから出て来る社会的現象は産業・経済）、オ（経験知、科学）、ア（感情・宗教・芸術）、エ（実践智・政治・道徳）、イ（創造意志・言葉・言霊）の五段階の次元の界層から成っています。

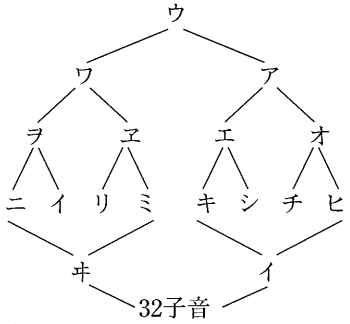
次元界層といいますのは、五段階の世界が単に積み重なっているのではなく、最初の段階で

ある言霊ウの世界が全部終わったところで、その全部を含んで次の段階である第二のオの世界が始まり、その第二段階が全部終了したところで、第一と第二の全部を含んで次の第三段階のアの世界が始まる……といった次元構造なのです。そしてアの次にエ、エの次にイの世界が展開し、イの現象が終了した時、人間の心はすべて網羅されたことになります。人間の心は五十音の言霊によって構成されており、それより多くも少なくもないのです。

言霊の原理は、人の心が五つの次元から成っている事を示すだけではありません。心の現象の主体である母音アイウエオのそれぞれから、どんな心の経過・手順を経て結末である半母音ワヲウヱヰのそれぞれに到達するかを創造意志の展開である八つの父韻キシチニヒミイリの配列によって示すことが出来ます。その上、この八つの父韻のそれぞれがいかなる動きをするのかも分かっているのです。

さらに人間の思考のうちの先天部分の構造（母音・半母音・父韻の十七言霊）

先天構造



半母音	父韻								母音
ヰ	ニ	イ	リ	ミ	ヒ	シ	チ	キ	イ
ヱ									エ
ワ			32子音						ア
ヲ									オ
ウ									ウ

も明白に示され、現象の最小単位である三十二の子音の内容も解明されています（図参照）。

こう説明してきますと、言霊は数によって人の心を、人の頭脳構造を捉えようとするハイテク・コンピューターの研究にとって相当な光明を与えることになるのではないでしょうか。

昔の人はさらにこれら言霊の動きを「数霊（かずたま）」として捉えてもいます。この数霊の原理も併せて参考にするならば、コンピューター研究は一段の進展をみること疑いありません。

重ねて強調しますと、この心の根本要素である五十音言霊を、事物の実相（真の姿）に沿って組み合せたのが私たちの日本語です。心の単位であると同時に、言葉の単位でもある言霊の原理によって直接に作られた言語は世界でただ一つ、日本語しか存在しません。究極のコンピューターと直結する言語は日本語である、ということが世界に認知される日もそう遠くはないことでしょう。

日本・東洋・西洋

夜明け前の浜辺に立って海を眺めている光景を想像してください。空には満天の星が瞬いています。月はすでに西に傾いて、今にも沈もうとしています。そして、東の空には太陽が未だ昇ってきません。この光景は、現在の日本と世界の精神の状況を思い出させます。星は西洋の精神を、月は東洋の精神を、そして太陽は日本の精神を表徴します。

ここ十年か二十年の間、日本を頂点とする東洋の各国は先進西洋諸国の科学技術を受け入れ、産業経済の面で欧米各国に追いつき追い越せと頑張り、今や完全に先進国を脅かすまでに成長しました。特に日本は、先進国の一員としてアメリカと肩を並べるほどの勢いです。しかし、このことは精神的に見ると、日本や東洋各国が従来のそれぞれの国民の持っていた指導精神を失い、西欧の精神が入り込んできたことを意味しています。今や日本のみならず、世界の人々の心をリードするのは欧米を先進とする西洋精神ということが出来ます。まさしく空には満天の星といった状況です。

それにひきかえ、何千年もの間、各国の人々の心を支えてきた東洋的な精神は、無くなって

はいないものの、表から裏へ引っ込んでしまいました。西洋の精神は科学技術の振興、産業の発展、生活の向上をもたらしましたが、良いことばかりではありません。各人の競争意識の激化、人心の荒廃、公害の発生の問題から、戦争軍備の超巨大化による人類破滅の可能性まで現実のものとなってしまいました。この現状に対して従来の東洋的な精神は、反発はするものの解決することが出来るほどの力はすでに失われています。日本の家庭の中においても、従来の儒教的・仏教的なものの考え方は過去の化石のように思われているのが現状です。これもまさしく月は西に傾いて沈まんとする寸前といえるでしょう。

昔から、日本人の精神を形づくってきたのは儒教・仏教、それに神道的なものであるといわれてきました。このうち儒教と仏教は外来の東洋的なものです。日本人独特のものではありません。わずかに神道が日本特有のものでありますが、日本人の心のどのようなところが神道的なのかということになると、はっきりしなくなります。その神道の信仰形式も、よくよく元を尋ねると、中国の儒教やインドの仏教の信仰形式を取り入れていることが多いのに気付くのです。それでは日本には日本独特のものなど存在しないのでしょうか。

いいえ、存在します。私たちが日常使っている日本語がそれです。そしてその日本語を作り出す原点となるアイウエオ五十音言霊学です。日本語が初めどのようにして作られたか、その法則は何か、その日本語の作られ方が西洋的なものと東洋的なものとでは、精神の上でどのよ

うに関係していくかを理解されるならば、日本的なものの素晴らしさとその将来性に、日本人自身、目を見張ることでありましょう。

さて、今世界で一世を風靡している西洋精神、西洋的なものの考え方について検討してみましょう。

昔から、特にルネッサンス以降西洋を流れる一貫した精神は、個人主義、民主主義、実証主義です。そのものの考え方は、まず眼で見、耳に聞くなどの五官感覚の意識から出発します。自分の感覚が捉えた事実からの出発です。

次にその種々の出来事の間の相互の関連性を求めます。どの点では関係があるが、その他では全然関連性はないといった具合です。その「どの点」という、関係する基盤となる言葉を概念と呼びます。二つ以上のものを概念によって結びつけていく考え方が西洋精神の基本です。

一人の人間がいます。その目の前に初めて経験する事実が起こります。その人は、それまでに蓄積した経験を総動員して眼前の事実が何であるかを考えます。起こった現象が今まで経験し、持っている概念の延長で理解されるものならば、直ちに了解されてことは終わります。しかし、今までの経験による概念の範囲外である場合、その延長だけでは理解は困難です。新しい事実を理解するためには、視点が変わらなければなりません。試行錯誤が始まります。そして今までの経験と新しい事実との関連性の視点が見つかった時、新しい概念で捉えることが出

来た時、理解は完了したことになります。

この思考の方法を正反合の弁証法といいます。今までの思考の体系が正とすれば、新しい経験の事実が反です。そして、相反した両経験を関係させる新しい視点で理解することが合というわけです。個人の精神の内部において経験を積み重ねていく人格の成長も、外部に物質の性質を探究する科学も、この正反合の弁証法の形をとって発展していきます。これが典型的な西洋精神ということが出来ましょう。

この正反合の弁証法的なものの考え方は三角形の図形で表されます。精神内の弁証法は△で、物質探究の弁証法は▽示されます。両方併せると✡のイスラエルの国章が出来るのも意味深いことです。西洋精神の根本構造を数で表しますと、以上のように三または六数となります。目の前に現れた現象を観察することから出発して、現象が出てくる大本の法則を探究するものの考え方では、必ず右のような形式となります。これが西洋精神の根本です。ただここで注目しなければならないのは、このものの考え方では、正反から合に至る過程にきちんとした法則が見極められていないことです。その過程は試行錯誤の繰り返しで、正反から合に行き着くまでは時の経過に委ねられます。マルクスが、資本主義経済において資本家と労働者の対立から最後に労働者側の勝利に終わる理論を立ててから長い年月が経ちました。その結果を見ないまま主義そのものが消え去ろうとしています。

次に東洋の精神について考えます。

従来の東洋のものの考え方は、西洋のそれとは逆に現象が起こる大本の法則を認め、その法則を押し広めていくことによって物事に対処しようとする考え方です。その根本の法則となるのは宗教や宗教哲学です。世界の四大宗教である仏教・儒教・キリスト教・マホメット教などは、すべて東洋地域の産物です。西洋の精神が目に見える後天的現象から出発して、現象の大本である先天の法則を目指して探究するのに反して、東洋の精神は先天法則から後天現象を捉えようとします。先天法則に自分をどれだけはめ込んでいけるかが努力の目標です。ですから、そこでは個人主義よりは全体主義が、民主主義よりは専制主義が、そして実証主義よりは教条主義が優位となります。また物質的というより精神的傾向が強くなります。そのために東洋の各民族は幾千年もの間、深い精神の平安・静寂を求め、貧困の極にあえいできたのでした。

右にお話した東洋の考え方を図形で表しますと、四または八を基本とした形となります。易経では八卦の「乾兌離震巽坎艮坤」として表しています。仏教では八種の正道である「正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定」として表しています。精神的なもの・形而上的なものは ⊞ で、物質的なもの・形而下的なものは ⊠ で、両方を併せて ⊠ の形で表します。キリスト教ではこの形をアダムの肋骨（あばらぼね）と呼んでいます。何故東洋の精神は四ないし八の数を基本とした図形で表されるのでしょうか。それは前にお話したように、東洋精神の出発点で

ある人間の心の先天構造の中に人間の根本となる知性が八種類（雌雄四種類）が存在するという基本的な認識があるからです。

右に挙げました二つのものの考え方は、人間が文明を創造していくための思考の二大典型です。人間が何かをしようとする場合、必ずこの二つの方法のうちのどちらかによって考えます。

西洋の精神は後天的な諸現象を観察し、その諸現象間の法則を研究することによって諸現象が起こる根元の真理を求めようとする帰納的方法です。逆に東洋精神は現象の先天的法則の存在を認めて、その法則を演繹的に適用することによって物事を処理しようとします。西洋は特殊から遡って一般を求め、東洋は一般を押し広めて特殊に対処します。一方は帰納法であり、他方は演繹法です。この二大精神は、ここ三千年の間、地球という土俵の上で決して融合することなく対立を続けてきました。

人が考える時には、必ず西洋的なものの考え方または東洋的なものの考え方のどちらかによっていると申しました。それなら、この文の最初に書きました日本精神の役割とはどう考えたらよいのでしょうか。日本人の生活感情に深く根づいた儒教や仏教は外来のものです。その他に日本人の心を形成してきたものといえばわずかに神道的なもの、万葉時代に見られる明き直き心といったようなものであります。しかし、それだけでは文明創造上の西洋・東洋の両精神に肩を並べることは出来ません。もし出来るというなら、それは国粋主義者の独りよがりに過

ぎないでしょう。従来日本的なものと日本人が考えてきたものから、先に挙げた西洋的なものと東洋的なものを差し引いた残りは、いくらも残らないことになります。しかし、当の日本人のほとんどが気が付いていないところに、西洋の精神と東洋の精神と肩を並べ少しもひけをとることのない文明創造上の重要な要素となる日本独特のものが存在するのです。それは何か。日本語です。そして、その日本語が作られた根本法則であるアイウエオ五十音言霊の原理です。

日本語とその根本となった法則がどんなにユニークなものだと告げられても、世界の文明創造上それほどの役割を果たし得ると思う人は少ないでしょう。そこで今まで何度か説明したことですが、改めて日本語とその語源となったアイウエオ五十音言霊の学についてお話することにしましょう。

私たち日本人の祖先は遠い昔、「人間には心がある」ということに強い関心を持ちました。大勢の人々の長い研究が続けられました。彼らの研究は、主に人間の心と言葉の関連に向けられました。その結果、人間の心は究極的に五十の要素で構成されていることが分かりました。彼らはその一つ一つの心の要素に、今私たちが使っている五十音の清音の単音を結び付けて、これを五十個の言霊と呼びました。言葉の最小の単位であると同時に、心の最小の単位でもあるものの意味で言霊です。

人間の心の中に漫然と五十個の言霊が散在しているのではありません。整然とした構造を持

っています。人間の心が動くけれど、言葉として発音される前（これを心の先天構造といいます）に十七の言霊があります。五つの母音言霊（アイウエオ）、四つの半母音言霊（ワヰヱヲ）、八つの父韻言霊（キシチヒミリイニ）、計十七の先天言霊です。この先天言霊が活動することによって言葉として発音される後天的要素三十二の子音言霊（タトヨツテヤユエケメ・クムスルソセホヘ・フモハヌ・ラサロレノネカマナコ）を生みます。それに言葉を文字化する要素（言霊ン）一つを加え、総計五十個の言霊です。人間の心はこれら五十個の言霊で構成されており、五十以上でも五十以下でもありません。

さらに私たちの祖先は五十個の言霊の動き方をも研究し、その動き方もちょうど五十通りあることを解明しました。五十個の言霊が五十通りに活動する、計百の原理・法則を完成させました。人間の一番深奥に存在する言霊の段階でみると、人間の心はこの百の原理・法則ですべてであり、これによって説明出来ない精神現象は存在しないということが分かったのでした。この百の原理をアイウエオ五十音言霊または単に布斗麻邇（ふとまに）と呼びます。

このアイウエオ五十音言霊の原理は心の究極の要素である五十個の言霊と、その五十個の言霊の典型的な動きの五十通りのパターン、計百の原理でありますから、人間のいかなる心の構造とその動きであっても、正確に言霊によって表現することが可能となります。ここ三千年の間、地球上の二大精神として互いに正反の立場にある西洋の帰納的思考方法も、また東洋の演

繹的な思考構造をも、言霊の原理はその心の究極要素である言霊とその動きとして明確に把握し、表現することが出来ます。

この本の第二章で触れました「五つの五十音図表」において取り上げました天津金木音図と赤球音図は、西洋的思考を音図化で表現したものであり、また宝音図は東洋的思考の構造を表したものなのです。音図のそれぞれの構造の説明は専門的となりますので、他の機会に譲ることにしますが、言霊の原理は西洋・東洋の精神構造を明らかにするだけでなく、その対立する両精神のどちらに組みすることもなく、その双方をコントロールして、人類全体の福祉を増進させる文明を創造する方法をも呈示することが出来ます。それが天津太祝詞音図というものです。

従来の西洋精神と東洋精神を、またその双方をコントロールして物心両文明協調の新文明創造の精神を五十音図によって表現出来るということは、一度言霊の原理をマスターした暁には、東西両精神の葛藤を協調に転じさせ、新しい時代の創造の責任とその舵取りが可能な人間の出現を約束することとなります。

日本人が日常使っている日本語の語源である五十音言霊の学問が、二千年という長い忘却の暗闇の中から不死鳥のごとく現代に蘇ってきました。日本人がこの言霊の学の重要性に気付くならば、日本語が本来その内容として秘めてきた英知と包容力という日本人独特の精神能力が

日本人の魂の中に蘇ってくるでしょう。そして従来決して融合することのなかった東洋の演繹的思考と西洋の帰納的思考の精神構造を言霊原理によって解明し、言霊の動きとして表現し、言霊の活用・操作によって融合、協力することを可能にするでしょう。

産業の発展と自然保護との問題、教育や精神頽廃の問題、大気汚染の問題等々、西洋的考えと東洋的考えの葛藤の中ではいかんともなし得ない人類の重大懸案を、言霊学は一つ一つ解決に導くヒントを確実に与えることとなります。そして日本人はその仕事の先頭に立つ役割を担うこととなりましょう。英知と寛容と創造力、それが日本人独特の能力なのです。

言霊の原理の自覚に基づく道徳と政治の行われる社会に、最高度に発達した物質科学の成果が加えられる時、人類は輝かしい世紀の時代を迎えることが出来るでしょう。

西洋と東洋の融和することのない両精神を、精神生命全体の立場から調和に導くことが出来る日本語の精神の立場を証明する数霊の数式があります。生命の根本要素である言霊の運用を数で示す時、それを数霊と呼びます。先に西洋の精神は三または六、東洋のものの考え方は四または八の数で示されることを話しました。実際の精神活動は自と他の交渉によって成立しますから基本数の二乗で示されます。相容れない西洋・東洋の基本活動の合計は$6^2+8^2=100$となります。これは言霊原理の基本数百と一致します。西洋精神と東洋精神をありのままに包容して人類生命全体として調和させることが出来る立場が、日本語の中に存在していることを証明

する一例です。

夜明け前の空が最も暗いといわれます。夜の満天の星が現在ほど輝いている時はありません。科学は過去の数十年の進歩をただの一日で遂げる勢いです。けれど、東方の水平線下に太陽は顔をのぞかせようとしています。光の気配を察して小鳥がさえずり出しました。このささやかな文章も小鳥のさえずりの一声です。日本人が自ら日常使っている日本語の輝くばかりの素晴らしさを知っていただくことを希望する一声なのです。

おわりに

「新しい酒は新しい革嚢（ふくろ）に」といわれます。

科学研究の成果が地球上に新しい時代をもたらそうとしています。この新しい時代を、今まで通りの考え方で生きようとしても、うまくいくはずがありません。古い革嚢は新しいものに取り換えられなければなりません。

新しい心って何でしょう。それは人間の文化が始まった時からあって、長い歴史の底を流れ、そして常に新しい未来を創造していく生命の原動力であるものではないでしょうか。

人間が新しい時代に生きていくための心であり、同時に言葉でもあるものとして『コトタマ学入門』をお話してきました。日本語とは、人間の生命の泉をそのまま汲み上げた珠玉のような言語なのだ、ということをお分かりいただけたら幸いと思っております。

そして日本語の中に秘められた人間の心と言葉の真実の法則に興味を持たれた方は、言霊学の深奥にお進みください。「人間の心とは何か」のすべてとともに、来世紀の世界の素晴らしい希望に満ちた歴史の展望を手中になさることが出来ましょう。

◆言霊の会発行既刊書紹介

『古事記と言霊』―『古事記』神代巻に則り人類精神の至宝であるコトタマの道の深奥に迫る言霊学の奥義書。併せて言霊原理より見た日本と世界の歴史とその将来（歴史編）を載せる。

（定価　一千六百円）

『コトタマ学会報集成書』―言霊の会発行の会報（第1号～第173号重複部分除く）の集成書上下巻。長く謎だった『大祓祝詞』を言霊学によって解き明かした号を掲載。

（定価　上下巻各千八百円）

著者略歴

島田正路　しまだまさみち

1925 年　東京銀座生まれる。泰明小学校、
　　府立一中、旧制水戸高校等に学ぶ。
1963 年　言霊の師、小笠原孝次氏に師事する。
1988 年　師の死後、「言霊の会」を創立、毎月研究会報を発行。
2009 年　12 月 28 日没。享年 84 歳

コトタマ学入門

― 人間の《こころ》と《ことば》の真実 ―

平成 12 年　2 月 13 日　第一刷発行
平成 16 年 10 月　1 日　第二刷
平成 22 年 12 月　1 日　第三刷
平成 26 年 10 月　1 日　第四刷
令和　2 年　3 月　1 日　第五刷
著　者　島田正路
発行所　言霊の会
　　〒145-0062　東京都大田区北千束 1-14-14
　　電話　03-3723-1105
　　振替　00120-3-653594　言霊の会
　　ＨＰ　http://futomani.sakura.ne.jp/
印刷所　昇美印刷株式会社

Copyright©1995 Masamichi Shimada
落丁・乱丁はお取替えいたします。